

博士論文

中華民国初期の社会思想と社会運動の興隆
——青年知識人の中国社会批判を中心として——

平成 27 年 9 月

広島大学大学院総合科学研究科

永見和子

目次

序章 新文化運動研究の今日的意義	1
第1節 本研究の目的	1
第2節 新文化運動とは何か	2
1 新文化運動の展開	2
2 時期区分をめぐって——新文化運動と狭義の五四運動——	2
3 新文化運動と五四運動の研究	3
第3節 新文化運動研究の新たな展開	3
第4節 本論文の視点について	6
第1部 民国初期の社会観と社会改革論の誕生	10
第1章 新文化運動の社会批判の思想的源流について	10
はじめに	10
第1節 社会批判の思想的起源	11
1 「社会」の語彙の採用	11
2 「一盤散沙」の由来と「群」論の起源	11
第2節 清末の社会認識	12
第3節 中華民国初期の思想状況	13
おわりに	15
第2章 中華民国初期の社会観の形成	
——傅斯年の『群衆』論をめぐって——	17
はじめに	17
第1節 従来の研究の成果と課題	17
第2節 傅斯年の略歴——新潮社時期まで	18
第3節 傅斯年の社会観の形成	
——1918年から五四運動前まで——	18
1 新しい学術の方法の探求に向けて	18
2 「社会」と「群衆」	19
3 中国「社会」に対する構造的把握の試み	21
第4節 五四運動後の傅斯年の社会観	21
1 五四運動と傅斯年	21
2 「社会的責任心」の形成	22

3	農村調査	24
第5節	中国社会改造——旧社会の崩壊から再生に向けて	25
1	社会改革への提案	25
2	新しい文化の創造へ	26
3	群衆と個人——傅斯年の見解——	27
	おわりに	28
第2部	社会運動の興隆	
	——五四運動後の青年の思想と行動——	34
第1章	少年中国主義の成立と展開	
	——新文化運動期、王光祈の社会改革論——	34
	はじめに	34
第1節	少年中国学会研究の成果と課題	35
第2節	少年中国学会の根本理念の検討	36
1	少年中国学会の成立と王光祈	36
2	少年中国学会発起時の根本理念	37
3	1919年の宗旨（新宗旨）の新たな展開	38
①	近代の科学的精神	38
②	社会的活動	38
③	少年中国の創造	39
第3節	王光祈の少年中国主義	40
1	王光祈の少年中国主義の特徴	40
2	社会改革論の形成に向けた王光祈の試み	41
3	「中国社会」についての王光祈の試論	42
	おわりに——王光祈の中国社会改革論の行方——	43
第2章	恽代英と少年中国学会	
	——1920年前後の恽代英の軌跡——	49
	はじめに	49
第1節	恽代英研究の課題	50
第2節	恽代英と少年中国学会	51
1	恽代英の少年中国学会入会の経緯	51
2	恽代英と少年中国学会運動	52

序章 新文化運動研究の今日的意義

第1節 本研究の目的

1910年代後半から1920年代前半において、北京大学を拠点に展開した新文化運動は、「倫理の覚悟こそ我等最後の覚悟の最後の覚悟である¹⁾」という自覚から、近代的精神革命の実現を目指して取り組まれた。それは、前代の清朝のもとでの戊戌変法運動から辛亥革命までの政治変革が、失敗したことに対する深刻な考察から出現した社会性を帯びた思想運動であった。それは、西洋科学思想によって中国社会に思想革新をもたらすとともに、新しい社会運動の主体として西洋思想の洗礼を受けた知識青年層を誕生させた。

新文化運動は、元来それ自身の中に二つの要素をもっていた。即ちその一つは、社会的政治的要素であり、当初から、中国の社会と政治に対する批判意識を基礎にしており²⁾、1919年5月4日に始まる反日運動を経て1920年代に入ると、社会運動の発生を導き、やがて国民革命への政治変革の流れを生み出した。もう一方の要素は、文学革命、倫理革命をへて、西洋近代科学の導入により中国の新しい学術の担い手が形成され、さらに彼らによって科学運動が生み出され、近代的学術体制の形成や文化建設につながっていく。この二つの要素は、運動当初においては一体として推進され矛盾しなかったが、やがてそれは分離していった。

新文化運動は通説的には1915年より始まるとされるが、1917年以来、北京大学を拠点にして、雑誌『新青年』を中心に新文化を推進するグループが形成されると本格的に展開されていった³⁾。さらに1918年末から1919年は、世界の新思想の導入による思想的転換期であり、新文化運動に含まれた前述の二つの要素の分化が始まった。この時期に提起されたのが、中国社会批判論であるとみなされる。

この時期は、中国の内外ともに戦争から平和への転換期に当たる。1918年9月、文人出身の徐世昌が大総統に就任し、国内の南北勢力による内戦を終結させた。第一次世界大戦は、11月によりやく終結を迎え、大戦中、交流が途絶えていたヨーロッパからは、戦後の革新的な新思想が中国に流入した⁴⁾。さらに米国からはジョン・デューイ、英国からはラッセルなどの思想家や文化人も中国を長期間訪問し、新思想を広めた。

この新思想の影響を受けたのが北京大学をはじめとする各大学・各種中等学校の学生などの知識青年層であった。世界大戦直後の政治的激動期にあったヨーロッパから中国に入ってきた社会思想は、個人主義的自我に目覚めたばかりの青年知識人たちに思想的影響を与えて、彼らが世界に目を開き、中国社会へ目を向けていく契機になった。青年知識人は、清末以来活発化した士大夫のネットワークに加え、新文化運動の影響を受け新しい思想的要素をもって「学会」を組織した。学会は彼らの活動の舞台であった。彼らは、雑誌を創刊し、一方では、平民教育運動や街頭での宣伝等の啓蒙活動に従事した。

青年知識人が社会を認識する上で、彼らを導きその思想的基礎となっていたのは、清末に紹介されて以来、当時の中国社会に広く普及していた社会進化論や社会有機体理論である⁵⁾。この思想的土壌が、第1次世界大戦後の激動する世界からもたらされた新しい社会思潮の受け入れを容易にさせたと考えられる。新文化運動における伝統社会批判の立場からする「中国社会をどう見るか」という問題意識は、当時の中国が置かれた国際的危機の高まりからやがて「中国社会の変革」の課題に転じ、「造社会」論が出現した。

中国の伝統的学術の世界から出て、西洋の学術を学び始めたばかりの青年知識人が、この課題に取り組む際、理論的根拠とされたのは前述の社会有機体論であった。そこには、現実の「散沙」のごときバラバラの中国社会を全体として有機的な統一に改造していきたいという強い願望があった。

当初、社会運動は新文化運動の思想的影響を受け、政治運動を拒否し教育と実業の方面の改革運動を唱えたが、やがて、あらたに唯物論的社会観が取り入れられていくようになり、「造社会」論も変容を強いられる。その変化を通じて1920年以後、新しい社会運動が生み出される状況が生じていった。

本論文においては、中国社会に対する社会観の成立・形成と社会運動の発展との関連に注目して、その成立過程を歴史的経緯から探究することを課題とする。具体的な対象としては、新文化運動に啓発され、新文化運動に参加し、やがて社会運動へと進んだ青年知識人の中から、傅斯年、王光祈、恽代英の3人を選んだ。その理由は以下の如くである。彼ら3人は、中国社会の特殊性を注視することを通じて、中国社会の底辺に存在し続けた民衆を発見した。その社会認識の成長過程は、中国が国際社会の影響を受けながら、政治的経済的に大きく変化する状況の中で可能となった。このことは、これまで十分に論じられることの無かった側面であり、新文化運動の全体像を構築するための基礎作業ともなるはずであると考えられる。

第2節 新文化運動とは何か

まず、傅斯年、王光祈、恽代英ら青年知識人が登場した背景であるが、これは既に論じられてきたように、清末の教育改革で設立された教育制度と大きく関係がある。彼らはいずれも読書人家庭の出身で、1890年代に生まれ、新設の小学堂・中学堂を経て、大学に学んだエリートであった。彼らは、10代の頃、辛亥革命を体験し、新しい時代を展望した。新文化運動の影響を受け、運動の広がりの中で、自身がその中へ参加していった。

かつて、傅斯年に対しては、大陸側ではその反共を理由に歴史上の抹殺が行われ、台湾では蒋介石親子の独裁政治を批判したことにより永くその存在は葬られていた。王光祈・恽代英の所属した少年中国学会に対しては、大陸では思想上の対立により活動を中止した知識人の組織として、極めて否定的な評価がなされた。台湾では、ユートピア的理想を追った団体とみなされた。

筆者は、彼らの事績を評価するためには、彼らを思想的に育み、彼ら自らが参加した新文化運動とはどのような運動であったかを、今日の時点であらためて確認する必要があると考えた。

新文化運動との関連から彼らの社会思想や社会運動の興隆を論じることによって、彼らを歴史的存在として位置付けることができ、その結果、本論で青年知識人を取り上げる筆者の意図がより鮮明になると考えている。新文化運動は、今日どのように歴史学で論じられ、中国近代の中に位置づけられているのだろうか。以下に略述したうえで、筆者の新文化運動に対する理解を提示する。

1 新文化運動の展開

新文化運動の起源から論じる。新文化運動は、通常陳独秀が1915年9月、上海において個人雑誌『青年雑誌』を発刊したことに始まるとされている。当初は読者層を青年に定め、個人雑誌の域を出なかった。同誌は、翌年9月に『新青年』に改称したが発行部数は少なく、発行の維持は困難を極めていた⁶。『新青年』を拠点にした陳独秀の思想運動が実質的に影響力を発揮し始めるのは、1917年はじめ、蔡元培が北京大学校長に就任し、陳が文科学長に招かれて以後である⁷。

さらに1918年1月『新青年』第4巻第1号より、陳独秀の個人編集から北京大学の新思想派の教員グループからなる編集委員体制が発足し、北京大学に新文化運動推進グループが形成された⁸。さらに、1918年11月、第一次世界大戦が終結し中国が戦後の世界という新しい国際環境に入っていく段階では、新文化運動は、多数の知識青年の参加を得て「新思潮の運動」へと展開を見せた⁹。

北京大学では、『新青年』同人の教員の影響を受けた北京大学の学生が、1918年末から文化運動団体を数多く組織してきた¹⁰。北京大学は、教員だけでなく学生を含めた学術と思想の革新の中心地となった。その中で、北京大学の文科系学生が組織し、雑誌『新潮』を刊行した新潮社¹¹の言論活動は、『新青年』と並んで全国の青年学生に対して大きな思想的影響を与えた。つまり、新文化運動とは、1917年以後、北京大学において『新青年』グループの教員とその影響を受けた学生を中心に展開されてきた文化運動であると筆者は考えている。

陳独秀は、1919年5月4日から始まる愛国運動で、6月11日ピラを撒いて逮捕された。3か月拘禁され9月16日出獄し、北京大学を辞任した¹²。彼は、1920年はじめに『新青年』を携えて北京から上海に戻った。陳が1920年9月、『新青年』第8巻第1号に「論政治」や「對於時局的我見」を発表して以後、新文化運動を推進してきたグループが次第に思想的に分岐していった¹³。新文化運動の終了時点は未だ確定しない。

2 時期区分をめぐって——新文化運動と狭義の五四運動——

新文化運動と1919年5月に起こり全国に波及した五四運動(狭義の五四)とを合わせて、広義の「五四運動」または「五四」とする立場もある。今日も中国では、同時期に起こった新文化運動と五四運動を合わせて「五四」として時期区分の表示に使用して、近代における歴史的特徴を持った時期であると見なしている。この場合、時期設定には定説がない¹⁴。筆者は、両者の歴史的な性格は異なっており、明白に区別されて表記されるべきであると考えた。

日本の学界では、1970年代に、「五四運動は、山東利権の日本からの回収運動であり、「反日・反安徽派」の性格を持つ」と定式化した¹⁵。即ち、狭義の「五四」である。現在、日本の学界では五四時期という名称は、時期区分の基準としては使用されなくなった。

五四運動を新民主主義革命の出発点とする中国共産党のかつての新民主主義革命史観は、日本ではすでに否定された。即ち「五・四運動とは1919年5月4日に北京で起こった学生運動のことである。次に、それを起点とし中国全国各地に広がった一定期間にわたる運動のことである」と定義されている。政治史から時期区分を行う中華民国史観では、五四運動は北京政府期に起こった一事件とみられている。

そこで本論文では、中国で通常使用される広義の「五四」は使用せず「新文化運動」で統一する。狭義の「五四」即ち五四運動とは、5月4日の北京における学生の抗議行動から始まり、6月28日に中国代表の講和条約調印拒否までの一連の反日民族運動である¹⁶。

一方、新文化運動は、政治的・文化的・思想的な豊かな成果を中国にもたらした。中国近代史に占める重要な意義は、近代の個人主義が開花したことであり、又、北京政府が存在しながら、軍事的な分裂割拠状態にあった中国から統一した民国を生み出す社会的原動力を作り出したことである。それゆえ、それぞれの分野において豊かな研究が積み重ねられている¹⁷。

筆者は、先行研究に学んで、新文化運動が中国の近代の出発点において、中国のその後の近代を生み出していった運動であり、本論で扱う3者も中国近代を生み出す運動の中に位置づけることができると考えた。彼らの思想と行動は、中国の多様な発展の出発点となったのである。

3 新文化運動と五四運動の研究

狭義の五四および新文化運動は、今日まで中国の政治情勢と関連しながら論争の焦点となった。二つの運動は、中国の政権と民衆のおかれた政治的立場に応じて、それぞれの時期に異なる政治的立場に立つ人々から、異なる言説が発せられて毀誉褒貶を受けてきた。

二つの運動が、特に論争的テーマとなっていくのは、1930年代の日中戦争時期であり、共産党系の知識人が唱えた「新啓蒙運動」のなかの「民主主義」観が、新民主主義史観に取り入れられ、新文化運動を含む広義の「五四」は、新民主主義革命の開始として中国共産党の歴史観に組み入れられた。これが、中華人民共和国成立以後「公定史観」となった。

第二次世界大戦後の「国共」対立の形勢の中で、新文化運動に対する中国と台湾の研究の視座は厳しく対立した。これに対し、自由主義派の胡適は、1958年、新文化運動をヨーロッパ近世の文芸復興運動（ルネッサンス）に比べた。彼は、「政治運動が文化運動を押し流した」とし、二つの要素の違いを強調して、新文化運動が「文芸復興運動」であったと強調した¹⁸。

1960年に出版されて、今日でも高く評価されているChou Tse-tsung(周策縦)の*The May Fourth Movement: intellectual revolution in Modern China*¹⁹では、新文化運動と五四運動を合わせて五四運動としている。それは、1917年から1921年までとし、広い意味における「知識革命」ととらえている。

1986年出版の米国のVera Schwarcz, *The Chinese Enlightenment Intellectuals and the Legacy of the May Fourth Movement*²⁰も、五四運動を啓蒙運動と位置づけ、近代的な「知」の啓蒙運動としてとらえた。シュウォルツの著作は、後に中国において有数の知識人となった『新潮』グループを中心に、五四運動を担った世代の知識人を長期にわたって個人取材し、彼らの足跡をたどった労作である。総じて米国の研究は、胡適の指摘と同様に、新文化運動の近代的側面に着目し、それがもたらした思想的・文化的な成果を検討しており、共産党の革命運動の起点とする立場とは異なっていた。筆者はこうした研究環境の複雑さを前提としながら、最近の研究に学びつつ、新たな研究課題を設定したいと考えた。

第3節 新文化運動研究の新たな展開

本研究で取り上げる傅斯年、王光祈、惲代英に関する先行研究の成果と課題については、第1部第2章以下で具体的に論じることとするが、本節では、近年の新文化運動研究の全体的な成果と課題についてまとめておきたい。

新文化運動を啓蒙運動と位置づけた研究は、1970年代から起こり、1980年代から90年代前半に広く支持された。新文化運動研究上の要となった問題は、『新青年』グループの思想上の歴史的位置づけであった。

『新青年』の詳細な分析を行った野村浩一は、1990年に発表した著書²¹で、『新青年』を拠点とした新文化運動グループは、中国の文明世界における崩壊感覚を共有し、旧文明に代わる文明の創造を問う共通の立場に立っていたとみなす興味深い観点を提示した。野村は、『新青年』が示す世界は、陳独秀・胡適・李大釗ら著名な論者ととともに、彼らのメッセージを受け止めた青年たちの営みを含む豊かな世界であるこ

とを指摘した。しかし、その学識において師と優劣をつけがたい青年たちが推進した新文化創造や社会運動の具体的な内容については触れていなかった。本論文で傅斯年、王光祈、恽代英の三人を取り上げる所以である。

英国の Rana Mitter は、2004 年に、*A Bitter Revolution: China's Struggle with the Modern World* を出版した²²。ミッターは五四運動と新文化運動が 100 年近くもの間、歴史的・政治的論争の対象になってきたのはなぜかと、問題を提起した²³。それに対するミッターの答えは、次のようにまとめられる。

- ① 新文化運動期に提示された近代をめぐる諸問題が、今日も中国にとって未完の課題である。
- ② 新文化運動期の時代評価では、かつて、辛亥革命後の時期を暗い時代とみなす傾向が続いたが、近代の開始時期であるこの時期は短い、多くの点で知的にも社会的にも中国の歴史の中でもっとも可能性に満ちた時代の一つであった。
- ③ 政治・社会と密接に関連した「新文化運動」と「五四運動」に対する認識が動揺するのは、中国において歴史認識の循環性があるからである。

同書は、新文化運動・五四運動の起こった近代中国の一時期を、中国近代化に向けて極めて重要な課題を提起した時代であると考えている。そして、その課題を提出した時代が持った開放性とその時代が個人の発展を可能としたことを評価している。

同書のもつ特色として、北京・上海という代表的都市で展開した知識人の近代的都市文化の展開を跡付けていることが挙げられる。それに対して、筆者は知識人の中国社会認識、農村社会認識についても考察を深める必要があると考えている。確かに中国近代化の起点はミッターの言うように、都市にあるとしても、この時期、農村社会をどのようにとらえるかは、中国知識人にとって避けることのできない課題となったと考える。それ故に傅斯年が、農村の実情を観察し、報告を行った事実注目する。青年知識人が農村社会と農民の存在に視点を向けたことは、時代を画する意義があると考えられる。

2004 年、坂野良吉により日本の五四運動研究に対する重要な一つの疑問が投げかけられた。すなわち、1970 年代後半より、日本の五四運動研究が、新民主主義史観を克服し、豊富な蓄積を生み出したことを高く評価するとともに、五四運動を「山東権益返還の反日ナショナリズム」として限定したことにより、それがもつ文化的思想的意義の過小評価が生まれたと批判した²⁴。坂野の意図は、国民革命研究者の立場から、五四運動の興起した時期が中国近代史上に占める政治的画期性を語ろうとしたことにある。

坂野は、五四研究の原点即ちその初心は民衆史にあったと指摘し、「五四の文化論的テーマ」とは、すなわち政治的主権者意識の覚醒による国民形成を指している。坂野は、新文化運動、五四運動が切り開いた時代の画期性とは、主権者としての国民の自覚を追求したところにあると主張している。

さらに、坂野は五四運動直後から 1923 年頃までを国民革命への「過渡期」とみなし、同時に「五四時代」と呼ぶことにするといい、自らの時代区分論も提出した²⁵。その議論において坂野は、国民革命とのつながりを重視し、五四運動から「過渡期」を経て直接に「国民」としての政治的自覚が進んだとみなしている²⁶。

その意とするところは、啓蒙による個人主義の覚醒から、さらに政治的社会的覚醒を含んでいるとみられるが、既に新文化運動研究では、「啓蒙」の視点に立った思想・文化研究が蓄積されており、新文化運動により自我に目覚めた知識青年の個人主義は、これらの研究により探究が進められていたのである。もし坂野が、新文化運動において近代思想史上重要な課題である個人主義が形成された事実との関連を軽視して、政治的な面からのみ国民主権の形成の画期として五四運動の意味を強調するならば、新文化運動期の社会的批判論のもつ重要な意義を無視していると思われるのではないかと筆者は考える。

筆者はこの 1920 年代の「国民」の政治的自覚に先行して、新文化運動においては、個人主義に立った伝統社会への批判から、社会に対する責任心という自覚が進んだ時期であると考えている²⁷。時代の認識の発展過程をより広い認識過程からみるべきではないだろうか。

一方、1980 年代の啓蒙の課題と、次いで 90 年代の愛国主義が高揚する過程を経て、21 世紀に入ると中国でも新たな研究潮流が生まれてきた。たとえば中国における五四運動研究においては、1980 年代に 1930 年代の「啓蒙観」が復活したが、楊念群は、その歴史認識の変遷を、以下のようにまとめている。

文化大革命の終結後、1979 年の五四 60 周年は、五四を「新民主主義の開始」と位置づける公定的五四観からの解放の始まりであり、重要な転機であった。1982 年の中国共産党第 11 期第 6 回中央委員会全体会議の「建国以来の党の若干の歴史的問題に関する決議」で、新民主主義史観は捨て去られた。八十年代半ば以来、公式の五四評価から解放されて、「費小姐」という自由主義の新たな視点を手に入れた中国史学界は、「五四」を民主主義と科学の「新啓蒙運動」と再定義した。しかし、1989 年の

自由主義運動の挫折以後、五四運動は思想解放運動から、政治主義へゆれ戻しがあり、1992年、公式に「愛国運動」と再々定義されることになった²⁸。

その後、五四運動90周年（2009年）前後に新しい問題提起があった。まず、耿雲志が五四運動90周年の国際学術研究会で、現時点での総括的な研究整理を行い²⁹、新文化運動を「個人の発見と個人解放の運動であった」と定義した。耿雲志は、共産党の公式史観とは別の立場に立ち台湾で活動した胡適や殷海光の主張を継承して、五四新文化運動がヨーロッパ近世の「啓蒙運動」の性質と「文芸復興」の特徴を合わせ具有するという彼らの主張を受け入れている。

耿雲志は、新文化運動と五四運動を区分し、新文化運動は大体1916年あるいは1917年に文学革命から起こったとみる³⁰。文学革命から次第に思想解放と文化革新運動（個性主義、女子解放、自由平等、専制主義と宗法倫理の批判、孔子の打倒と儒学一尊の否定、移風易俗等の提唱）へ展開した。これに対し、五四運動の方は、純然とした愛国的政治運動であると規定した。

耿雲志は、二つの運動の関係について、五四運動の爆発前には、新文化運動の影響の範囲は極めて限られ、その及ぶ地域や社会階層は限られていたが、その洗礼を受けた青年学生が民衆の中へ新観念を伝播させたと指摘している。さらに耿は、二つの運動は極めて密接であるが区別があり、完全には同一視できないとした。

清末民初と新文化運動期のちがいについては、国家本位から個人本位への転化にあり、それぞれの時期に組織された社会団体の精神や奮闘目標もその特徴にちがいがあるとした。また青年知識層が組織した後者の時期の社会団体の特徴として、覚醒した個人が結合していることにも注意を促している。

耿雲志は、現在も激しい批判、甚だしくは攻撃を受けている五四運動と新文化運動の負の側面を五四研究上重要な課題とみなしているが、それを主流として誇大視することに賛成しない。新文化運動の負の影響とは、三つの方面、即ち、急進主義、汎政治化、群衆運動への迷信である。中国の急進主義の根源は、社会内部に深く潜んでいるのであり、一個人、一群の人々にその責任を負わせることはできない。この急進主義を克服するには、中国の政治が健全な発展の軌道に進み、民主が中国の社会にしっかりと根を下ろす事や、伝統的な忠恕の道徳を普及することが重要であると述べている。

耿雲志のこの観点は、基本的に啓蒙の視点であり、筆者も基本的に同意するが、新文化運動が当初より持ち、その運動の底流に存在し続けた社会批判の要素が軽視されていることを指摘せざるを得ない。2008年、並木頼寿は耿雲志の「新文化運動が近代の文化転換のかなめである³¹」と評価する文章を取り上げ、耿の新文化運動に対する見解を紹介したが、その見解に対して一定の疑念を表明している³²。耿雲志は、新文化運動が切り開いた文化革新の基本方向が、中国近代の文化発展の基本方向であると強調した。この方向に沿って発展しなかったのは戦争と動乱のもたらした故であるとみる。これに対して、並木は、耿雲志の見解に具体的な対案を提出しなかったが、「五四運動後に展開する人民革命の歴史は、やはり「頓挫と曲折」の時期なのであろうか」と言う。

筆者なりに並木の疑問を推察すれば、新文化運動は科学と民主など西洋の新知識を中国にもたらしたが、それは、同時に個性に目覚め社会の改革に邁進する知識人の変革運動をも生み出したのであり、後者にも十分注目しなければならないということになる。中国共産党の「公定史観」を否定することも重要であるが、20世紀を通じて受け継がれてきている社会変革の動きを無視すべきではないと筆者も考えるからである。

この点と関連して、近年の研究が提起した問題の中で注目されるのは、「社会」をキーワードとする研究である。前述したように五四運動90周年に当たる2009年、楊念群は、「五四」をめぐる公定史観の変遷をまとめたうえで、さらに楊は、自由主義的な立場からする新文化運動と五四運動研究を批判した。即ち、五四研究が思想研究に特化しすぎたことが、研究の行き詰まりを生んだ原因であり、新たに「社会」が当時の中国の社会運動と思想を解くキーワードであることを主張した。

楊念群は五四運動後、社会活動の呼び声が高揚したことを強調し、地方の知識青年の運動に注目し、彼らの運動が地域に根付き、地域の伝統的思想を継承した運動であることを明らかにしようとした。楊の議論の根底には、個人主義の重視から集団の重視への転換をどう見るかという問いがあり、極めて重要な課題設定を行ったと筆者は考える。

しかし、楊念群の研究は、個人の覚醒から「社会」がキーワードとなるに至るまでの経緯を思想的に十分根拠付けるまでにはいたっていないと筆者は考える。なぜならば、それぞれの地域の知識青年の社会改革に対する試みは、楊の言うように、地域の知的風土を踏襲しつつ興起していったが、彼らは地方の知的遺産に依拠するだけではなかった。彼らは新思想を求め、全国的なつながりを強く求めていた。それ故に、

地域と全体を結ぶ青年社団(たとえば少年中国学会)の存在に注目すべきであると考えている。本稿第2部で少年中国学会を取り上げる所以である。

最近の、五四期の社会や社会思想に対する関心が高まったことを背景に、思想と思想運動の関係の究明をめざしたのが、劉媛媛・王奇生の研究である。劉は、新青年グループが当時の保守勢力とどのように切り結びながら、その新文化運動推進勢力を拡大していったかを論じた³³。王奇生は、さらに、新文化運動において、知識人等による個人と社会の関係の考察が進んで、政治から社会への関心という転換が起こったことを指摘した。その転換の契機として社会改革が大きなテーマとして存在しているとした³⁴。このように、楊の提起した社会をキーワードにして民国初期の歴史を再考察する研究は、思想と運動の両面からも進んでいる。

本論文も社会をキーワードとする点では同じだが、分析の力点は思想史として問題を考察したいと考えている。この点に関して、参考となるのが許紀霖の研究である。許紀霖も同じく社会運動としての「五四」に注目するが、思想史の方法を用いて、五四運動を社会運動とみなし、その特徴を解明しようとしたのである³⁵。

許紀霖は台湾の王汎森の傅斯年研究³⁶の影響を受け、新文化運動期の知識青年の思想変化を探究して、その社会思想が、清末の啓蒙思想の系譜につながっていることを見出だした。許紀霖は、金觀濤の公共領域理論³⁷も用いて、この五四運動以来登場した学生・知識青年を都市の近代知識人として、新しく成長する社会階層として把握しようとしている。彼らの研究とそれに対する筆者の立場は、第一部第2章の研究動向で触れている。

許紀霖・楊念群両氏の新しい問題提起のもつ意味を考察したのが吉澤誠一郎である³⁸。吉澤の行った両者の主張の整理によると、許は、新文化運動時期の思想は、個人主義と普遍的な世界主義の精神にあったことを強調し、一方の楊は、リベラリズムによる「個人主義」的な五四運動解釈は、五四運動の精神を狭めたと言い、当時の知識人が抱いた「社会」に対する関心の強さを強調している。

このように、吉澤は両者の主張を対比し、両者の違いを、「リベラリズムについての考え方の相違からくるものである」と指摘している。さらに、1980年代の中国の文化状況が、五四に個人解放や民主の理念を強く読み込もうとする傾向を生んだと、指摘している。筆者はいわゆる「五四の自由主義とは何か」に対して吉澤の言うように更なる考察が必要であると考えている。

さらに筆者は、先行研究に学びつつも、この時代に個性の発展と社会性の発展を重んじる思想と一緒に入ってきたという傅斯年の指摘を踏まえて、新文化運動においては、個人主義と社会に関する関心の高まりを対立するものではなく、前近代社会から近代社会へ転化に向かう社会が持った複雑な関係であり、両者は共存した思想潮流であったと考える。

第4節 本論文の視点について

前節において、社会をキーワードとする研究が開始されたことを紹介した。本論文は、社会を中心に論じるという点では同じだが、分析の主要な力点は思想史として社会認識の発展、社会思想の形成、社会運動の発展の問題を考察しようとする立場である。「群衆」と「社会」、個人主義の三つのキーワードを使用して中国近代思想史の中に、新文化運動期の社会思想を位置づけようとした。

第1部「民国初期の社会観と社会改革論の誕生」第1章「新文化運動の社会批判の思想的源流について」では、新文化運動の社会認識を論じるに当たり、先行研究を整理する形で、まず、社会(Society)の発見から論じた。社会思想史の理論では、近代において、市民社会が成立することによってはじめて、人々は社会を発見したといわれている。資本主義社会の西洋社会とは異なり、資本主義の未発達な中国において、社会の認識はいかに行われたのであろうか。すなわち清末から民国初期の知識人は、どのように中国を社会として認識していったのか、その社会認識は、中国社会を分析する上で有効なものであったのか否かを問う。それは次章で傅斯年の社会観を議論する前提となるものである。

第2章「中華民国初期の社会観の形成」では、今日、人物研究の段階から社会思想研究へと多方面において進展してきた傅斯年研究、特に台湾の王汎森、中国の馬亮寛による傅斯年の社会思想研究に学びつつ、傅の新文化運動期の中国社会批判を検討することを通じて、彼の初期の社会思想の特徴を分析しようとした³⁹。傅の社会観は、清末の社会批判を思想的起源とする啓蒙的社会観の影響を受けながらも、それとは異なる明確な社会批判の立場に立つものであったことを明らかにする。

第2部「社会運動の興隆」では、傅と同時期に新文化運動に登場した青年知識人の中で、五四運動収束直後に成立した少年中国学会とその主要な指導者であった王光祈と憚代英の思想と行動をとり上げる。少

少年中国学会は、五四運動に参加した後、新たな方向を模索していた青年知識人1 期待に応えようとした。それは、新文化運動の社会批判と造社会論を受け継ぎ、地方と全体から青年の組織化を進めようとした団体であった⁴⁰。

彼らの考えた社会運動は、かつて、知識人を否定する政治的傾向の下で、全く評価されなかった。近年の見方は、少年中国学会を自由主義的な文化学術団体と規定する。これに対して、本論文の立場は、社会運動団体と規定した。

第1章「少年中国学会の成立と展開」では、焦点となる王光祈の社会改革論を取り上げた。次に、第2章「恽代英と少年中国学会」では、少年中国学会時代の恽代英の思想と実践が、新文化運動期の社会観と社会運動の深化した一つの在り方であったことを示す。少年中国学会で、社会活動の課題を共有した王光祈と恽代英の間に分岐が生じる由来を考察するが、そこで提起される課題は、今日中国で論争課題となっている「個人主義」「個人から集団への転換をどう見るか」とも関連する課題である。

第1部と第2部との関連を確認しておくとして、傅斯年と王光祈の間には、共通する時代意識があり、王光祈は傅斯年の社会認識と社会改革の理論を共有し、実際に試みようとした人物であると考えられる。最後に「群衆」、「社会」、「個人主義」の3つのキーワードを使用し、中国近代思想史の歴史過程の中に、新文化運動の社会思想を位置づけ、新文化運動期の青年知識人の社会思想と社会運動を概括的にまとめる。

註

- 1 陳独秀「吾人最後之覚悟」『青年雜誌』第1巻第6号、1916年。陳独秀等著王中江、苑淑婭選編『新青年』中州古籍出版社、1999年、110頁。
- 2 北京大学の新文化運動の実質的な指導者であったと目されるべき北京大学校長蔡元培は、袁世凱が代表していたのが、当時中国社会に存在する「官僚、学究、方士」であり、これを三大反動勢力であると述べていたが、この勢力との対決が新文化運動の底流にあったことは確実である。傅斯年「陳独秀案」初出は1932年10月30日『独立評論』第24号、『傅斯年全集』第4巻、45頁。
- 3 『新青年』を中心とする新文化運動の成立過程に対する具体的な研究は、王奇生『革命与反革命 社会文化視野下の民国政治』（社会科学文献出版社、2010年）の第一章「新文化是如何「運動」起来的」に詳しい。新文化運動の名称は、五四運動後に広く使用されるようになった。当初は、「新思想」「新思潮」「新文化」という呼称であった。1919年後半から使用されるようになり、文化思想運動として意識されるようになった。
- 4 羅家倫「今日之世界思潮」『新潮』第1巻第1号、1919年1月。
- 5 社会進化論と社会有機体論について要約すると次のようである。社会進化論とは、「社会の歴史的変動を生物進化との類比によって証明しようとする理論」である。社会有機体論とは、「社会を機械論的にとらえる見方や単なる個人の総和としてとらえる見方とは反対に、社会を生物有機体のアナロジーでとらえる社会観の総称。この社会観においては、社会の各部分の意味や役割は社会全体の中で初めて与えられる」。代表的な社会有機体論者であるフランスのコントとイギリスのスペンサーの主張は、コントの場合、「時代遅れとみなしたルソー流の社会契約論に代わり、生物学的研究に有機体的視点を導入し、社会の静学と動学を構想した」。一方、スペンサーは、「生物体が単純なものから複雑なものへと分化・発展していくように、有機体としての社会が分化・発展していくという社会進化論を唱えた」。コントやスペンサーの社会有機体論は進歩主義的・啓蒙主義的色彩を帯びていたとすれば、ドイツ語圏での社会有機体論は、ロマン主義的、歴史主義的、ナショナリズム的色彩の下に展開された。それは、国家有機体説と称される。廣松渉他編集『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年。社会有機体論は、新文化運動推進グループの共通の認識であり、『新青年』誌上では、陳独秀や胡適が詳細に論じていた。その内容については、第1部第1章で触れている。
- 6 『青年雜誌』は、1915年9月から1916年2月まで第1巻第6号まで発行し、同年3月に休刊した。半年後の9月に『新青年』と改称して復刊したが経営は安定しなかった。
- 7 陳は、『新青年』の拠点を上海から北京に移すが、同誌の業務は当初からの群益書社が取り扱った。
- 8 1917年初めの北京大学の新文化運動推進派の形成については、劉媛媛「兼收併蓄」下的「新旧之争」——1917—1919年北大内部国故派与新文化派的対峙」（布占祥・馬亮寬編『傅斯年与中国文化』天津古籍出版社、2006年所収）に詳しい。
- 9 第1次世界大戦休戦直後に羅家倫は「今日之世界新潮」において、世界と隔絶していた中国に新しい社会革命の思想潮流が流入して来るであろうと書いている。『新潮』第1巻第1号、1919年1月。
- 10 北京大学では、新潮社のほかに、愛国主義的傾向を持つ国民社が10月に成立し、翌1月雑誌『国民』を發刊した。学外では、7月に王光祈ら四川出身の学生と李大釗が少年中国学会を發起していた。少年中国学会については、第2部第1章「少年中国主義の成立と展開——新文化運動期、王光祈の社会改革論——」を参照。
- 11 新潮社は、1918年10月より組織の準備を開始し11月、21名で発足した(1918年12月3日『北京大学日刊』に「新潮社雜誌社啓事」が掲載されている)。北京大学の財政的援助を受けて、1919年1月、雑誌『新潮』を發行した。その活動は、雑誌『新潮』の發行であり、同人誌のグループから出発し、翌年学会組織となった。前掲『五四時期的社團』（2）。
- 12 陳独秀は、9月16日出獄した。北京大学の評議会は、蔡元培が大学に不在であったこともあり、正式に陳を文科学長から辞任させた。陳は国史館編纂に招聘された。唐宝林、林茂生『陳独秀年譜』上海人民出版社、1988年、106頁。
- 13 『新青年』は1923年12月『季刊新青年』第1期が共産党機関誌として發行された。以後も、雑誌そのものは1926年廃刊まで継続出版されていった。
- 14 王奇生は、五四時期を三区分し、「前五四」時期を1915年から1918年、五四時期を1919年から1922年、「後五四」時期を1923年から1926年までとしている。王奇生『革命与反革命 社会文化視野下の民国政治』社会科学文献出版社、2010年、73頁。
- 15 齊藤道彦『五・四運動の虚像と実像』中央大学出版部、1992年。
- 16 同上。
- 17 学術史からの接近では、特に、新文化運動を源とし、それが生んだ成果である中国歴史学・考古学の発展に関する竹本規人の一連の研究がある。「近現代中国における考古学の命運——歴史をめぐる「伝統」と「近代」」高柳信夫編『中国における「近代知」の生成』東方書店、2007年、「顧頡剛、傅斯年の上代史研究と民族論・疆域論」『中国哲学研究』第24号、2009年等。
- 18 胡適「中国文芸復興運動(1958年5月4日)」胡明主編『胡適精品集』第15巻、光明日報出版社、1998年。歐陽哲生「胡適在不同時期对「五四」的評價」『二十一世紀』香港中文大学中国文化研究所、第34期、1996年。

-
- 19 Chou Tse-tung *The May Fourth Movement: intellectual revolution in Modern China* (Harvard East Asian Studies 6, Harvard University Press, 1960)。中国訳には、陳永明等訳、『五四運動史』岳麓書社、1999年などがある。
- 20 本書は新潮社に関する代表的専著である。微拉・施瓦支、李国英他訳『中国的啓蒙運動——知識分子与五四遺産』1989年、山西人民出版社と、著者名を舒衡哲として、劉京建訳が、2007年に新星出版社から再刊されている。本書に対する中国の学会の関心の深さが示されているといえよう。
- 21 野村浩一『近代中国の思想世界—『新青年』の群像』岩波書店、1990年。
- 22 Rana Mitter、*A Bitter Revolution: China's Struggle with the Modern World* [Oxford: Oxford University Press, 2004]。吉澤誠一郎訳『五四運動の残照——20世紀中国と近代世界』岩波書店、2012年。
- 23 ミッターは、「近代」中国を理解しようとするためには、中国の五四観即ち新文化運動と五四運動に対する見方を見るのが肝要である」と、指摘するが、新文化運動の中国近代史上の位置づけは、今なお定まっていないというのが現状である。
- 24 坂野良吉「五四観の諸相と五四の文化論的テーマについて——1920、30年代の五四観を中心に——」『名古屋大学東洋史研究室報告』第28号、2004年。
- 25 坂野良吉「国民革命と現代中国」『名古屋大学東洋史研究室報告』第20号、1996年。
- 26 国民革命との関係からとらえる坂野氏のこの指摘は、1940年代の傅斯年の「五四論」の中にも見出すことができる。
- 27 かつて筆者は、五四運動の民衆の中に「国民意識」と「社会認識」の芽を見出し、上海の民衆、即ち労働者が「労働者のストライキは、元来、国のため民のために起こしたものだ」と国民主権と基本的権利の行使を主張したことを指摘した。徳毛(旧姓)和子「五四運動と上海労働者」『史学研究』第110号、1971年、35頁。
- 28 楊念群『“五四”九十周年祭——個“問題史”的回溯與反思』世界図書出版社、2009年。
- 29 耿雲志「關於五四新文化運動的幾個問題」は、科学院近代史研究所編『紀念五四運動九十周年國際學術研討會論文集』上冊(社会科学文献出版社、2012年)の総論冒頭の論文である。
- 30 耿氏は、その理由として、文学革命は、通常1917年1月発表の「文学改良芻議」から開始したという定説があるが、実は、すでに1916年10月、胡適と陳独秀の間で交わしたこの問題についての書簡を発表しているからであるとする。ここに見られるのは、新文化運動は、陳と胡による文学革命の提唱から開始するという見方である。
- 31 耿雲志『近代中国文化轉型研究導論』四川人民出版社、2008年、8—9頁。
- 32 並木頼寿・井上裕正『世界の歴史19 中華帝国の危機』中央公論新社、2008年、463—466頁。
- 33 前掲劉媛媛「兼收併蓄」下の「新旧之爭」——1917—1919年北大内部国故派与新文化派的対峙」。
- 34 王奇生「新文化運動如何「運動」起来的—以『新青年』為視點」中国社会科学院近代史研究所民国史研究室・四川師範大学歴史文化学院編『一九一〇年代的中国』社会科学出版社、2007年。
- 35 許紀霖「作為社会運動的「五四」」『學術月刊』第41卷5月号、2009年5月。
- 36 王汎森「傅斯年早期的「造社会」論」『中国文化』第14期、1996年12月。
- 37 金觀濤・劉青峰『觀念史研究——中国現代重要政治術語形成』法律出版社、2009年12月。
- 38 吉澤誠一郎は、2009年に発表された許紀霖と楊念群の論文を紹介した際、二人の「五四」解釈において「個人主義」と「社会」をめぐる見解の違いを取り上げた。さらに、過去においてこの時期の歴史上の人物・事件に対する価値判断が、政治性を有した歴史観に大きく左右されてきたという歴史があるだけでなく、今日においても、個人主義評価をめぐる相違は、「中国の今後がいかにあるべきか」の考え方の相違が反映されており、「五四をめぐる歴史認識は、今なお中国において非常に現実的な意味合いをもって論じられている」と、指摘した。吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手掛かりに——」『思想』2012年9月号147頁。吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残照』を手がかりに——」『思想』、2012年9月号。
- 39 前掲王汎森論文「傅斯年早期的「造社会」論」や、馬亮寛『傅斯年社会思想史研究』は近代思想史研究の中に新文化運動期の思想を位置づけた労作である。
- 40 少年中国学会の先行研究については、第2部第1章参照。

第1部 民国初期の社会観と社会改革論の誕生

第1章 新文化運動の社会批判の思想的源流について

はじめに

日本における中国思想史研究においては、小野川秀美が清末の進化論と新民説が新文化運動の思想的支柱となったと述べて、両者に継承関係があることを指摘している⁴¹。最近では、藤井隆が、戊戌変法運動と新文化運動の関係に言及した。藤井は、戊戌変法運動が儒教批判を欠如させている点で新文化運動と比較して徹底さを欠いているが、両者が中国社会を総体として対象化しえたという共通点を持ち、二つの間の継承関係を捉えることは十分可能であると指摘している⁴²。筆者もこうした理解を前提としている。

中国ではすでに、胡適が1929年11月、「新文化運動与国民党」において、「中国の新文化運動は、戊戌維新運動より起こった」と記しており、その思想的系譜を次のように説明している。

戊戌運動の意義は、古い政治制度を覆して、新しい政治制度を採用したことであり、後に梁啓超先生は『新民叢報』を立ち上げ、自ら『中国の新民』と称し、多くの「新民説」を著して、中国の旧文化が西方の民族の多くの「美德」たとえば、公德、国家思想、冒険、権利思想、自由、自治、進歩、合群(集団)、毅力、尚武等々を欠いていると指摘した。彼はなんと中国人には私徳が欠けているとさえ指摘した。このように西方文明を推奨し、中国の固有の文明を叱責することは確かに中国思想史上の新紀元である⁴³。

胡適は、清末において流行した政治小説も、政治・社会に対する批判態度において梁啓超と共通しているとし、劉鉄雲・李伯元らが「譴責小説」を著して、力をこめて政治社会の腐敗を攻撃したと述べているが、これらからは、当時、中国社会への批判において共通する傾向が起こっていたことがわかる⁴⁴。

こうした社会批判が誕生する条件として、すでに社会認識の形成が行われていなければならない。即ち「社会の発見」である。西洋近代の社会思想史のテキストは、「社会」の発見について次のような記述で始まる。

今日の我々にとっては、人間を「歴史的・社会的」な存在としてとらえることはほとんど常識といっても良い考え方になっている。けれども、今日常識であることは必ずしも昔からそうであったことを意味しない。この「歴史的・社会的」という、時間と空間の二つの基軸の限定の下にある存在として人間をとらえる考え方なども、実はごく新しい、まず19世紀以降に確立された考え方だといつてよいのである⁴⁵。

この歴史的・社会的な人間のとらえ方や「社会」の存在が人々の意識に上っていく時期は、「市民社会」の成立を前提にした歴史的過程なのである。

社会という問題が自覚され、人間の共同生活を社会と名づける習慣が始まったのは、十八世紀のことであった。十八世紀といえば、言うまでもなく市民革命の時代である。ルネッサンス、宗教革命に胎動を始めた近代は、この世紀において、それまで人間の共同生活の基本的な枠組みであった国家にたいし、新しい共同生活の仕組みとしての「市民社会」を生み出す。社会というものの自覚が始まるのは、この市民社会を媒介とした国、絶対主義国家との対抗においてなのであった⁴⁶。

この説明は、西欧社会を例にして「社会」認識が顕在化する過程を説明している。明治維新後の日本人が、初めて目にした欧米社会を理解するためには、さまざまな紆余曲折があったことが明らかにされている⁴⁷。近代化を目指した日本においては、いまだ市民社会は存在しなかったゆえに、西洋社会に対する理解が困難であったからである。明治期に、「Society」を「社会」に翻訳し、社会の語句が一般に使用されるようになったのは1880年代とされている。

日本と同様に市民社会の形成がみられなかった中国の場合においても、市民社会形成に向かう前に、西洋とのさまざまな交渉の経験があり、さらに西洋思想を介することによって自らの社会に対する自己イメージの早期の形成が促進されてきたと考えられる。

傅斯年たち青年知識人が行った中国社会の探求は、20世紀初頭の梁啓超や嚴復ら先達者の理論に遡ることができるが、清末より民初へ、さらに新文化運動へ、中国の同時代人が、中国社会に対してどのような認識を抱くようになっていたのかを、先行研究から学んで、まず概括してみたい。彼ら先覚者らも、西欧とは異なる社会である中国において、やはり自らの「社会」を発見しようと試みたのである。

第1節 社会批判の思想的起源

1 「社会」の語彙の採用

中国において、自己の社会へのイメージが形成されてくるのが、日清戦争における敗戦と義和団事件後の「瓜分（中国分割）」の危機が深化する20世紀初頭であり、西洋思想の受容が本格的に開始された時期にあたる。それ以前は、中国人は自己の文明を誇り、人間や社会のあり方に関する思考を西洋人に学ぶことに対し、意味も必要も感じていなかったとみなされている⁴⁸。その時、唱えられたのが付会論であり、次いで中体西用論が主張された。西洋文明の起源は中国にあったと理由付けることによって、西洋文明の導入に対する精神的自足を求めるという思考態度であった。

しかし、日清戦争の後、事態は一変した。嚴復により英文の原書から翻訳された『天演論』が出版され、西洋思想である社会進化論が紹介された。一方、すでに日本は、明治維新後、欧米から自然科学、社会科学、人文科学の用語を取り入れて日本語の新語彙を作り出していた。日本に学んでいた留学生はこれら大量の西欧の学術語彙を日本から取り入れて、自らの社会や国家に対する認識を開始した⁴⁹。

特に梁啓超が、亡命地日本で学んだ西洋学術、西洋思想を中国に紹介するに当たって日本の新語をそのまま使用した結果、多数の日本製漢語が中国に普及した。こうした日本語の採用の趨勢は「社会」の語彙にも及んだ。

すでに嚴復が「Society」の翻訳語として生みだしていた「群」に対して、梁啓超は、1904年7月13日の『新民叢報』の「新釈名—(哲学類)」欄で「society」の訳語として、嚴復の訳した「群」の訳名をやめて日本の訳に従うといい、最終的に「社会」の語句を採用した。その結果、中国では以後、「群」に替わって「社会」の語句が優勢になり、やがて、「社会」という新語が普遍的に使用されていったのである。

しかし、当時の「社会」の言葉の使用には、曖昧さがあったことは否定しきれない。しかも、嚴復が『天演論』の翻訳で苦心して英語から古典中国語に移し変えた「群」は、それ自身として、中国社会探求のための重要な概念となった。なぜなら、その翻訳過程は、彼自身の中国の政治、社会に対する認識の深化過程でもあったからである。「群」は、中国社会理解のための有力概念であるとともに、以後の歴史において「群衆」「利群」から「群衆運動」「労働群衆」「工農群衆」という語句を形成し、1920年代の社会運動と極めて重要な関係を有した⁵⁰。

「社会」という新語とともに、西洋の新思想として導入されたのが社会進化論であり、社会有機体論であった。社会進化論とは、19世紀に、フランスのコントやイギリスのスペンサーにより唱えられた。それは、ダーウインの生物進化論を社会分析に応用した理論である。

佐藤慎一によると、社会進化論は、「社会（もしくは国家）を人間が作為の対象として作り出したものではなく、それ自体生命を持ち、自然に成長する有機体（生命体）として捉え、生物有機体における進化の法則を社会に類推適用することが可能であるという前提に立脚した思想⁵¹」であり、嚴復が『天演論』で紹介し、梁啓超が日本語文献から取り入れて盛んに紹介した。社会進化論は、梁の文章の力によって中国で爆発的に流行した。

社会有機体論は、社会進化論を社会学の理論に導入したもので、社会組織を生物になぞらえて、生命を持つ有機体として考察・説明しており、社会の漸次的発展を重視した。それは、社会を有機体とみなすので、多くの部分が一つに組織され、その各部分が一定の目的の下に統一され、部分と全体とが必然的に関係を有するとみなしている。その後「自然淘汰」「優勝劣敗」「適者生存」の社会進化論に対してクロポトキンの『相互扶助論』が紹介されるが、この社会有機体論による社会に対する生物学的理解自体は、新文化運動の中で有力な思想として影響を持続した。

2 「一盤散沙」の由来と「群」論の起源

既に1900年ごろから、康有為や梁啓超が使い、さらに、孫文もしばしば言及した「一盤散沙」の説を傅斯年は新文化運動の中で取り上げ、中国人が「ばらばらの砂」であることを烈しく批判した。「ばらば

らの砂」即ち「一盤散沙」という語句は、中国社会における人と人との結合力の弱さ、あるいは人々の利己的性格、公共心の欠如などを表わす言葉として今日までよく知られている。

藤井隆は、「一盤散沙」というこの言葉の起源が日清戦争後に、来華宣教師の出版機構「広学会」が発行した書籍『中東戦記本末』にあることを明らかにした⁵²。日清戦争時、中国側の戦争の実態を見た当時の外国人が、この言葉によって、中国の省と省の結合の希薄さあるいは欠如とともに、中国人の他者への無関心、ナショナルな一体化の意識の欠如を表現したという。さらに、この言葉は、宣教師から中国知識人へと継承され、戊戌変法運動以降の政治改革にひとつの方向付けを与えたといい、その影響力の大きさを指摘している。

康有為と梁啓超は、1900年ごろから「一盤散沙」の語句を使用し始めており、そのもつ意味が外国人から見た中国社会と中国人を貶めることばであることを彼ら自身も自覚していた。それは、康・梁を中国の政治や文化のあり方に対する根本批判へ向かわせる契機になったという。

孫文も「一盤散沙」の語句を使用していることはよく知られており、1924年の『三民主義』の講演で、この語を用いて中国人の国族観念の欠如を嘆いている⁵³。「外国の傍観者は、中国人をばらまかれた砂だという。彼らがそのように言う理由は、中国の一般人民には、家族主義と宗族主義があるだけで、国族主義がないからである。これ以上4億の人口を一つの強固な民族に結合しようとしなければ、中国の前途には、亡国滅種の憂いがある。この危急を救うために、我々は、民族主義を唱え、民族精神によって国を救わなければならない。」と民族主義を強調している。

序章において、最近の中国における新文化運動・五四運動の新動向と関連して「社会」に焦点を当てる研究が起こっていることを述べた。新文化運動の社会批判と清末の社会批判の関係にその思想的考察をおこなっているのが許紀霖の論文「作為社会運動的“五四”」⁵⁴である。その論文のなかで、全面的に依拠したのは、1995年台湾の王汎森が山東省の聊城での傅斯年記念の学術会議で発表した論文「清末民初の社会與傅斯年」⁵⁵である。

王汎森は、傅斯年の思想の本質を探ることにより、新文化運動時期の社会思想を明らかにしようとし、傅斯年の社会批判の理論的基礎の解明において、傅の使用した「群衆」の概念と、清末・民初の中国に大きな影響を与えた社会進化論および社会有機体理論との関係に注目した。この社会進化論と社会有機体理論が、当時、傅斯年の依拠した理論的方法であると指摘したのである。

王汎森は、康有為や梁啓超が、伝統的基層社会の中に郷村自治を見出し、嚴復の紹介した群学即ち社会学の影響を受けて「群」と表記したこと、この伝統的な自治組織を基盤にして、中国の社会と国家を改革し再建設しようとしたことを指摘した。1904年「造公民」説を提出した康有為は、中国の民間の郷村自治、会館・公所、慈善組織など旧社会の伝統的自治組織の存在に注目するとともに、清末より出現した商工業者の新しい商会、知識人の組織した学会、新設の学校を特に重視した。彼は、新旧の組織も含めて紳士の自治組織を「群」とみなし、この自治組織即ち中間団体が中国改革の担い手となりうる組織であるとみた。梁啓超もやはり彼の郷里の自治組織に注目しており、彼らは「合群」を基礎にした政治改革を主張した。

梁はさらに進んで、1902年より、『新民叢報』に「新民説」の連載を開始した。新しい国民国家を担う主体として「新民」を想定し、愛国の公德や法律に基づき自治できる道徳が必要だと論じた⁵⁶。

第2節 清末の社会認識

政治変革を課題とした戊戌変法から辛亥革命の時期に活躍した指導的な思想家たちが中国社会に抱いていたイメージを先行研究から学んで、彼らが当時の西洋社会と自国を比べて、自国の社会に対してどのような認識を有していたかを確認したい。それによって、政治改革の成功した後に、彼らが、どのような社会の建設を青写真として描いていたかを知ることができるからである。

佐藤慎一によると、康有為の抱いていた中国伝統社会に対する見方は、中国社会には「圧制の苦」は存在せず、人々は平等で、税は軽く、刑法も軽く、公平であるとみなすものであった。康は、「中国では、早くも秦・漢時代に封建制を廃止して郡県制を採用して以後、世襲貴族は跡を絶った。貴族制がなくなったゆえに、人々は平等で、政府の干渉は少ない。学問も宗教も職業も自由に選択できる。一方、「経世」の責任は、知識人＝政治家が負うものであり、民衆は庇護と後見の対象であり政治主体ではない」と考えた⁵⁷。

これに対し、梁啓超は、「新民説」で新しい国民国家を担う主体として「新民」を論じる一方で、康有為が「中国の民は自由である」と主張したのに対し、中国の「自由」は「野蛮の自由」であると反論した。

そして新たに中国の専制をいかに理解し、どのように克服するのかという問題を提出した。この専制に関わる問題は、新文化運動において大きな理論的課題となり、傅斯年の社会思想に大きな影響を与えている。

1898年『天演論』の翻訳出版で、社会進化論と社会有機体論を紹介した嚴復の中国社会に対する認識や歴史意識は、1904年に公刊した『社会通詮』の中に見出すことができる⁵⁸。これは、英国人 Edward Jenks のパンフレット *A History of Politics* (1900年)を翻訳したものである。ジェンクスは、当時の新興の学問である人類学の研究成果を採り入れて、人類は社会発展の三段階即ち、野蛮、宗法社会、軍国社会の三段階を経過すると設定していた。嚴復は、ジェンクスの原書よりさらに直線的な社会発展史を想定した⁵⁹。

ジェンクスの原本は、もちろん中国の社会や歴史の発展に言及していないが、嚴復は、『社会通詮』で「宗法社会」の社会概念を中国の歴史の一段階に適応させ、中国の現在の社会を家父長制的宗法社会として位置付けた。彼は、自らの考えを訳者自序において、次のように述べていた。

まことに中国の社会は奇異であることよ。天下には群が多い。外国人が考えた進化の段階は、みなトーテム社会から始まっている。ついで、宗法社会を経て、国家を形成している。トーテム社会では、その民は、漁業と狩猟に従い、宗法社会となると、民は農業に従事する、両者の間には、別に遊牧社会に変化したものがある。最後に、宗法社会より国家に進む、宗法社会と国家の間には別に封建に変化したものがある。その封建社会は、民業は大抵農業であり、国家にいたると、兵、農、工、商の四者の民がそろい、その社会は、互いに成長し極めて平和で強力であり、繁栄して滅ぼすことはできない。これらは、順序として信すべきものであり、天の四時、人身の童少壮老のごとく、時間に遅速はあるが、少しの乱れもない⁶⁰。

彼は社会進化論に則り、中国が宗法社会から国家即ち軍国社会へ至る過程にあり、現時点は、基本的には宗法社会の段階にあるとみなした。遅速はあっても社会発展の諸段階の過程を中国も経ていくと考え、「シナは、元々宗法の社会であり、軍国社会に次第に入りつつある。全体的にみると、これ(宗法)を中心としており、宗法が7割で、軍国が3割を占めている⁶¹」と認識していた。

嚴復は、Society を「群」と訳し、「群」を宗法社会の基本をなす組織とみなし、普遍的な世界史の中に中国の歴史を位置づけようとした。嚴は、スペンサーから学んで、「群」(Society)を有機体ととらえたが、康・梁と異なり彼が基点に置いたのは、個々の民であり、民が「群」という組織体を成立させると考え、1人1人の民の素質が「群」という有機体に決定的な影響を与えるとみた。

又、有機体という存在から中国社会をみると、中国の社会はすでに衰退した社会であると考えた。生物から連想すると、中国がこの衰退した「宗法社会」から脱却するためには、民の力、智、徳が必要であると考え、教育を重視し、漸進的改革を主張した。

今文派の康有為に対し、古文派の考証学者であり同盟会の反満民族革命論者であった章炳麟は、小林武によると、中国の自給自足的な農業社会の現実と政治社会の歴史にたつて、新しい社会を構想したという。章が想定していた中国社会像は、農業共同体を基礎にした牧歌的なもので、近代社会へむけた変革のイメージではなかった。その新しい社会の経済活動は、産業化を目指すものではなく、自然を相手にした農業経済が主で、静態的であった。彼は市場経済への移行に伴う経済上の弊害についてはあまり問題にせず、むしろ欲望肯定の風潮が倫理的墮落を生むとして、士人たちの風紀や彼らの利禄志向を批判した。小林氏は、この章炳麟の社会構想に対して、中国に根ざし中国的なものであると評している⁶²。章炳麟は、伝統的農業共同体を基礎にした静態的な社会構想を抱いていたと筆者は考える。

佐藤慎一は、辛亥革命以前の時期に、フランス革命を「政治革命」と認識する一方で、「自由と平等」を目指す「社会革命」の思想がすでに紹介されていたことを指摘している。それは、マルクスを中国に最初に紹介した朱執信である。朱の言う「社会革命」は、経済的不平等を生み出す制度（特に自由放任と私的所有権の絶対性）の廃絶もしくは改革を意味していた。貧富の格差が比較的小さい中国の現状では、「政治革命」と並行させて「社会革命」を行うことが得策で、「政治革命」と「社会革命」の同時遂行を必要としていると考えたという。この考え方は、孫文の民生主義に連なる思想的系譜にあるといえる⁶³。

第3節 中華民国初期の思想状況

辛亥革命に続く袁世凱政権下の政治的混乱により、人々の間には、政治活動に対して幻滅が広がり、政治運動から社会へ人々の目が転じていった。当時の知識人の多くは、中国社会の中に、政治や社会の混乱の原因を求めようとしており、政治と社会のちがいに気づき始めていた。

梁啓超により中国国内に持ち込まれた新語「社会」は、やがて流行現象となり、それは中国語の常識となっていた。「社会」の語が流行語になる時期と政治活動に対する失望時期とは重なる。梁啓超が政治活動から社会事業へ転じることを公言したのもこの時期である。

この流行語現象に対して、北京大学の教授で『新青年』の同人であった社会学者の陶履恭が、『新青年』で、社会について解説している。陶によると、「社会」は、実は、「人と人の関係」を表示した語であり、抽象的観念であり、実体のある存在ではないという。それ故、人々が「何事もすべて社会のせいである」とみなすのは誤りであり、社会の問題は、個人の責任であり、社会に罪を着せることはできないと指摘した⁶⁴。

また、李大釗は「社会」について「いわゆる社会とは、旧知の友人や情誼の深い家族を指して言うのではない。元々知らない人と偶然知り合いとなり、それぞれ、一定の情誼や相当の礼儀をもって、真正の社会関係を持つことを指すのである」という。その主張は、「Society」を「交際」と訳した明治初期日本人の理解を連想させる。李は中国人のマナーの悪さなど公衆道徳に触れ、社会道徳の涵養について言及していた⁶⁵。これらの主張から、社会がいまだ実態を持った存在であるという理解までには至っていないと判断できる。それは、彼らが中国の中に西洋と同質の市民社会を発見できなかったからであろう。

「社会」の語の理解のうち「人と人の関係」から転じては、人々の中の「風俗習慣」の意としても理解されるようになり、こうして社会道徳の涵養の主張は、倫理革命へとつながった。1918年1月の北京大学において、蔡元培が組織した「進徳会」の主張は、北京大学の教員と学生の賛同を得ただけでなく、広く社会に影響を及ぼし、新文化運動の「新モラル」形成の運動のひとつになった⁶⁶。

新文化運動の指導者である陳独秀、胡適は、社会有機体論の信奉者であった。陳独秀は「個人が社会にあるのは、まるで細胞が人体にあるようであり、生滅無常、新陳代謝はもとより理論上、当然であり、いささかも恐れるに足らない⁶⁷」と「人生真義」に書いた。

胡適は、「社会的不朽論」を論じて「社会は一種の有機体組織である」と詳細に論じた。縦からみると「個人は歴史をつくり、歴史は個人をつくる」、横から見ると、「社会的生活も有機体的であり、個人が社会をつくり、社会は個人をつくる」と述べている⁶⁸。

民国初期の「社会」の語の流行は、すでに人々に社会の発見を促していたが、さらにその思想運動をすすめたのは、青年知識人であった。その結果、個人の解放を目指す家族制度批判、専制主義批判に続いて、歴史的視野による前近代的宗法社会に対する批判活動が生まれた。

新文化運動期に現れた社会批判論はどのように論じられてきたのであろうか。佐藤慎一は、新文化運動、五四運動の急進的社会批判として、「社会革命」の思想をキーワードとして挙げて、新文化運動と五四運動を区別し次のような理解を示している。

新文化運動と五四運動は、人的にも思想的にも多くの連続面を持つが、同時に少なからざる不連続面も持つ。新文化運動における西洋文明に対する憧れと期待は、五四運動における帝国主義に対する憎しみと拒否感に変わった。そして、個々人の自覚と文化の変革という新文化運動の迂遠なアプローチは、政治的直進主義という五四運動の急進的アプローチにとって変わられたのである⁶⁹。

佐藤は両者のちがいを、新文化運動が、思想の変革を通じて辛亥革命を乗り越えようとしたのに対して、五四運動時に出現した急進主義は、新文化運動とは異なる方向から「政治革命」であった辛亥革命の限界を突破しようとする試みであったと理解している。中国に入った「社会革命」の思想は、実際には、第一次世界大戦終結直後、ロシア、オーストリア、ハンガリー、ドイツに起こった政治的激動の影響を受けたものである。ロシア革命は、以前のフランス革命を代表とする「政治革命」に代わる「社会革命」として理解されたのである。雑誌『新潮』の創刊号では、羅家倫が「世界之新潮流」として紹介した。

世界の新しい思想潮流の起点はロシア、オーストリア・ハンガリー、ドイツの革命である。現在の革命は、以前の革命ではなくなった。以前の革命はフランス式の革命で以後の革命はロシア式の革命である⁷⁰。

羅は、この「ロシア式の革命」の思潮が中国に入ってきたら、中国は大混乱するだろうと述べている。一方、傅斯年は「社会革命——俄国式的革命」を書き、ヨーロッパ近世史の精神が思想の自由にあるとし、その自由の実現の過程の中にロシア革命を位置づけ、評価していたのである⁷¹。一般に「社会革命」は無政府主義思想と関連して論じられるが、当時は、ロシア革命の実相は伝えられていなかったうえに、無政府主義思想と共産主義との相違も理解されていなかった。「社会革命」は大戦後のヨーロッパの新思潮と

して注視され、彼らは、フランス革命の政治革命と異なる意義をその中に見つけようとしたのである。

おわりに

本章を終えるにあたり、次章との関係についてまとめておきたい。傅斯年の社会思想の形成は、1918年の前半に既に開始されていた。それは、彼が学問上の立場を新文化運動の推進グループに移し、西洋学術を学び始めていた時と重なる。その学術上、思想上の下地があったゆえに、第一次世界大戦後の外来の社会思想を受け止めることが可能となったのであろう。

傅は、第一次世界大戦が終わった1918年11月に、「社会革命——俄国式的革命」を書き、ロシア革命に共感した。北京大学で雑誌『新潮』を発刊した時、自らが起草した『新潮』発刊の目的の一つには、中国社会の研究が掲げられていた。

当時、「市民社会」の未発達な中国において、傅斯年は、どのように「社会」を発見したのであろうか。彼は、個性を自覚し、個人の解放を目指した。個人の解放を妨げる家族制度を批判し、梁啓超以来の専制主義批判に続いて歴史的視野による前近代的宗法社会に対する批判活動を展開したのである。

彼は、嚴復や梁啓超が中国社会の分析においてかつて使用した「群」の概念を再び採用したが、彼の目的は、「群」の再編ではなく、「群」から成るとみなした中国社会を西洋市民社会と対比して批判的に探求するためであった。

新文化運動期は、社会主義思想など「社会」性の強い主張をもった思想が流入してきた時期であるが、傅斯年はそれら多くの思想に左右されず、個性を重視する位置に立った。清末の啓蒙思想が紹介した方法論を基礎として、西洋歴史学の新しい学術理論も取り入れ、民国初期の社会を批判する思想的転換を生み出したと考える。

註

- 41 小野川は、「清末においては、進化論は主として生存競争・優勝劣敗という面が歓迎されたのであったが、民国初期の新文化運動において、ハックスリの存疑主義がデューイの実験主義と並び、文学革命・古代再検討の運動に方法論的支柱を与えることになっている。」と指摘している。小野川秀美『清末政治思想史研究』みすず書房、1969年、184頁。
- 42 藤井隆「「一盤散沙」の由来——広学会と戊戌変法運動——」『現代中国』82号、2008年。「梁啓超の合群論とナショナリズム」『広島修大論集人文編』44巻1号、2003年。
- 43 胡適「新文化運動与国民党」（1929年11月29日）原載は雑誌『新月』第2巻第6・7号合刊、1929年。胡明主編『胡適精品集』第10巻、光明日報出版社、1998年。胡適は、「新文化運動が、戊戌維新運動より起こった」と指摘することによって、当時専制化した国民党を批判し、国民党が国粹運動の系譜を受け継いでおり、一方、新文化運動は、国民党の民族主義、国粹主義とは思想的起源において異なることを証明しようとした。
- 44 劉鉄雲の『老残遊記』李伯元の『官場現形記』が有名である。『官場現形記』については、橘樸の詳しい解説がある。橘によると、文官優越時代の末期を写したもので、政治の腐敗、財政の救亡、最も狭義の官僚即ち文官の権威の年一年と退廃する世相を捉えたものである」と述べている。『「官場現形記」——「官僚」の社会的意義——』『橘樸著作集第1巻 中国研究』勁草書房、1966年。
- 45 生松敬三『社会思想の歴史 ヘーゲル・マルクス・ウエーバー』岩波書店、2002年、1頁。
- 46 同上、2頁。
- 47 日本における西洋近代社会の認識過程については、木村直恵の研究が詳しい。木村直恵「「society」と出会う—明治期における「社会」概念編成をめぐる歴史研究序説」『学習院女子大学紀要』第9号、2007年、「「society」を想像する—幕末維新时期者たちと「社会」概念」同前第11号、2009年。遣欧使節団の欧米社会体験と中華民国初期、欧米諸国と対比して自国の社会を見る視座には、共通のものがあつたと想像される。木村氏の研究視角には、少なからず示唆を受けた。
- 48 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』、東京大学出版会、1996年。
- 49 日本から取り入れた新語については、鈴木修治『日本漢語と中国 漢語文化圏の近代化』中央公論社、1981年。日本における「society」の訳語をめぐる研究に関しては、その生成について多くの研究がある。斉藤毅『明治のこゝろ 文明開化と日本語』講談社、1977年。近年の研究としては、前掲木村直恵論文がある。
- 50 金観濤・劉青峰『觀念史研究——中国現代重要政治術語的形成——』法律出版社、2009年。
- 51 前掲佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』123頁。

-
- 52 前掲藤井隆論文「「一盤散沙」の由来——広学会と戊戌変法運動」。
- 53 孫文、山口一郎訳『孫文選集』第1巻「民族主義」、社会思想社、1985年。
- 54 許紀霖「作為社会運動的“五四”」『學術月刊』第41巻5月号、2009年。なお許紀霖は、公共空間理論をも導入し、市民社会への展望を示している。「重建社会重心；現代中国知識分子与公共空間」『公共空間中的知識分子』江蘇人民出版社、2007年。
- 55 王汎森「清末民初的社会與傅斯年」『清華學報』25巻4期、1995年（尚実際の出版は1997年）。
- 56 前掲王汎森・許紀霖論文。
- 57 前掲佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』263頁。中国社会には「圧制の苦」は存在しないと考えた康有為は、フランス革命のような王政廃止に反対した。
- 58 嚴復の『社会通詮』出版の意図として、当時の革命派の反満種族主義を批判する狙いがあったとされる。このため、革命派との確執が後に残った。最近の『社会通詮』研究には、王憲明『語言、翻訳與政治——嚴復訳『社会通詮』研究』北京大学出版社、2005年がある。同書は、ジェンクスの原本との対照など実証的研究に主力が置かれている。
- 59 嚴復(1854—1921年)は、福州船政学堂を卒業し、2年間イギリスに留学し、その間、ヨーロッパの學術思想を本格的に学び中国に紹介した人物である。西洋の技術を導入し富強実現を目的とした洋務運動の中から生まれた人物であるが、科挙を通過した士人ではなかったため、当時の政治の中枢に参画できなかった。辛亥革命後、袁世凱政府の下で、初代北京大学校長となり、新生北京大学の高等學術研究機関としての基礎を築いた。嚴復については、區建英『自由と国民 嚴復の模索』東京大学出版会、2009年がある。同書は、近時の嚴復の思想研究の成果であり、彼を自由主義、近代學術の紹介者として高く評価している。
- 60 『社会通詮』の訳者自序の冒頭の語の原文は「異哉吾中国之社会也夫天下之群衆矣」である。これに付した標点には、ちがいがあある。①「異哉！吾中国之社会也。夫天下之群，衆矣」嚴訳名著叢刊『社会通詮』商務印書館、1981年。『嚴復合集』12『社会通詮』辜公亮文教基金会、1998年。②「異哉吾中国之社会也！夫天下之群衆矣，」（「訳『社会通詮』自序」『嚴復作品精選』、長江文芸出版社、2005年）。その結果、読解にちがいが生じるが、ここでは「異哉！中国之社会也。夫天下之群，衆矣，……」と読んだ。嚴復は、「群」を社会組織とみ、数多くの「群」からなるとみた。
- 61 前掲嚴訳名著叢刊『社会通詮』、15—16頁。
- 62 小林武『章炳麟と明治思想——もう一つの近代』研文出版、2006年、108—111頁。
- 63 前掲佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』、282—287頁。
- 64 陶履恭（字は孟和）「社会」『新青年』第3巻第2号、1917年。
- 65 北京から乗車して天津へ向かう列車中の乗客の混乱した様子や乗務員の乗客に対する態度の悪さに対する感想を書いた文章である。「旅行日記」『李大釗文集』上、488—489頁、人民出版社488—489頁、1984年。原載は、1917年5月28、29日『甲寅』日刊。
- 66 進徳会には、甲乙丙の三種の会員があり、甲種会員は、買春をしない、賭け事をしない、妾を囲わない、この3つの戒律を守る。乙種は、前の3種に加え、官吏にならない、議員にならない、この2つの戒律を加えた。丙種は、先の5つの戒律に加えて、アヘンを吸わない、飲酒をしない、肉を食べない、これら3つを加えた8つの戒律を守ることを規定した。蔡元培「北大進徳会旨趣書」高平叔編『蔡元培全集』第3巻、127頁。原載は1918年1月19日『北京大学日刊』第49号。
- 67 陳独秀「人生真義」『新青年』第4巻第2号、1918年。
- 68 胡適「不朽——我的宗教」『新青年』第6巻第2号、1919年。
- 69 前掲佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』282—283頁。
- 70 羅家倫「世界之新潮流」『新潮』第1巻第1号、1919年。
- 71 傅斯年「社会革命——俄国式的革命」『新潮』第1巻第1号、1919年。

第2章 中華民国初期の社会観の形成

——傅斯年の「群衆」論をめぐる——

はじめに

新文化運動期の学生の社団「新潮社」の中心人物である傅斯年⁷²(1896—1950)は、中華民国初期、新文化運動に北京大学の学生として参加し、新文化運動推進派の教員に伍して運動の重要な担い手となった。1919年1月創刊の月刊誌『新潮』の編集長として、学術・文学の改革を提案し、さらに急進的な社会批判の主張を發表した。

新文化運動期の傅の社会論には、彼独自の「社会」に対する見方があった。彼は、当時風靡していた進化論の影響を受け、対象としての中国社会を歴史的存在としてとらえようとしている。陳独秀や呉虞らの儒教批判、家族制度批判、専制主義批判を継承し、中国社会の全体的・歴史的な把握を試みており、その改革を思考している。やがて、その努力は、五四運動を経て個人主義にもとづく「造社会論」に結実していく。

本章では、新文化運動期の傅の社会思想の形成過程をたどり、彼が中国社会の中の何を核心的問題として意識していたのかを問う。考察の対象とした時期は、1918年前半から1920年前半の時期に限定し、以下の3つの時期の論稿の検討を通じて、彼の社会認識の形成を明らかにしていきたい。

- 1、1918年から1919年前半に發表した社会批判。
- 2、五四運動を経て中国社会への認識を深化させた1919年後半の社会論。
- 3、1919年末から1920年前半に形成された「造社会論」。

史料としては、主に『新青年』影印本、大安、1962年、『新潮』影印本、上海書店、1986年と欧陽哲生主編『傅斯年全集』第1巻—第7巻、湖南教育出版社、2003年を使用した。傅斯年の生涯については、王汎森と馬亮寛の傅斯年に関する專著によった⁷³。

第1節 従来の研究の成果と課題

傅斯年の個別研究は、大陸と台湾で1980年代末ほぼ同時期に始まった。大陸では、傅斯年の出身地である山東省聊城大学の馬亮寛が傅斯年研究の先鞭をつけた⁷⁴。馬亮寛は、傅の一生の思想の主流を愛国・救国と規定づけており、中国の伝統文化が傅に対して影響を与えた点を極めて重視している。さらに、自由主義者としての傅の思想は、経済的平等を主張する社会主義を取り入れた「自由社会主義」であると見ている。馬亮寛の研究は傅斯年の個別研究であり、新文化運動期の諸運動の中で傅の思想と活動の果たした歴史的役割を探求したものではない。

一方、傅斯年を「五四精神」をもって生涯を貫いた歴史研究者としてとらえた台湾の歴史語言研究所の王汎森は、論文「傅斯年早期的造社会論—從兩份未刊殘稿談起⁷⁵」で、傅の社会論を取り上げた。康有為、梁啓超の「群論」まで遡って検討し、康・梁の系譜を引く社会進化論に拠る社会有機体論であると指摘した。王汎森はこれにより新文化運動期の傅斯年の社会思想研究の先鞭をつけた。この研究は大陸の許紀霖らにも影響を与えている⁷⁶。この論文は、1996年台北の歴史語言研究所に所蔵されてきた傅斯年の史料から未公開の草稿を紹介し、清末民初期の啓蒙思想との継承関係を指摘したものである。前章で述べたように、日本では、清末の思想史研究者がこの継承関係を早くに指摘していた。

傅斯年が新文化運動期に發表した中国社会批判の文章は、いずれも短い随想風のものが多かった。その結果、この時期の傅斯年の社会思想に対する評価は、低かったが、これは、傅の残存史料が体系的なものでないことによると思われる。

日本の近代中国思想史研究では、傅斯年に対する関心が極めて弱く、研究も少ないが、その中で、後藤延子は、この時期の傅斯年の文章に対して「今日なお傾聴に値する優れた指摘に富むが、生来の聡明さと鋭敏な直観力に任せたものが多く、確かな学問に基礎付けられた明確な方法論と体系性とを欠いていた。……それを自覚していた傅は、科学方法論の研究を目指してヨーロッパに留学し、科学への理解を深めた」と述べている⁷⁷。

筆者は、この時期の傅斯年に対するこのような評価は、傅の残存史料が体系的なものでないことによると考える。新文化運動時期の傅の文章には、未公開史料以外のほかにも、すでに公開されているがまだ研究されていない検討に値するものが多く存在する。

その中で、傅斯年の档案資料が残されている台湾の歴史語言研究所の王氏が紹介した傅の草稿は、傅斯年研究にとって極めて貴重である。王汎森が紹介したのは、傅が1919年秋に書いた「時代与曙光与危機」と1920年初頭に書いた「欧游途中随感録 北京上海道中」である⁷⁸。

「時代与曙光与危機」は、『新潮叢書』の一つに予定されて書かれ、理論的に整理されたかなり完成度の高い草稿で、これによって、彼の西洋思想受容の論理や、中国社会への歴史的考察、「造社会」論に至る彼の社会観の形成過程を探ることができるようになった。本論も新史料を使って傅の思想研究を試みた一つである。

一方、「欧游途中随感録 北京上海道中」は、「留英紀行」⁷⁹の草稿であり、「造社会」論に至る傅の個人主義の形成を見通すことができる。これらの史料の公開により、傅斯年の中国社会批判を近代思想史の中に位置づけて考察することが可能となった。傅斯年の社会思想の理論的考察とその青年知識層への影響に対する考察は端緒に着いたばかりである。

一方、古代史家であり、歴史語言研究所所長として学術研究体制の確立に努めた傅斯年の紹介も行われている。1961年、上原淳道が「夷華東西説」を紹介し、近年、竹元規人による中国学術制度史や古代史研究における顧頡剛と傅斯年の比較研究がある⁸⁰。中国近代学術史における傅斯年の多面的な足跡の研究も今後の課題である。

第2節 傅斯年の略歴—新潮社時期まで

傅斯年は、1896年(光緒21年)、山東省聊県に生まれた。聊県は、山東省西部に位置し、大運河沿いの港町として繁栄し、八股文化が栄え多くの進士を輩出した地であったが、その幼年期には、すでに運河交通は衰退し、時代に取り残された地域となっていた。傅は、明代から官僚を輩出した士人の家庭の出身だが、早くに父を失った。この境遇は、彼の思想形成に影響を与え、青年期の社会主義思想への共感の土台となっている。

祖父から伝統的教育を受け、父の弟子の経済的援助を得て、13歳で故郷を出て天津府立中学堂に入学し、卒業後は、北京大学予科に進学した。彼は、北京大学予科時代には、当時北京大学の国学系に勢力を占めていた章炳麟派の期待を担った俊秀であった。イギリスに留学していた時、自分の大学予科時代を「国故時代」とよんで、中国の伝統的学術や古詩をいかに愛し、その研究に熱中したかを回想している⁸¹。

1916年に傅が入学した国文系には、翌年胡適や周作人らが新鋭の学術指導者として赴任して講座を受け持った。後に疑古派の歴史家となる顧頡剛とは宿舍で同室であった。傅がこれら新進の教授の講義に参加し、やがて新文化運動推進派側にその学問上の立場を移したのは、1917年秋である。

傅が学んだ天津府立中学堂、北京大学予科は外国語を重視した。嚴復が行った北京大学の学制改革を受けて、大学予科では特に外国語習得が重視された。傅ら学生が学術面で教員に伍して活躍しえたのは、彼らが英語に堪能で、新知識を貪欲に吸収したことが挙げられる。傅は、1918年前半より、『新青年』『北京大学月刊』誌上に中国の学術に対する批判を開始した⁸²。

傅は、嚴復からの思想的影響については、明確に言及していないが、欧米学術の本格的導入を行った嚴復は、直接教えを受けたか否かは問わず、当時の学生の指導者であった。彼が紹介した西洋論理学は、新文化運動期の青年に大きな影響を与えたと言われている⁸³。

一方、文学革命においては、桐城派に属する嚴復の古文はむしろ批判の対象であった。当時課題となった平易な白話文の作成方法や西洋学術の正確な翻訳を如何に行うべきかを傅が論じた際に、嚴復の翻訳法を批判している⁸⁴。

1919年夏、北京大学を卒業した傅斯年は、1920年初頭イギリスに留学、1923年秋には留学先をイギリスからドイツに転じ、計約6年余り滞在し、物理学、心理学、数学等の自然科学から、哲学、歴史学、言語学までヨーロッパの諸科学を広く学んだ。1926年10月に帰国すると中山大学の教授に任じた。さらに、彼は、古代史学者として殷墟の発掘に携わり、中央研究院歴史語言研究所の所長として中国の学術体制を構築した。彼は学者であるとともに、抗日戦争期は政治に積極的に関わり、自由主義分子として戦争遂行のため国民政府に協力した。しかし、1950年に台湾で死去して以来、国共両党から長くその存在を無視されてきた⁸⁵。

第3節 傅斯年の社会観の形成—1918年から五四運動前まで—

1 新しい学術の方法の探求に向けて

1918年前半期は、傅斯年が新文化運動に参加した時期である。1月から、『新青年』に文学や中国学術思想への提言を続けて発表し、さらに『北京大学日刊』紙上に「中国歴史分期之研究」という論文を発表した⁸⁶。これは、後に中国古代史の研究者となる傅斯年が書いた初めての歴史論文である。

この論文で、日本の桑原隲蔵の著書『中等東洋史』の漢訳本『東洋史要』をとりあげ、桑原に対比して自らの中国史の時代区分を提起した⁸⁷。中国に多数ある歴史書でなく、日本の新興の東洋史学をとり上げその批判を行った。

彼の桑原批判の特徴は、歴史上の中国の領域や漢族とは何かという根本問題を提出して、中国社会の探求を始めていることにある。そして、「現代とはいかなる時代か」を常に思考の基本に置きつつ中国史の具体的個性の追求を行っている。こうした彼の探求の態度は、その後の彼の歴史研究に一貫しているがその由来の一つとして、彼が初期に日本を介して西洋近代の歴史学の研究方法を学んでいたことが注目される。

劉媛媛は、新文化運動期の学術研究の特徴として歴史眼光(歴史的観点)と世界眼光(世界への視点)を挙げている。劉媛媛によると、歴史的観点は、清末民初に導入された進化論と関連し、進化論が象徴していた「科学」性を獲得して、新文化運動時期に非常に流行したと指摘している⁸⁸。傅斯年が顧頡剛ら当時の新潮社の仲間とともに進化論的思考により形成しつつあった歴史観は、彼らを中国社会の深部の探求へ導き、以後の思考の基礎となったと筆者は考える。

2 「社会」と「群衆」

「中国歴史分期之研究」を書いた1918年4月以来、傅斯年の中国「社会」批判は深化し尖鋭化した。この時期に傅が抱いていた中国社会認識を伝える文章として「社会—群衆」がある。そこで、彼は、次のように中国社会を告発した

中国の一般の社会は、社会の実質を備えているものは極めて少ない。つまり大多数の社会は群衆に過ぎない。およそ名と実とが適合する社会——能力のある社会で有機体的な社会——は、必ず緻密な組織と健全な活動力を持っていなければならない。西洋人が頼みとする社会は健全であり、故に個人の能力の発展する機会がある。中国人の頼りとする社会は、ただ群衆であって、有名無実でしかない。故に個人の能力は発展しようがない。鉱物に例えれば、西洋社会は、多角形の複雑な結晶体であるが、中国社会は、岩石に砂と石が半分ずつ付着した結合である⁸⁹。

これは、1919年2月『新潮』第1巻第2号に発表したものであるが、実はすでに、前年の1918年6月中に書かれており、1918年にはすでに、中国社会の考察を開始していたことがわかる⁹⁰。傅はこの文章で、「社会」と「群衆」の語句を対立語として、中国社会の批判をおこなっている。彼がこの時期、認識していた「社会」とは西洋にある「緻密な組織と健全な活動力を持つ有機体的社会」であり、能力を持つ個人が活躍することのできる社会であった。

傅は1920年にヨーロッパへ留学するまで、西洋体験は皆無であったが、中国社会の実態を批判するにあたって「西洋人の観察」を引用する。傅の見方は、西洋社会と中国社会を対比する西洋人の視線を通じた自国認識であったといえる⁹¹。

前章で既に述べたように当時、人々の間には、中国社会を「皿の上のバラバラの砂」であるという表現が普及していたが、傅は、この言葉も外国人の中国人評であることを知っていた。「皿の上のバラバラの砂」に加え、さらに岩石の形状をもって比喩を行い、中国の社会が極めて社会的結合の欠けた不格好なさまであることを強調した。当時、東西文明の性格の比較を、動と静で論じた杜亜泉の『東方雑誌』上の評論が影響を与えていた⁹²。

「社会」の語句は、梁啓超によって1900年代に日本から中国に導入された新語であることは、すでに前章で触れた。「Society」の訳語としての「社会」の新語は、嚴復の訳した「群」の語句を凌駕し広まったが、当時この「社会」の新語の浸透は、その意味する内容が人々に明確に理解されていることを直ちに意味してはいなかった⁹³。傅の「社会」に対する認識も当時の中国人の認識過程を反映したものであった。

一方、「群衆」の語は、金観濤、劉青峰によると、伝統的な使用法では「衆人、民衆」の意味で使用されており、1919年以前には使用回数は非常に少なく、新文化運動以後次第に使用が増大し、1925年がピ

一クに達した。その際、「群衆」として単独ではなく、大衆運動の主要な担い手としての「工農群衆」「労働群衆」等の使用法であったと指摘している⁹⁴。

傅が中国社会を表現するにあたって「群衆」の語を使用したのは、当時において先駆的であった。五四運動を経て新たな意味を付加されて中国史上に登場することになる後の「群衆」の語句は傅が五四運動前に使用した「群衆」の内容とは、歴史的内容を異にするものである⁹⁵。

傅は、民国初期の中国社会の考察に当たって、嚴復や梁啓超と異なり「群」でなく「群衆」の語を使用した。その「群衆」は烏合の衆であり、「十人の中国人が成就するものは、時には一人の西洋人にもかなわない」程に中国人と西洋人の間に大きな能力の差があるとし、その能力の差を生む原因として、「社会」の内実のちがいを挙げたのである。傅は、そこで、中国社会の本質へ探求を進めていった。

中国社会の形質は極めて奇異である。西洋人の観察者は常に、中国には群衆がいるが社会はないという、又、中国社会は、二千年前の原始人の宗法社会であり、今日には適しないという。その實際を尋ねると、この言葉は正しい。けだし、中国人にはいべき生活がなく、社会の真義というものはない⁹⁶。

傅斯年がここで西洋人の観察者の言葉であるという「中国社会の形質は極めて奇異である」という表現は、嚴復訳の『社会通詮』で、訳者序の冒頭の言葉「奇怪なるかな、わが中国の社会は」と、ぴったり重なる。嚴復も、西洋人の言質に影響を受けていたことが窺われる。

嚴復は、「society」を群と訳し、宗法社会にある中国社会とすでに軍国社会に発展している西洋諸国の社会とは発展段階に差があると考えていた。傅が西洋人の観察者の言葉として紹介した批評は、実は嚴復の言でもあった。傅と嚴とは、共通の認識を有していたことがわかる⁹⁷。傅は、中国社会が宗法社会の段階にあるとみなして、中国人の生活と社会の実態を具体的に挙げる。

まず政治上の社会を例にとると、政府機関は全く「烏合の衆」である。政府機関がすることは、「慣例」どおりのやり方に過ぎない。紙上の文章にどうして活動力があるのか、どうして組織できるというのか、無機体に過ぎないではないか。官庁のほかに官吏が組織する団体になると、破壊や非生産的なこと、不道德なことをするほかは何もしない。それは群衆と言うしかない。又、工商界の組織のごとくは、政界と比べてやや良い。然るに同業者が作る「行」はほとんど能力がない。又、近年生まれた工商界も西洋のもの比べると、能力もずっと弱体である——これは依然としてその名前が社会でも、その実は群衆である。農村に住む住民に至っては、さらにバラバラの砂であり、さらに社会的集合が少ない。見たところ中国の農民は、全く自治能力がなく、彼らにはただ群衆生活があるだけであることがわかる⁹⁸。

王汎森が指摘しているように、梁啓超は中国社会の基底に存在する中間諸団体を「群」と見なしたが、その「群」は、伝統社会に強固に存在してきた多様な存在であった。その中で、梁が中国変革の担い手として積極的に評価したのは、商会や学会、学校など清末に成立し、清朝の新政において公的存在として法的に承認された新しい団体であった。

中間諸団体である「群」のなかで、新しい団体の要素を評価した梁啓超に対し、民国初期の腐敗暗黒の政治を目にした傅は、社会の現状から教訓を引き出そうとした。中国に存在してきた政府機関、紳士の団体、同業者の組合である「行会」等の無数の諸団体はもちろん、近年産業界に生まれた「工商会」などの新規に成立した中間団体も宗法社会段階に停滞した能力の無い集団とみなし、すべて「群衆」であると否定したのである⁹⁹。

傅は、後述するようにやがて、社会を形成する分子としての個人を重視していくが、彼がこの時期に考え批判の対象としたのは、個人というより、中国の社会に存在する団体であり、団体を構成する「群」であった。これを彼は「群衆」と呼んだのである。さらに彼は、農民はもちろん、自ら属している新興社会勢力である上級学校の学生についても、学生の日常の生態が、バラバラの砂の一分子であると痛烈に批判した。

結局、彼が否定したのは、伝統社会に存在してきた自治的団体と、新たに近代化に転じつつある中国の社会に形成され、活動していた諸団体であった。しかし、五四運動で運動の中心となったのは学生であり、運動の成功を最終的にもたらしたのは民間のこれら新興中間団体の持つ力量であった。

3 中国「社会」に対する構造的把握の試み

中国基層社会の「群」に組織性の無い「群衆」を発見した彼は、「社会——群衆」の中で、続いて中国社会の構造的把握に進んだ。中国社会には、「社会の上の秩序」と「社会の内の秩序」があり、この二つは非常に違いがあると指摘した。

前者は、社会表面上の安寧をいい、後者は社会組織上のシステムを言う。二つは一つの字の違いがあるだけだが、二つの秩序を一緒にして語ることはできない。「社会の上の秩序」とは、即ち、中国の国家秩序を意味し、袁世凱政権下では、どこも死気が漂っていたが、政治的存在としての中国の枠組みは、一見崩壊していないために、人々は、彼が社会の秩序を保っているとみなしていた。「社会内の秩序」は、中国では、めちやくちやな状態にある。ある人が、今日商売をしているかと思うと、明日は役人になり、去年技師だった人が、今年は政客になる、まじめに働いても給料がもらえない。そのため中国社会の内部の大半の人たちの生活が、安定していない¹⁰⁰。

傅の言う「社会の上の秩序」とは即ち「国家」をさしている。彼は、中国が北京政府のもとで中華民国という国家形態を表面上維持しているとみなしている。しかし、国家の枠組みは存在しても、「社会の内の秩序」の点では、人々の生存は不安定である。社会に多くの失業者と職業に適しない人々を生み、社会の風紀と習慣の悪化をもたらして愚かな民を生み出していると考えた。

『新潮』発刊旨趣書では、このような中国社会内部の実態への深い悲しみと憤りから、『新潮』同人たちの課題として、社会がたどった沿革の由縁を討論しあうことを掲げていた。

第4節 五四運動後の傅斯年の社会観

1 五四運動と傅斯年

1918年11月11日、長らく続いた第一次世界大戦が休戦を迎えた。大戦が終了した結果、1919年1月には、中国とヨーロッパとの直接の交通が再開され、留学生の派遣など人的交流も開始された。大戦後の世界から、欧米思潮を摂取する開放の時期が始まり、これを期に新文化運動は広く学生の担い手も加え、新たな展開を迎えた。

五四運動において、傅斯年が5月4日の天安門前の学生デモで総指揮者となり、運動を組織したことはよく知られる。彼が、総指揮者として選ばれるに至った経過について、王汎森氏は、傅がすでに北京大学の学生の間で極めて盛名をはせていたことを指摘している。

大学内には、弁論会、消費組合、個人の生活の改善と人格的修養を目指す進徳会が組織され、教員や多数の学生が参加していた。消費組合や進徳会の役員選挙では、傅は高得票で評議員に選ばれていた。校長蔡元培とは師弟関係にあり、胡適とは師友関係という個人的関係をもっていた。パリ講和会議において中国全権が山東権益の回復に失敗したというニュースは、蔡元培が北京政府外交委員会委員長汪大燮から得たものであり、蔡が学生を集めて伝えた¹⁰¹。

傅は、学生から選ばれて示威行進の総指揮を採ったが、翌日運動の現場から降りてしまった¹⁰²。彼は、運動を羅家倫に任せて後方に退き運動の行方を見守った。新潮社のメンバーの多くは、学内での活動や上海へ赴いて五四運動の拡大に奔走した。このため『新潮』は停刊し、復刊したのは十月である。

新潮社同人の羅家倫は、5月4日の集会とデモ行進の後、直ちに「五四運動的精神」を書いて、五四運動と命名し学生の奮闘を賞賛した¹⁰³。羅家倫が、真っ先に五四運動の意義を明らかにしたのに対して、傅が五四運動について言及するのは四ヵ月を経過した9月5日に書いた「新潮之回顧与前瞻」という新潮社運動をまとめた文章である¹⁰⁴。

五四運動を経て、中国社会の趨勢は変わった。覚悟のある者は多くのものを身につけ、未だ覚悟のなかった者も運動の雷鳴に当てられて目覚めた。北大の精神が大爆発をしたのだ。社会の北大に対する空気は大きく転換した。以後社会改造の時代となった¹⁰⁵。

これをみてわかるように、彼は、北京大学を中心に起こった五四運動が人々に覚悟を促して、中国を社会改造の時代に進めたと大きく評価している。この運動に関わり、指導した北京大学の学生、とりわけ新

潮社の同人たちの奮闘をたたえた。社会の北京大学への評価が変わり、五四運動後、学生たちは、自らの使命を自覚した。新潮社の社員たちは、それぞれの進むべき道を見つけたと誇らしげに述べている。彼自身も、北京大学を卒業し、山東省派遣の留学生試験に合格し英国留学が決まった。

卒業から英国出発までの間、9月頃山東省西部の農村調査を行った。五四運動の経験と農村の現状を観察した成果を踏まえて、「山東底一部分的農民状況大略記」と未公開の原稿「時代与曙光与危機」を書き、彼が社会運動の激動に立ち会って獲得した思想の発展を跡付けた¹⁰⁶。ここには、彼の見た中国社会内部の変動が伝えられており、この時期にある程度熟成した彼の社会観が整理されている。彼はその思想を発酵させて、一年来主張してきた中国社会と個人の両側面から、五四運動後の社会変化を考察しはじめた。

2 「社会的責任心¹⁰⁷」の形成

傅斯年は、「時代与曙光与危機」において、まず「時代」とは何かを問題提起した。かつて中国の歴史観は「一治一乱」の循環史観であったが、社会学や時代区分という新しい歴史研究の方法を採用入れて、歴史進化の過程を考察し、時代の定義に取り組んだ。彼は、進化論に加え当時の生物学に流行し始めた遺伝学の考えも取り入れている。

一民族、あるいは相互に接触し大きな共同生活を送るいくつかの民族が、生活のうで、大きな抛り所を失ったり、或いは新たにそれを獲得したり、或いは突然変異(Mutation)が原因で、代々受け継がれてきた現状と適合できなくなると、知覚界では現状に対応するべく理解が進んでくる。この理解は、部分から次第に拡大し、ある時、一切に影響し、破壊と建設の両方を含み、人生に影響を与える運動が起こる。……天地の間の事物と道理には絶対で、永遠なものはなく、人々は時代によって染められ、そして時代も止まらないので、個人、団体、一族の生活を謀るには、まず時代を認識する必要があり、しかるのちに根拠とすべき確実な標準をもつことができるのである¹⁰⁸。

時代の意味を知ることによって自らの抛り所を得たならば、次に、「現在はいかなる時代か」を評価しなければならない。第1次世界大戦後の新潮流下にある現代世界を「一步一步理性を根拠にして、平等を求める長期の一段階である」と、とらえた。ヨーロッパ史を例に挙げて、宗教改革、政治革命を経て現代のヨーロッパがあり、さらに今日では、無産階級が、働かず寄生する人を革命する社会改造運動が起こり、かつてのフランス革命を代表とする政治革命を補完しようとしていると述べている¹⁰⁹。彼の時代認識と社会運動観には、明白に第1次世界大戦後の社会主義思想の影響がみられる。さらに1千年後の世界を次のように予言するが、ここに、中国の伝統的思想の影響の深さも知ることができる。

未来は結局、まるで無政府の看板をかけているような世界になるであろうし、この政治社会改革運動を終始一貫続けるならば、千年後には、そのような一時代が来るであろう¹¹⁰。

「理性を根拠にして平等を求める」という現代の時代精神は、「社会を家とする」古代ギリシャ人のポリス国家の市民精神、都市国家時代のローマ人の「我々ローマ人は一家である」という市民精神に遡るといい、その精神がヨーロッパ人に脈脈と泉のように伝わってきたとする。傅は、この古代ポリス市民の「社会を家とする」という精神と近代欧米社会の市民が「社会的責任を負うこと」の間には重要な関係があると考えた。

彼は家族と宗族を基礎とする中国社会においてもっとも身近な「家」の観念と西洋の古代都市国家の「家」観念に興味を抱き、中国の古代思想との比較考察を行っている。西洋と中国には大きな違いがあり、古代ギリシャの「社会を家」とするという言葉には次のような意味があると解釈した。

第一に、個人の家庭に対するより、社会に対する責任がはるかに大きく、唯一の責任とみなす。第二に、社会は家庭と同様であり、離れることもできないし、離れるに忍びない惹かれあう魅力をもつので、社会のためにできる限りの力を尽す。第三に、家族に対する親密さと誠実さを社会に対して押し広げる。こうしてこそ平等の要求の効果が十分に発揮できる¹¹¹。

当時「万悪の根源である」と告発していた「家」のもつ独特の存在をたとえに持ってきて、古代人の観念の違いを明らかにしようとしたのである。

さらに、中国人にとって最も中国の伝統的な古代政治思想の中核をなしてきた「修身齊家治國平天下」の思想には、古代ギリシャの都市国家の市民が共有していた「社会」観念に類するものは無いと見なした。それ故「修身齊家」から「治國」の間には、「社会的責任心」は生成しようがない。

彼はさらに、現在も中国社会に「社会的責任心」が生成せず「群衆」が存在し続ける原因として、「社会を家とする」古代ギリシャ・ローマの市民精神が伝わってきたヨーロッパと異なり、二千年の専制と科挙の影響を挙げた。翌年 1920 年 5 月、ロンドンで書いた文章では、専制と科挙こそが社会力の形成を阻んだと指摘した。

中国が今日なぜ社会のない状態になったのか。まさか中国のこの民族が組織力を持たない民族だということではあるまい。歴史から見るとこれも理由がある。かつての中国の政治組織は、専制的朝廷を中心としており、文化組織は、科挙を中心に作られていた。社会の一切はこの二つの支配を受けていた。この二つのもとで、組織力はただこのような状態に陥ったのである。専制は社会力とは並存できない、ゆえに専制が一日存在すると、必ず力を尽して社会力を破壊する。科挙は、さらに人を思想上、組織力を要求しない状態に置き、さらに組織力を要求できないままにするので、現在この「バラバラの砂」の状態を生み出したのである。この状態をちょっと考えてみてほしい、これはまことに根が深いし、当然それを改めることは難しい。しかし、この時代にそれを改めないままでいられようか。¹¹²

傅は、さらに、顧炎武の封建制論を参考にして、中国社会が経過した歴史についても考察した。封建社会を経て現代に移行する場合と、専制の時代から現代の新しい潮流に参入する場合とは、後世の社会にもたらされる結果には大きな違いがある、中国古代と西洋古代の間に「社会的責任心の有無」があった上に、さらに加えて封建制の存在の有無をも考察に入れた¹¹³。

封建は確かによい制度ではないが、少数者の自治の精神が幾分かは存在し、粘土を砂漠に変えたり、生物を機械に変えたり、社会の成長を牛馬の群れの訓練に変えるようなことにはならないであろう。顧亭林が封建を論じ、郡県を土司の一般制度に変えようとした。この主張は一見笑うべきことのように見えるが、彼の立論の趣旨を読むと、思わず次のような感慨が生まれてくる。土司は専制より良い、つまり、土司はたとえ社会の成長を助けることはできなくても、社会を「バラバラの砂」のような群衆に変えるまでには至らない。専制の下では、ただ個人々人があるだけで、「公」と呼ぶものなどはないので、個人の責任心のほかには、社会的責任心が負えないのは当然である。故に中国の社会の大半は機械に似て、自力で動けず、一切をすべて外力に頼るのである¹¹⁴。

中国社会の「群衆」に対して歴史的考察をした後、傅斯年は専制が打倒された現在も、中国社会にはその影響が深く沈殿して残っていると指摘した。それは、人々の心中深くに政治指導者を崇拝する心理が残り、大人物の出現を望んで、彼に頼って社会を変えようという心理に見られる。中国の改造を唱えているが、その実、上から下への改造を主張しており、その考えは、専制の臭味がする。社会の力で政治を培養し、下から上へ改造する改革こそ徹底的な覚悟が必要なのであると考えた。

傅は政治と社会を上と下という比喻を使い、下から上へ改造する改革が社会運動であると考えた。社会の改革を担う覚悟を「社会的責任心」という言葉で表現した。

この数ヵ月間、暗くどんよりとした政治の下で、却って活発な社会運動が起こったのはすべてこの社会的な責任心の新発明による。我々はこの社会的な責任心の発明の中に、非常に多くの多彩な出来事が包蔵されているのを知っている。現在この時代の第一の曙光は知識の発展ではなく、まさしくこの社会的責任心が生まれたことである¹¹⁵。

傅は社会の改革を担う覚悟を社会的責任心と表現したが、その内容は、個人的自覚に伴い形成されたと考えた。彼によると、それは直ちに民族主義を意味するものではなかった。

辛亥革命期、嚴復は『社会通詮』を書いて、民族主義を宗法社会の産物と批判し、種族革命を否定した。これに対し、章炳麟が民族主義は普遍的な広義の概念であると言い、「今の民族主義は、宗法社会の溶解を促進することができる」と主張して論争した¹¹⁶。嚴復と同じく、当時の傅も民族主義を否定的にみていた。彼は明確に自分たちの運動を愛国主義によるものではないと言った。

もし、この五四運動が単に愛国運動というならば、私はこの語には賛成しない。私が五四運動を重視するのは、直接行動に始まり、公衆の責任心を喚起した運動だからである。私は、絶対に国家主義を主張する人間ではない、しかも、人類的生活を發揮するには、すべて責任心を基礎としている。故に五四運動は今後さらに大きな平民運動の最初の一步となるであろう¹¹⁷。

傅のこの主張は、当時、中国の青年学生に共感を寄せた中国在住のジャーナリストであり、中国研究者であった橘樸の観察に共通する。新文化運動により近代的自我の覚醒を経た青年学生が社会的責任観に目覚め、五四運動を起こしたと考えた橘は、愛国心は自我の覚醒又は社会的責任観念なしでも起こりうると述べていた¹¹⁸。

傅は、ヨーロッパにおいて古代より受け継がれてきた市民精神即ち「社会的責任心」という覚悟を、五四運動の中国に新たに見出だした。これは、青年たちによる民衆への啓蒙活動の結果、社会に生成されたものであった。

3 農村調査

1920年1月『新青年』紙上に発表された傅斯年の農村調査報告「山東底一部分的農民状況大略記」は、彼の出身地である山東省西部農村と農民の生活を詳細に描いた報告である¹¹⁹。1918年、社会学者の陶履恭(字は孟和)が農村の社会調査を提唱して以来『新青年』誌上に各地の報告が載るようになった¹²⁰。それらの報告の中でも傅斯年の報告は、変化しつつある農村の実態を見抜いた極めて水準の高い内容であった。

当時、李大釗も、都会を毎日さすらい歩く学生たちに、「農村に行け」と呼びかけていた。李大釗は、ナロードニキ運動の影響を受け「農村こそ民主主義の沃土であり、ここで活動する青年こそ民主主義を植え付ける労働者である」¹²¹といった。河北省の農村の出身である彼は、中国農村の暗黒が極点に達していると言いつつも、農民を賛美した。その文章は農村生活の実態から遠く離れ、客観的とはいいがたかった。まして学生たちは、農村そして農民の生活を知らなかった。聊城という地方都市に生まれ育った傅にとっても農村の実態は衝撃的であったようである。

傅は、はじめ山東省全域の農民の調査を目的としたが、東部地区と西部地区とは全く自然状態、歴史文化、近年の経済的状況を異にしている上、自分は西部の出身であるということから、西部の農民に限定した報告にしようとした。しかし、東部とのちがいを明白に示すため、両者を対比しながら記述を進めている。

彼がとり上げた山東省西北部地域は、黄河の沖積土から形成された大平原であり、農民が、旧来の自給自足の生産と生活を維持していることを詳しく描写している。農村に居住する農民以外の階級として、土豪(士族や富裕な家族)、土棍(地域のごろつき)、企業家(商工業者)がいる。この地方では地主といっても小地主が多く、地主の生活水準もまことにささやかなものである。

しかし、ここにもすでに、日本製品が入りこんできており、その圧力を受けて、東部ほどではないが、農民生活は次第に急迫した状況に陥っていた。大運河沿いのかつて経済的にも文化的にも繁栄を極めた都市は、時代の変化にとり残され、立ち上がる気力さえもてない保守的な落伍地域となっていると伝えている。

一方、山東省東部の沿海地域の住民は、日本の経済侵略をもろに受けて経済状況は混乱を極め、大儲けした人がいる一方で、失業した人が多い。交通も便利な東部では、住民は活動的で、満州へ移住する人が多い。商工業が勃興し、経済的發展が見込まれる。即ち、古い経済的淵源は失われたが、新しい淵源を創造して、活気がある地域であると述べている。

山東省西北地区は、義和団運動の発祥した地域である。義和団を生んだこの地域の農民の生活と宗教について詳細な考察を行った。

農民の宗教心は、これまでも深くないことはなかった。しかし、旧宗教のもつ超能力はすべて失われた。その神に対する観念はただ恐れと心理といふ加減な考えで作られたものである。我々が至る所に見つける壊れた廟は、経済状況の衰退と信仰心の墮落を明らかに示している。自分が病気になる危険なときが迫ったら、子どもたちは不安になり神にすがり、彼らの神に対する態度は、「いざという時になると仏の足にすがって助けを求めるといふもの」であって、苦しい時の神頼みである¹²²。

傅は、今では農民の神に対する態度としては表向きの敬礼が残っているだけで、旧宗教の力は失われた。その一方で、新興の地方宗教の勢力がすこぶる大きいと指摘し、義和団が勢力を拡大した理由に触れている。

誰も知っているように、我々の故郷は義和団の生まれた土地である。義和団は、『水滸』、『封神演義』、『包公案』、『済公伝』、『彭公案』、『施公案』、……『七侠五義』などの書物¹²³の中の人生観が合成された宗教である。我々はこれで、彼らの信仰心が非常に強いことがわかる。しかし、彼らは古いものに対して飽き飽きしており、そこで心の中に造られたのは新しいものである。……中国の道教や仏教は一人がこの世から解脱することがすべてである(と教える)。この深い意味を農民は理解できない。即ち、この教えの形式を農民が奉じて久しいが、彼らはもう耐えられなくなった。その結果、義和団の広がり極めて早かったのである。義和団の一切の悪い性質は、もう言う必要はないが、私は義和団が宗教的力量をもって積極的に世の中のことを処理しようとしたのは、確かに中国人の宗教思想を一変させる一大動機であったと思う¹²⁴。

傅は、個人の救済を説く旧宗教でなく、社会の変革を課題にした宗教の出現の可能性を示唆し、農民の心性に即した、農村から生まれる宗教運動の出現の可能性に触れている。彼は農民の思想を相反する二つの特徴に分けて、一つは無治の思想で、二つは退廃的な思想であるという。無治の思想の由来を次のように考察している。

元々中国には専制が久しく続いた。専制国家の最下層社会は、必ず無治の状態にある。専制が長く続くと当然陶冶されて無治の思想が生まれる。中国の社会はこれまで上級と下級がつながらず、都市と村はつながらなかった。上級の人、都市の生活者が、時に農村に侵入することがあるけれども、しかし、農村はついに無治の結果「自からの制度」を維持し続けることができた。たとえば国家観念の薄弱、納税に対する無理解、「良い人は裁判をしない」「良い男は兵士にならない」「人には違いは無く、水には高低が無い」に類する成語は、彼らのこの同じ思想を表現している¹²⁵。

傅によると、農民は、勤労の観念や「自足」の生活に甘んじており、彼らの生活は全く法律・国家や都市の文化に頼らない。そのような農民は、凶作の年に救済の手が差し伸べられないと流賊になる。長く抑圧された労働が、農民を蝕んで、退廃的な思想に陥り、時には、都市の浪人や遊び人に誘われて「初民」即ち原始人の本能的欲望のままに、兵隊や匪賊の群れに入っていく。彼らのこのような牛馬のような労働生活により、生活の面白みは完全に消え去り、男子は多く乞食に転じ、女子は多く自殺する。傅は、こうした原始社会さながらの農村と農民の窮状を描きながら、この一帯の状況がさらに悪化していると述べた。

この頃、この一帯の農民の生計は、以前と比べて次第に圧迫されてきた。一つは日本製品が侵入して来たからである、二つは兵士と土匪の蹂躪である。以前の農村には乞食が少なかったが、現在はなんと多いことか。西北地域は、山東と江蘇の境界地方ほど困窮がひどくはなかったが、今や疲弊が極めてひどくなった。大きな禍根は、即ち軍隊の徴兵であり、後で放り出して家に帰らせる。この疲弊しているとき、これらの解雇された兵士の悪習は極めて容易に伝染する¹²⁶。

傅は、このような疲弊した農村社会に帰郷した軍閥の元傭兵がもたらす悪習が急速に広まっていき、社会不安が強まっていくと考えた。もし解決に導く方法を考えなければ、中国の農村社会には、必ず大決壊の日が訪れるであろうと警告した。

第5節 中国社会改造——旧社会の崩壊から再生に向けて

1 社会改革への提案

傅は、清末以来絶え間なく継起してきた改革運動を回顧して、それらが国力の覚悟、政治的覚悟を経て、現在は文化的覚悟の段階にあり、将来は社会的覚悟へ進むとみる。一連の覚悟を抱いた先駆者たちによるかつての運動は、実際には決して先駆者たちの期待した結果を上げることはできず、前の結果を受け継ぐことはなかったと考えた。

傅によると、これまで垣根を飛び越えて進むのがもっとも都合が良いと考えていたが、現在はようやく、社会進化は自然の法則の支配を受けざるを得ないことを知った。さらに政治改革の成功を経て社会改革の段階に到達しているとみた日本の事例を参考に、「中国は、今は、社会的覚悟の段階にあるが、社会改造運動を起こすには、基盤が整備されなくてはならず、中国においては社会改造運動の基礎が脆弱なことがわかったので、いっそう努力し、軽率に愚かに取り組んではならない¹²⁷」と考えた。

この、社会改造運動の基礎が脆弱であることにより、改革は一時的に成功しても必ずすぐに強力な危機即ち反動が来るといふ傅の危惧は、彼自身が分析しているように当時も存続し続ける旧勢力の強大さを示すもので、浮薄な対応を許さないものであった。

傅は、社会変革の方策を探ろうと試みて、彼なりの伝統社会像を示すが、それは前節でふれた中国伝統社会の二重性であった。これを踏まえて社会改革を考えなければならなかった。

以前の中国社会には大変奇異な現象があった。即ち上級の社会と下級の社会は、ほとんど接触しなかったといえる。上級社会の政治、法律、儀礼と風俗などは下級社会に影響しなかった。つまり下級社会には彼らの自治の方法があったのである¹²⁸。この現象は、今やついに少し変わった。別の注意すべき現象が出てきたからである。即ち、大都市と農村あるいは地方小都市の生活が互いに、経済、思想、生活状況、組織、文化レベル、習俗等々ではっきりと異なり、両者の間には結局は、交流の道筋が非常に少なくなった¹²⁹。

上級下級が分離しているかのような中国社会を改造するために傅斯年が考えた社会改革の第一の方策は、上下それぞれに対して別々の対案が必要であると指摘することであった。しかし、新たに、社会のなかには、変化が起こっていることに注目した。すなわち、同じ伝統的文化の影響を受けながらも、上級社会とは別に独立した生活を維持していた下級社会に変化がみられることである。

傅は、こうした変化は、戦乱と外国人の勢力の経済的侵入の結果であり、もともとの農村社会が貧窮化し、死滅してしまったという。それゆえ農村の根本的な再生は不可能だとみなし、彼は農民生活の改造については、ただ次の点のみを提案した。即ち、農民を援助して固有の自治を維持し発展させ、最小限度の知識を農民に注入して、彼らの経済状況を発展させる。これを唯一の目的とすれば十分であり、そのほかのことはなるべくゆっくり対応すればよいと考えたのである¹³⁰。

次に、改造のための方策の第2は、彼が都市に期待をかけたことである。近代化に伴って、農村とは別の変化を遂げつつあった都市に彼は着目した。それは、農民の経済状況があまりにも低すぎた上に、元来の社会機構が散漫で、外国人との接触後、経済上大変化が起きた。その結果、都市の農村とのちがいがあまりにも大きくなり、もともとの都市と農村の関係が破壊されてしまったと考えたからである¹³¹。今日では、都市社会と農民社会の状況が全く違うため、互いの流通促進を進めることが必要であると考えた。交流を促して経済・社会・文化上の統一を進めることを意図したのである。

都市と農民の生活を接触させることが——元々接触は非常に少なかった——却って緊要である、なぜなら、もし中国人の文化のおおよその一致と生活の相互接触を促進しなければ中国民族の健全性を増進できないからである。都市内部の一般社会でもやはり互いに接触しない欠点があり、職業が一旦違えば生活上差異が生まれ、思想上必ず一つにできない。大都市の中でも、異なる社会同士は、互いに社会的関係を持つことが非常に少ない。連合して社会の共同生活をし、団結した組織をつくり、この組織により活動することなどは論外である¹³²。

傅は、中国の社会にはただ群衆だけがいて、決して社会ではないと言ったが、それは、互いにつながりを持った関係が少ないことにより、動的な力量が余りに少なかったからである。この状態を克服し、統一した中国を作り出すには、社会の間の交流を促進することが必要であるとして、まず第一歩として、大都市の社会と農民の社会とを連携し、次いで都市の中の各種の社会集団を相互交流させるための行動を起こすことが必要であると考えた¹³³。

2 新しい文化の創造へ

彼の提案は、都市や農村で孤立状態に置かれた人々の相互の交流を盛んにし社会の一体化を進め、中国民族全体の統一への前提を作り出すことであった。そのための前提とは何か。傅はすでに衰弱した精神に

代わって、中心となる新しい文化の誕生を期待した。

傅は、新しく中心的文化として台頭してきているのは、大都市の文化であるが、この文化が作り出したものは、浅薄で、物質的、奴隷的な人間に過ぎないと考え、新たな文化創造の担い手として知識青年を考えた。彼は、青年に「大胆に考え、しっかり考え、自由に考えて個性を発展させよう」と呼びかけた。

近代の思想には、二つの傾向がある。ひとつは個性的なものであり、もう一つは社会的なものである。数世紀前は個性の発展が主張されたが、ここ数十年は社会性の発展を内容としている。中国人は、最新の思想傾向に加入せざるを得ないが、しかし、前世紀の思想傾向である個性の発展も必ず求めるべきである。個性が十分に発達する段階を経なければ、文化上必ず無味乾燥である上、突然に社会性に転じるならば、文化上非常に根柢が薄弱となる。故に、中国の今後の思想運動は、この二つを同時に行うべきである¹³⁴。

さらに、自由に思想のできる人は必ず、科学を理解し、それを活用できる人であるといい、「中国人にとって科学が身近なものにならなかったのは、以前、科学に対してただその物質的効用を承認し、その精神的効用を知らなかったから、科学は中国人に身近なものにならなかったのである¹³⁵」と考え、かつての思想を「製造局の考え」といい、それは、機械的科学観であり、狭い意味の科学であると批判した。彼は、個人主義思想は科学的思考に支えられなければならないと考えたのである。

傅斯年が五四運動に対して抱いた一筋の光明も、「社会的責任心」から「社会的道德心」を形成し、「理解力」即ち科学的知識を培養しなければ、容易に雲散霧消するだろうと考えた。成熟しないまま地に落ちて、又、危機を招来する可能性が大きいと恐れた。なぜなら、中国人は覚悟するのは早い、それを持続させることができないからであり、中国社会には長い歴史を経て頑固に伝わってきた悪性の病根があり、変化の後には必ずその病根が発作を起こし反動が出現すると考えた。彼は、中国人の無責任を心底憎んだ¹³⁶。

3 群衆と個人——傅斯年の見解——

傅斯年は、五四運動を、清末の革命運動や立憲運動と同様に、「平民運動」とみなした¹³⁷。五四運動が、各人の直接行動を運動の出発点としており、平民の責任心を喚起することに努めたことを重視した。ここに彼は、中国社会の改造の萌芽が表れたと考え、今後の平民運動が、社会運動としての性格を有して出現するとみなした¹³⁸。

しかし、五四運動後数ヶ月の間に出現した社会運動に対しては、傅は強い懸念を表わした。この懸念は彼を強く突き動かし、以前に警告した中国の群衆の再来として、警戒心をもち、学生に一層実力を蓄えて、その力をあまりに早く猛烈に発散しないよう忠告した¹³⁹。

学生についても、「もし青年が群衆運動を知るだけで、個人運動があることを知らないならば、彼らは多くの欠点を持つであろう」と、その「群衆性」を懸念し、次の4点を挙げて群衆運動を批判した¹⁴⁰。要約すると次のようになる。

- 1 群衆運動は、一時的には「強風が草をなぎ倒す」効果を収めるかもしれないが、しかし、内部に不健全な要因があると持ちこたえられない。
- 2 社会は生成するもので、創作するものでもない。
- 3 群衆運動があまりに広がると、怠惰な人が一当然大多数を占めている一中に入り込む。
- 4 現在の中国には、多くの問題がある。それらは群衆運動では解決できないが、個人運動なら解決しやすい。

彼の群衆運動論と民衆理解とは、深い関係があった。知識人としての彼は学術（科学）の裏付の無い群衆の行動に対し常に不信感をもっていたからである。しかし、彼は、群衆運動を全く否定したのではない。

私は決して群衆運動が良くないというのではない。「五四」以後の青年の社会に対する責任心（Responsibility）は、どうして群衆運動でないだろうか。群衆運動は民治国家に欠かすことのできないものである。しかし、社会改造は決してもっぱら群衆運動に依拠することはできない。個人運動がさらに大事である¹⁴¹

彼が個人運動と言う場合、それを行う「個人」は、科学的知識を学び、道徳的行為を鍛えて犠牲的精神を発揮することのできる人間をさしており、これをもたない「群衆」は、「市民」として認められないのであった。

1920年5月4日、五四運動の1周年の日にロンドンで、友人の劉半農とともに精神的に落ち着かない一日を過ごした後、「青年の二つの事業」という文章に、自分が考えてきた思いを「無中生有的造社会」という言葉で表現した。彼は、英国へ留学した1920年5月以後は、この「青年的兩件事業」を最後に、社会的発言をやめた。そこでは、「公衆」「民族」「市民」の概念を使用している。

青年知識人がこれから担うべきであると彼が考えた「無中生有的造社会」とは、「無から有を生じる」という老子の言葉を使い、一塊の人間がいるだけで散漫な状況から、細かな新しい団結を作り、新しい社会倫理をそこで形成し、これらの団結した組織を中華民国の社会へ結合するべく粘着させる、というものであった¹⁴²。青年が果たすべき任務と彼が考えたのは、二つの事業であった。

我々は、この世界でただ一国の人間であるだけでなく、世界の中の市民でもある。現在の時代について言うと、世界の団結は、なお、民族を単位としなければならない。故に、我々の公衆に対する責任には両面が有る。一つは一国の市民としての側面であり、別の一面は世界の市民としての側面である

¹⁴³。

青年の任務とは、社会的責任を自覚した「公衆」をさらに一国の市民即ち国民にまで陶冶することと、国民を世界市民の自覚をもつまでに成長させることである。彼は、今後の課題として、「民族自決」を提起した。

傅は、世界の各民族と協調関係を維持するとともに、世界的な「民族自決」の流れに注目した。中国人の民族自決の観念を問い糾し、「中国人の心理の中の自決は、他人に代わって自決をしてくれと言うものだ」として、その主体性の欠如を嘆いている¹⁴⁴。以前、国家主義を強く否定していた傅であるが、第一次世界大戦後の世界の民族主義、民主主義の潮流の中で改めて民族自決の意義を確認し、中国の今後の課題として位置づけたのである。

傅斯年の「無中生有的造社会」という考えを理解する一助として、前章でも触れた橘樸の文章を参考にしたい。

新文化運動により近代的自我の自覚を経た青年学生が社会的責任観に目覚めた¹⁴⁵。彼らの愛国心は、現実の政府に対して向かったものではなく、存在しないが理想のあるべき国家及び社会建設に向かったもので、それは極めて困難な事業である¹⁴⁶。

橘は、中国は国家ではないこと、少なくとも現在の中国は、完全な国家の在り様からは、はるかに遠いと考えていた。中国の青年がこの事実を見極めて、自らの理想に向かって国家と社会の建設という困難を極めた事業を担おうと覚悟していることに対する、同時代とともに生きる橘の理解と共感の言葉であった。

おわりに

1918年から1920年前半までの約2年間、傅斯年が新文化運動において行った急進的社会批判と社会論は、まだ青年期にあった彼が、すでに中国社会の中の何を核心的問題として意識していたのかを明らかにしてくれる。それは、中国の長い歴史において、中国社会の基層に存在し続けた民衆の結合のあり方と中国社会の改革の方途の探究であった。

傅斯年が1941年病気で倒れた時、胡適に宛てて書いた手紙(1942年2月)のなかで自分の一生を振り返り、「私は元々政治社会に不満であったが、良い路線を見出せなかったため、学問に逃げ込もうとしたが、どうしてもこの生民をわすれることができなかった¹⁴⁷」と、述べている。

彼が青年時代に中国社会に対して行った探究が、彼の一生を貫いてきた課題でありいかに真摯なものであったかを窺うことができる。そのとき自らに課した課題こそ、中国の民衆[原文：生民]の問題であり、彼が一生「生民」への責任を意識し続けていたことを知ることができる。

中華民国初期の混乱した社会の中で、彼がこの時発見したのは、前近代的宗法社会にあるがごとき民衆であった。彼はそれを「群衆」と呼んだ。しかし、彼が発見したのは、旧社会の民衆ではなく、実は旧社会が没落し崩壊した姿であり、そこに、形成されてきた新興の社会組織に対しても同じような批判の目を

向け、新旧を併せて現実に存在するすべてを否定しようとした。そして、青年知識層に新しい社会を創造することを期待したのである。

傅は、この批判的問題意識をもとに、中国社会解明への第一歩を踏み出していった。彼が社会分析に用いたのは、王汎森が指摘しているように清末より中国に広く影響を与えていた社会有機体論であった。

社会有機体論は、清末から民国初期、新文化運動期に至る時代に共通する社会観であった。それは、本来は、西洋近代に形成された市民社会の分析に使用された社会学理論であったため、それが中国社会へ適用された場合、当初は啓蒙的な新思想の紹介というレベルから抜け出すことはできなかったといえる。

新文化運動の新しい担い手となった傅は、この西洋起源の社会有機体論を以って、中国社会の分析に具体的に应用することを試みた¹⁴⁸。彼の社会論は、当初中国と欧米の社会の対比法であり、欧米人の眼をもって中国社会の後進性を受け止めることから出発した。それが、「一盤散沙」と「群」をもって中国社会を理解することであった。

又、康有為や梁啓超が中国社会の「群」を改革の力量とすることを意図したのに対し、傅は、「群」を旧時代の遺制として否定し、現存する散沙のごとき「群衆」のなかに長期の専制のもたらした歴史的遺制を見出した¹⁴⁹。その結果、啓蒙的な新思想の紹介の段階から抜け出て、中国社会研究において独自の立場を得て、社会論形成に向けて一歩前進することが可能となったのである。

傅が静的な中国社会を動的社会に変えたと考えた五四運動で社会的勢力としてその存在を發揮したのは、以前彼が批判した都市の「群衆」であった。実は、その「群衆」は、社会的経済的変動の影響を受けていたのである。しかも、五四運動時、彼らに対して行った学生の啓蒙活動が、「民衆」を活性化させた。

しかし、五四運動の後に続いて起こった社会運動の混乱の中に、彼は告発し続けた宗法社会の群衆を再び見た。中国は社会になったと評価しながらも、なお中国社会に残る「群衆」的遺制が再び反動をもたらすのではないかと危惧した。こうした危惧を抱いたのは、歴史的に引き継がれてきた専制の「遺産」の大きさとともに、改革運動を成功に導くための社会的基礎が弱体であることに気づいていたためであった¹⁵⁰。

そこで、傅が、青年に呼びかけたのは、「無から社会をつくる(無中生有的造社会)」であった。彼は、この「造社会」論を主張し、科学的知識と犠牲的精神に富んだ「個人」の形成こそが、中国社会の建設を目的とする社会運動の前提になると主張した。彼のヨーロッパ留学は、この信念を実現するためであった。

彼の後に続き多くの青年が海外留学に旅立ち、西洋科学を学んで世界文明の中にある中国社会の創造を担おうとした¹⁵¹。個人主義に立ち一体性のある有機的社会を造り近代国家形成を目指す傅斯年の思想は、新文化運動が生んだ思想的成果であった。

傅斯年は、1920年5月以後は社会的発言をやめた。研究に専念したからである。しかし、彼の「無から社会をつくる」という「造社会」論は、青年の間に大きな影響を与えて、社会運動の展開を励ました。少年中国学会の全国的な発展はそれを証明している。

一方、傅斯年の「群衆」理解に対して、相異なる主張が生まれてきていた。五四運動の中で、民衆の運動を直接体験した新潮社の盟友羅家倫は、五四運動一周年の1920年5月に、学生運動の群衆運動としての限界を指摘するとともに、経済先進地域である上海の企業家・商人・労働者の社会的力量への信頼を表明していた¹⁵²。さらに、「群衆」を自らの政治的資源とみたのは、当時広州を逃れて上海にいた孫文であった。

一方、武漢で五四運動を指導した惲代英は、1919年10月、主要都市の青年知識人の組織化をすすめていた少年中国学会に入会し、新文化運動の影響を受けて、思想的な転換を遂げていった。1920年春、北京に滞在し、李大釗ら北京の主要な会員と交流した惲は、友人への手紙で自分が長年「生物的道德観」を抱いてきたことを告げるとともに『建設』や『星期評論』が鼓吹している「経済的唯物論」に注意するよう促していた¹⁵³。

社会経済の変化から生まれてきた新興階級の登場と唯物論の影響を受けて思想変化に進む全国各地の知識青年の登場は、社会改革をめぐる新たな段階へ進むための強力な動力となっていったのである。こうした思想傾向と切り結びながら、傅斯年の提唱した「造社会論」が、実際の社会運動の発展の過程でどのような変容を遂げていくか、この点についての分析は稿を改めたい。

註

- 72 傅斯年は、『新潮』の編集長として、創刊号の「新潮発刊旨趣書」を書き、新潮社の思想上の指導者であった。彼は、古文・白話文の書き手であり、その優れた学殖は、学内に知られ、推されて5月4日の学生デモの指導者ともなった。
- 73 王汎森『傅斯年——中国近代歴史と政治中の個体生命』生活・読書・新知三聯書店、2012年。同書は、王汎森が、1992年プリンストン大学の余英時教授の下で作成した博士論文 *Fu Ssu-nien, A life in Chinese history and politics*(Cambridge University Press 2000)の中国語訳である。
馬亮寛『傅斯年 社会政治活動と思想研究』中国社会科学出版社、2009年。
- 74 馬亮寛には、前掲『傅斯年——社会政治活動と思想研究』のほか、『傅斯年教育思想研究』遼寧教育出版社、1997年、前掲の布占祥との共同編集『「傅斯年与中国文化」国際学術討論会論文集』、王志剛・馬亮寛主編『傅斯年学術思想的伝統と現代研討会論文集』天津人民出版社、2011年などがある。
- 75 王汎森「傅斯年早期的「造社会」論——從两份未刊殘稿談起」、『中国文化』第14期、1996年12月。
- 76 許紀霖「作為社会運動的「五四」、『学術月刊』第41巻5月号、2009年5月。許紀霖は、王汎森氏を受けて五四運動の社会運動としての性格に注目している。
- 77 後藤延子「傅斯年」、山田辰雄編『近代中国人人名事典』霞山会、1995年。
- 78 「時代と曙光と危機」は、『中国文化』第14期、1996年12月、「欧游途中随感録 北京上海道中」は、王汎森・杜正勝編『傅斯年文物資料選輯』中央研究院歴史語言研究所、1995年に紹介された。前者はもともと、『新潮叢書』の一つとして書かれたが刊行されなかった。2稿とも『傅斯年全集』第1巻に収められている。
- 79 傅斯年「留英紀行」1920年8月6・7日『晨報』、『傅斯年全集』第1巻。
- 80 上原淳道「中国における古代史学の発展」、『上原淳道中国史論集』汲古書院、1993年。竹元規人「近現代中国における考古学の命運——歴史をめぐる「伝統」と「近代」、高柳信夫編著『中国における「近代知」の生成』東方書店、2007年、同「顧頡剛、傅斯年の中国上古史研究と民族論・疆域論」、『中国哲学研究』第24号、2009年など多数。
- 81 傅斯年「留英紀行」、『傅斯年全集』第1巻401頁。
- 82 初期の傅斯年の学術批判の文章は、『新青年』、『新潮』、『北京大学日刊』、『晨報』にある。それらは、未公刊資料も含めて『傅斯年全集』に掲載されている。
- 83 ベラ・シュウォルツは、哲学者馮友蘭の取材から、新潮社の同人たちが嚴復から受けた学術上の影響力として特にその論理学を挙げ、嚴が論理学の中国への導入に果たした意義を確認している。前掲『中国啓蒙運動——知識分子と五四遺産』。嚴復は特にミルの帰納法を紹介した。『新潮』には、会員が紹介する邏輯(論理学)に関する文章が掲載されている。後藤延子は、嚴復が「西洋近代の政治・社会理論の翻訳・紹介と同時に、1900年に、「名学会」を組織し、西洋の論理学の移植により中国人の思维方法の变革に精力を傾注した」と評価しつつ、これは、嚴復が「近代社会を現実化するための政治的变革に先立って、中国人の近代人への転生を必須条件とした」からであると指摘した。後藤は、嚴復のすべてを教育に還元するこの立場を、保守的であるとして批判的な解説を行っている。「蔡元培の大学論—北京大学の改革を中心に—」『信州大学人文科学論集』1979年。
- 84 新文化運動期は翻訳の時代でもあった。傅斯年は、西洋学術の導入のために、正確で平易な翻訳を重視した。翻訳においては、第一に直訳でなければならないと周作人の直訳型翻訳を推奨し白話文の欧化を主張した。嚴復の翻訳法を「古文の筆法、八股文の筆法であり、西洋人が中国人の学者の服装をしているようなものだ」と批判し、文章の古風ぶりを批評した。「怎樣做白話文」「欧化的白話文」、『新潮』第1巻第2期、1919年、「訳書感言」『新潮』第1巻第5号、1919年、『傅斯年全集』第1巻所収。
- 85 傅斯年は、1926年ドイツから帰国した。1927年の国共分裂時、国民党の中国支配を正統と認めた。中国古代史の学術研究者としての立場を一貫して貫き、実際の政治職務には任じなかった。国民党政府を支持し、抗日戦争中は国民参政員として国民の一致団結のために尽力した。1949年台湾大学校長として台北に赴任してまもなく1950年に死去した。彼は、全土の支配を確実にした中国共産党の毛沢東により、胡適、錢穆とともに、外国勢力の手先と名指して徹底的に批判された。他方、孔祥熙ら四大家族の「腐敗」と独裁政治を継続した蒋介石父子を批判したため、台湾においても、長い間歴史の闇のなかに葬られた存在であった。
- 86 「中国歴史分期之研究」は『北京大学日刊』(1918年4月17日から23日)に掲載された。
- 87 桑原の時代区分の根拠は、東洋諸民族の盛衰興替を標準にとったものである。傅斯年は、1、桑原氏の研究対象が日本を除く東アジア地域であり、中国一国の歴史ではないこと、2、時代区分の標準が一つでないこと、3、いわゆる漢族が歴史上種族として一貫した存在であるという誤認に陥っていることの三点にわたって批判した。傅斯年は、何をもちいて歴史区分とするかがキー・ポイントであるとして、中国の領域に生じた種族を標準に彼独自の時代区分を提起した。傅斯年は、桑原氏の時代区分法が、当時中国で出版されていた歴史教科書の記述の標準として広く使用されていると指摘している。桑原『中等東洋史』の漢訳本は、『東洋史要』という名称で多種出版されており、傅斯年がどの『東洋史要』を使用したかは特定できない。桑原『中等東洋史』の漢訳本については、鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳——桑原著述「東洋史」漢訳教材の考察—」、『史学研究』第250号、2005年を参照。『新青年』第3巻第3号(1917年5月)には、科学的研究法を主唱する桑原氏の「中国学研究者之任務」が翻訳紹介されていた。「当時は日中の歴史学の交流の敷居が今日と比べて意外に低かったようである」と竹元氏

- も指摘している。竹元規人「顧頡剛」、趙景達責任編集『講座東アジアの知識人』3（『「社会」の発見と変容—韓国併合〜満州事変—』）有志舎、2013年、204頁。
- 88 劉媛媛は、新文化運動時期の学術思想の進化について、顧や傅らが「旧より新へ向かう」事はできるが「旧を新に変えることはできない」という歴史進化の内部考察を深めたことを論じている。前掲劉媛媛「「兼收併蓄」下的「新旧之争」、『傅斯年与中国文化』284頁。
- 89 傅斯年「社会——群衆」、『新潮』第1巻第2号、1919年2月。『全集』第1巻151頁。
- 90 この時期(1918年6月)に書いた社会批判の文章はほかに「心気薄弱之中国人」「自知與終身之事業」「社会的信条」で、ともに『新潮』第1巻第2号に一括掲載されている。『傅斯年全集』第1巻所収。
- 91 傅斯年は「西洋人の観察者の言」と言うが、実はこれは嚴復が訳した『社会通詮』上で、訳者嚴復が述べていた言葉でもあった。
- 92 杜亜泉「静的文明与動的文明」、許紀霖・田建業編『杜亜泉文存』、上海教育出版社、2003年338—344頁。初出は『東方雜誌』第13巻第10号、1916年10号。杜亜泉は、西洋文明と東洋文明を、動と静で対比して、中国社会の構造とその性質を表現しているが、これも社会有機体論的考え方から論じたものである。
- 93 藤井隆は、「群」から「社会」へ極めて容易に転化が行われたかのような説明に対し「安易」過ぎる語りであり、「群」と「社会」の差別を十分にとらえきれていないと指摘している。「梁啓超の合群論とナショナリズム」、『広島修大論集』第44巻第1号、2003年。
- 94 金観濤・劉青峰『観念史研究——中国現代重要政治熟語の形成』法律出版社、2009年539—540頁。
- 95 近代資本主義のもとで生み出された政治的存在としての「近代的群衆」は、19世紀にヨーロッパにまず出現した。「近代的群衆」については、今村仁司『群衆—モンスターの誕生』筑摩書房、1996年を参照。傅は、中国に出現した「群衆」の性格が、中国伝統社会の痕跡を身にまとっていたことを凝視つづけた。
- 96 傅斯年「新潮発刊旨趣書」、『新潮』第1巻第1号、1919年1月。『傅斯年全集』第1巻、80頁。
- 97 日本における先駆的な嚴復研究には、熊野正平「嚴復の中国社会論」、一橋大学研究年報『社会学研究』第2号、1960年がある。熊野は『社会通詮』の検討を行い、嚴復によると「西洋諸国が既に国民国家の段階に到達しているのに、中国は開化の初期において世界に先駆けながら、その後、社会は幾千年も停滞し、今なお宗法社会に留まっている」という。熊野氏は「夫天下之群衆矣」の部分を「天下の群衆」と読み下し、「世界人類の社会」と注記している。ここは「夫天下之群、衆矣」と標点を打ち「それ、天下の群、多し」と読むべきであろう。「Society」を「群」と翻訳した嚴復においては、「群」は歴史段階に即して存在する社会的結合形態とみなされていたのではなかろうか。なお、この「夫天下之群、衆矣、」に続く部分を訳すと次のようである。「西洋人は進化の段階を、図騰(トータム)に始まり、宗法に継いで、国家になると考えている。」甌克思著嚴復訳『嚴復名著叢刊 社会通詮』、商務印書館、1981年、訳者序。
- 98 前掲「社会——群衆」『傅斯年全集』第1巻、151頁。
- 99 横山は、国民革命時期を扱った論文で、「ギルドが業界の集团的利己主義を迫及し、閉鎖的であった」という今堀誠二の言葉を引用し、当時の中国社会で支配的であった前近代的な社会結合——商工業ギルド・同郷団体・宗族・村落など——とそれを基盤とした前近代的な社会構成を破壊し、革新的勢力を結集するために、有効な国民の政治的統合の基礎となる組織が課題とされたことを述べている。横山英「国民革命期における中国共産党の政治的統合構想」横山英編『中国の近代化と政治的統合』溪水社、1992年、51—52頁。
- 100 前掲「社会——群衆」『傅斯年全集』第1巻、152頁。
- 101 前掲王著34頁。前掲馬著53—54頁。
- 102 王汎森の著書は、5月4日のデモを曹汝霖邸に向かわせることを強力に主張した国民社と傅斯年の間には対立があり、翌日、国民社の許徳珩と論争し互いに殴りあったという記述がある。馬亮寛氏の記述には、論争の相手は許徳珩とは違う胡霽塵という人物を明記しており、論争内容には言及していない。傅斯年と国民社の間には運動方針の対立があったことが窺われる。前掲王著35頁、馬亮寛著54頁。
- 103 羅家倫「五四運動的精神」1919年5月26日『每週評論』第23期、。
- 104 この時期の傅斯年の思想を知る上で、8月26日に袁同礼へ出した手紙や、9月5日、5人の北京学生連合会代表の一人として帰任する米国公使ラインシュと行った対談での傅の発言(『申報』1919年9月13日)がある。五四運動が傅に与えた影響を知るのに有益だが、『傅斯年全集』には記載されていない。
- 105 前掲「新潮之回顧與前瞻」、『傅斯年全集』第1巻、203頁。
- 106 傅「山東底一部分的農民状況大略記」、『新青年』第7巻第2号、『傅斯年全集』第1巻、361—72頁。「時代与曙光与危機」、『傅斯年全集』第1巻、345—57頁。
- 107 傅斯年の「社会的責任心」という言葉は、日本語に訳すと社会的責任、又は、社会的責任観とすべきであろうがここでは、傅の用語を使用する。
- 108 傅「時代与曙光与危機」、『傅斯年全集』第1巻、345頁。
- 109 前章ですでに指摘したように、傅は、『新潮』創刊号の「評壇欄」の「社会革命」で、ロシア革命を近世史の思想の自由の発展の過程として理解しており、ロシア革命の混乱した情勢に対して悲観していなかった。
- 110 同上、46頁。
- 111 同上、46頁。

- 112 傅「青年的兩件事業」、『傅斯年全集』第1巻、385頁。原載は1920年7月3—5日号の『晨报』。
- 113 傅斯年は、ここで封建制と専制を明確に分離して用いているが、馬亮寛氏は、中国の長期の専制を「封建専制統治」といい、傅斯年の使う専制を「中国古代の秦漢以後の封建専制統治」と読み替えて論じている。そのため傅斯年の意図が正確に伝わらない。馬『傅斯年 社会活動与思想研究』63頁。
- 114 傅「時代與曙光與危機」、『傅斯年全集』第1巻、348頁。
- 115 同上 355頁。
- 116 章炳麟『『社会通詮』論議』（原題は「社会通詮商兌」）初出は『民報』12号、1907年。西順蔵・近藤邦康訳『章炳麟集』岩波書店、1990年、228頁。
- 117 傅斯年「中国狗和中国人」、初出は『新青年』第6巻第6号、1919年11月、『傅斯年全集』第1巻、299頁。
- 118 橘樸「中国民族運動としての五四運動の思想的背景」。初出は、『月刊支那研究』第2巻第3号、1925年8月。『橘樸著作集』第1巻（『中国研究』）、勁草書房、1961年、452—454頁。
- 119 前掲『新青年』第7巻第2号、1920年1月。『傅斯年全集』第1巻、361—372頁。
- 120 陶履恭「社会調査」、『新青年』第4巻第3号、1918年3月。陶履恭は、字を孟和、『新青年』での筆名は陶履恭、後に陶孟和を使用している。東京高等師範学校を卒業、ロンドン大学に留学し、経済学士。社会学者。
- 121 李大釗は、「青年よ、速やかに農村に行け！」と言い、「日の出とともに、仕事をし、日が没して休み、田を耕して食らい、井戸を掘って飲む」農民生活を「自給自足」的に牧歌的に賛美した。「青年與農村」、初出は1919年2月20—23日『晨报』、『李大釗文集』上、人民出版社、1984年、648—652頁。
- 122 前掲「山東底一部分的農民狀況大略記」、『傅斯年全集』第1巻、369頁。
- 123 いずれも明・清期の章回小説で、『包公案』以下は、清廉な官吏や義侠を主人公とした裁判小説である。民間に流行していた講談小説の持つ民衆への影響力に傅斯年が強い関心を持っていることに注目したい。庄司格一『中国の公案小説』、研文出版、1988年参照。華北農民の宗教心については、三谷孝「紅槍会と郷村結合」柴田三千雄他編『シリーズ世界史への問い4 社会的結合』岩波書店、1989年、121頁。
- 124 前掲「山東底一部分的農民狀況大略記」、『傅斯年全集』第1巻、369頁。
- 125 同上、370頁。
- 126 同上、371頁。
- 127 前掲「時代與曙光與危期」、『傅斯年全集』第1巻、350頁。
- 128 同上、351頁。
- 129 同上、351頁
- 130 同上、351頁。
- 131 同上、351頁。
- 132 同上、351頁。
- 133 同上、352頁。
- 134 同上、356頁。
- 135 同上、357頁。
- 136 前掲「中国狗和中国人」、『全集』第1巻、298頁。「中国では覚悟を持った志士たちによる絶え間ない改革運動が起こるが、それは一時的に成功しても必ずすぐに強力な危機即ち反動が来る」という傅斯年の危惧は、当時まで伝来し続ける旧勢力の強大さに起因すると指摘していた。ところで、この革新と反動の關係に触れた論文として、1942年、戦時中に書かれた藤枝丈夫「支那思想界の現状」がある。藤枝は、辛亥革命から五四運動、満州事変までの思想運動の敗北の事蹟の中に次の教訓を見出すとして、「支那における思想界の動向は、対外的には民族主義・対内的には民主主義の徹底を特質とするが、その基礎をなす社会自体の二重性の故に、いずれの面においても根本勝利を獲得しがたい。したがって高揚期のただ中であっても、主要な動向と逆行する動力が常に掣肘作用をもっており、しばしば、出発の時期と全く異なった様相を結果付ける。しかして、その制御力の主要なものは、国内の封建勢力の強固な地盤から生まれ、これと緊密に結ばれた列強勢力によっていっそう決定的に作用せしめられるのである。」と述べている。實藤恵秀編集『近代支那思想』光風館、1942年、276頁。
- 137 前掲「新潮の回顧與前瞻」、『傅斯年全集』第1巻、203頁。
- 138 傅斯年は「中国狗和中国人」の文中で、「公衆」の語句を使用しており、五四運動を「公衆」の責任心を喚起する運動であったという。彼は、「公衆」を啓蒙運動の対象者として扱い、以前の「群衆」とは区別している。彼の「公衆」は、社会的責任心を備えるに至った民衆をさしていると考えられ、公衆によって、政治的平民運動が開始されると展望していた。前掲「中国狗和中国人」、『傅斯年全集』第1巻、299頁。
- 139 前掲「新潮の回顧與前瞻」『傅斯年全集』第1巻、203頁。
- 140 前掲「欧遊途中随感録」『傅斯年全集』第1巻、382頁。
- 141 同上、383頁。
- 142 前掲「青年的兩件事業」『傅斯年全集』第1巻、386頁。
- 143 同上、386頁。
- 144 同上、388頁。
- 145 橘樸は、傅斯年の言う「社会的責任心」という言葉を、社会的責任、または、社会的責任観念と表現している。

-
- 前掲橋樸「中国民族運動としての五四運動の思想的背景」、454 頁。
- 146 前掲橋「中国民族運動としての五四運動の思想的背景」452—454 頁。浜口裕子・家近亮子は、1922 年の橋が、中国の最大の課題は民衆の「国家意識」を創造することであり、この意識に現状で目覚めているのは「学生青年」で、彼らにより民衆は十分に覚醒する可能性があると確信していたと指摘している。『京津日日新聞』の橋樸の論評」山田辰雄・家近亮子・浜口裕子編『橋樸 翻刻と研究』慶応義塾大学出版会、2005 年、614 頁。野村浩一氏は、橋樸の中国社会に対する認識を高く評価している。『近代日本の中国認識 アジアへの航跡』研文出版、1981 年、234—243 頁。
- 147 これに続いて、傅斯年は、民(原文は生民)のことが忘れられないため、「(学問の世界から) 外へ出たり入ったりし、ある時は声を荒げて獅子吼し、出ても遠くへは行かず、長く留まらず、そのため一事もなしえなかった」と省みている。『全集』第 7 巻、235 頁。呉相湘は、傅斯年のこの言葉に対して「当代の学者のもっとも貴重な自画像である」と評し、傅の士大夫の責任感という点を指摘している。しかし、傅の歩み自体が、青年期の初心に忠実であったこと、即ち近代の五四世代人としての歩みであったことに注視したい。呉相湘「傅斯年学行併茂」『傅斯年印象』学林出版社、1997 年、181 頁。
- 148 劉媛媛は、前述したように、新文化運動期において、歴史的観点と世界的見方が普遍的な影響を持ったことを指摘している。傅斯年や顧頡剛らの歴史研究方法は、西洋と中国を対比する啓蒙的視点にとどまらず、進化論により獲得した「科学性」を用いて中国社会の分析に応用するまでに深化したとみなすことができる。
- 149 王汎森は、傅斯年が梁啓超の「群論」を継承していると指摘したが、しかし、傅の「群衆論」は、梁啓超への批判という段階を経ており、これは新文化運動期の批判活動が生み出した成果である。
- 150 前掲「時代与曙光与危機」『傅斯年全集』第 1 巻、350 頁。工業化に成功した日本が、当時直面している社会改革にはそれだけの力量があるが、中国の社会改造運動には、そのための土台が脆弱であると指摘していた。
- 151 新文化運動を担っていた新潮社の同人や少年中国学会の会員たちをはじめ多くの青年学生が欧米諸国に留学した。1920 年は、運動の担い手の一時的な入れ替わりと思想内容上の変化という現象があり、新文化運動は新たな段階に入ったとみることができる。
- 152 羅家倫「一年来我們学生運動底成功失敗和将来应采取的方针」、『新潮』第 2 巻第 4 号。
- 153 惲代英「致胡業裕(1920 年 10 月)」、『惲代英文集』上巻、人民出版社、1984 年、247 頁。『建設』雑誌、『星期評論』は、1919 年に創刊された国民党系の出版物である。惲の史的唯物論への関心の表れは、エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』の一部抄訳を「英哲爾士論家庭的起源」の題名で、『東方雑誌』の第 17 巻第 19 号と 20 号に投稿したことからも窺うことができる。社会運動の発展については、王奇生(丸田孝志訳)「個人・社会・大衆・党一五四運動前後の連関と発展」村田雄二郎編『リベラリズムの中国』有志舎、2011 年参照。

第2部 社会運動の興隆——五四運動後の青年の思想と行動——

第1章 少年中国主義の成立と展開

——新文化運動期、王光祈の社会改革論——

はじめに

少年中国学会(以下「少中」と表記する)は、中華民国北京政府下において、1918年6月30日に四川省出身の王光祈(1892—1936)・曾琦(1892—1951)・陳愚生(1889—1923)、周太玄(1895—1968)、張夢九(1893—1974)、雷宝菁(1900—1918)の6人に李大釗(1889—1927)が加わり、7人により発起され、翌年、五四運動直後の7月1日に正式に成立し、1926年3月に活動を停止した青年知識人の組織である¹⁵⁴。会員数は、存続した7年9ヶ月の間に入会した総数としては116名前後であったに過ぎない¹⁵⁵。しかし、台湾の王汎森は、「同時期の青年に対して非常に大きな影響を与えた社団」と、評価している¹⁵⁶。

「少年」とは、青年を意味する中国語である。「学会」とは、今日の専門研究者により構成される学術研究のための組織とは異なり(現代の中国では、日本と同じくアカデミックな組織を意味する)、知識人による多様な目的を以て組織された団体を意味した。学術交流、社会改革や革命、修養を目的とした団体などがあつた。特に戊戌の改革時期には、士大夫階級の青年により学会活動が極めて活発であつた。

少年中国学界が活動していた時期は、新文化運動期から国民革命への転換期に当たり、新教育を受けた青年層は中国の革新を担う新しい力として、囑望されていた。地域を超えて主要都市の知識青年を組織した「少中」は、新文化運動の発展と五四運動の発生という文化と社会の大きな変革の時期に生まれた。

「少中」は、会の活動の基本方針として70条の規約を定めた。この規約は、1919年に第二条の宗旨の項が改正されただけで、以後は一度も改正されなかつた。以下に、「少年中国学会規約第一章総綱」を記す。

第一条：本学会は少年中国学会と命名する。

第二条：本学会宗旨：科学的精神にもとづき、社会的活動を行い、以て「少年中国」を創造する。

第三条：本学会の信条：一、奮闘、二、実践、三、堅忍、四、儉朴。

今日「少中」の活動を代表するものとして一般に知られる宗旨は、上のように簡明な表現で、活動の目的として「少年中国の創造」を明示していた¹⁵⁷。「少年中国」とは、彼ら青年が創造することを目指した20世紀新時代の国家であり、少年中国主義は、「少中」の指導者だつた王光祈が会の根本理念として内外に示した中国社会改革論であつた。

「少中」の発起者である王光祈、曾琦らは、自分たちの組織を、「全国の青年を集合し、中国に新たな生命を創造して東亜に新紀元を拓く中華民国の青年活動の団体である」と位置づけた¹⁵⁸。彼らは、自分たち会員の背後には、五四運動に参加した多数の知識青年が全国規模で存在することを自負していた。王光祈は、「少中」と中国青年の思潮の関連を次のように論じていた。

少年中国学会員は少数の青年の結合であるけれども、少年中国の精神は却つて、中国の大多数の青年思潮の結晶である、我々会員の口を借りてそれを話しているにすぎない。少年中国学会の最も重要な使命は即ち、中国青年の精神を表現していることであり、中国青年の思潮がなければ、少年中国学会は無いのである¹⁵⁹。

発起者の1人である張夢九も、「少中」が極めて短期間のうちに全国にその名を響かせることができた要因の一つとして次のような当時の青年の状況を挙げている。

当時は五四運動後で、世界の新しい動きが日に日に変わっていくのに対し、中国の政治は暗闇のままであつた。だが、社会各方面には、微かな曙光がさしてきていた。全国の青年は新しい知識と出口を求めて、みな非常に敏感であつた¹⁶⁰。

五四運動に参加した青年知識人が次の段階に進むべく模索していた時、彼らに社会的活動の方向を示したのが「少中」であり、それゆえ青年の「憧れの対象」となつたのである。それは、五四運動後の社会運

動の興隆を導き、1919 年末に、工読互助団を發起すると、青年が積極的にこれに呼応した。しかし、その失敗を経て、1920 年代に入り、「少中」内部では、社会的運動に限定している「宗旨」へ異論が提出されるようになり、動揺が発生した。「少中」内の動揺は、国民党・共産党の政治運動・革命運動が起こる大きな時代転換を反映しており、次の時代への変化の兆しを顕していたのである。

第 1 節 少年中国学会研究の成果と課題

「少中」の思想と運動をどう見るかは、これまで主に五四運動や新文化運動の評価と密接に関連して論じられた問題であった。それは、「少中」の宗旨をどう評価するかに集中して現れた。

すなわち、社会改革を主張した「少中」が根本理念とした「宗旨」は、これまで極めて低い評価を受けてきた。台湾の陳曉林氏は、「少年中国の創造」の課題は、理想主義によるユートピアであるとした¹⁶¹。一方、革命史の観点からは、「学会の綱領は、極めて曖昧であり、組織の目的が不明確であった」という否定的なものであり、そのため、「宗旨」の本格的な検討もおこなわれてこなかったのである¹⁶²。

2006 年、これまでの内外の少年中国学会研究を踏まえて、呉小龍氏は「少中」を「学術の独立」「思想の自由」の原則を主張した自由主義の団体として評価しなおし「宗旨」の本格的な検討もおこなった。「少中」の実像が「覆われてきた」と考えた呉氏は、会の中に、共産主義グループ、国家主義グループと並んで多数の学術専門家を志すグループの存在を指摘し、後者のグループの自由主義を高く評価した。呉氏の見解は、袁偉時、耿雲志両氏の新文化運動論の評価に連なる¹⁶³。

「少中」研究において心したいことは、彼らが修学途中で、未だ思想形成過程にあったことである。呉氏の研究は、青年期にある未熟な彼らの思想的探究に対し、断定的ではなく極めてソフトな接近により彼らの真実を導きだそうとしたことに特徴がある。それによって、「少中」を構成する多数の会員への異なる視点が生まれ、新しい評価がなされるに至ったと言える。

初めて、本格的な「宗旨」の検討をおこなった呉小龍氏であるが、「宗旨」のもつ社会改革論としての意義には低い評価を下していた。

「少中」に共有される広い理想の追求を、「少年中国主義」というなら、それはいえないことはない。しかし、この少年中国主義の説得力は、増大しなかった。中国の改革ビジョンは遅遅として定義できず、その完全に整った理論表現が無かった¹⁶⁴。

日本においても 1990 年代、啓蒙主義の立場に立つ少年中国学会・王光祈研究の主調は、彼らをアナーキストとみていた¹⁶⁵。これに対して、2007 年、牛嶋憂子氏は、王光祈の一生を音楽史家としてみる立場から、少年中国学会を文化学術団体と規定し、王光祈研究の有する多面性には、既成の枠に統一できない複雑な民国期の思潮を見出すことができると指摘した¹⁶⁶。

筆者は、「少中」が、発足当初から、呉氏の指摘するように「個性の解放」を求め、「個人主義」の立場に立ち「学術の独立」・「思想の自由」を主張した自由主義の団体であったとの評価に同意する。しかし、五四運動後の「少中」の基本的性格としては、社会改革を目指す青年知識人の組織であり、運動であったことを第一に指摘すべきだと考える。「少中」は、会の中で「少年中国の創造」にいかに取り組みかという課題に一貫して取り組んだ。その背後には、彼らが認識していた当時の中国の危機的状況があったのである。

また、これまで、少年中国主義は、李大釗のそれが注目され、李の思想形成の側面から論じられており、「少中」や王光祈個人のそれは省みられなかった¹⁶⁷。実は、最も少年中国主義の理論形成にこだわり、「少中」の運動を指導しその内容を整備してきたのは王であった。

王の人物像は、「根本においては、前代の士大夫気質から脱し切れていず、過渡期の人である」という郭正昭氏の評価がある¹⁶⁸。しかし、彼の中国社会認識と社会改革に向けた理論形成への努力は、民国初期の西洋学術受容期という時代の中で、常に中国独自の道にこだわりつつ探求した過程であった¹⁶⁹。王は新文化運動の中心近くにいながら、常に批判的な目を持っていた¹⁷⁰。

社会改革を探求した少年中国主義は、「少中」の活動休止により、結果としては理論的完成を見ることなく不首尾に終わってしまった。しかし、7 年 9 ヶ月の「少中」の活動期間をたどり、「少年中国の創造」をめぐるのは、彼らが直面した諸問題を分析することは、彼らの真摯な実践を発掘する意義を持つ。また、その歩みは、彼らが生きた民国期が中国近代を拓く豊かな可能性を持った時代であったことを示している。しかも、時代転換期に於ける複雑で多様な中国近代諸思潮のさまざまな萌芽をそこに見出すことができる。

以下では、「少中」の根本理念である「宗旨」と王光祈の少年中国主義をとり上げ、その社会改革論がもつ歴史的意味の解明を目指したい。

第2節 少年中国学会の根本理念の検討

1 少年中国学会の成立と王光祈

少年中国学会成立の直接の契機は、1918年の日中軍事協定反対運動に於いて、日本留学生の「一斉帰国」運動が起こり、中央大学等に在籍していた曾琦らが帰国して学生愛国会を北京に組織しようとしたことであった。

曾琦は、四川省成都の高等師範分設中学堂の同級生である王光祈と日本在住時から連絡を取っていた¹⁷¹。北京に来た曾琦に対し、王が学生愛国会に代わる青年組織の創立を提案し同級の周太玄、そしてやはり四川省出身で日本留学生の陳愚生、張夢九、雷宝菁の合せて6人が、元日本留学生出身で北京大学の図書館主任の李大釗¹⁷²を誘い7人の発起人で出発し、会の名称や規約70条を定めた¹⁷³、一年後に正式に成立させることを決定し、その準備活動の責任者となったのが王光祈である。

王は、当時北京の私立中国大学を卒業し、清史館に勤務し、成都の『群報』の北京通信員をしていた。陳独秀、李大釗が、1919年12月末に創刊した時事週刊誌『每週評論』の編集人にも連なり、すでに若手言論人の中に名をつらねていた。

「少中」の正式成立に向けて準備活動が進んだ1918年から1919年前半にかけての時期は、序章で触れたように国内外とも、第一次世界大戦終結を受け激動の時期であった。その影響を受けた青年たちは、北京大学を中心に学生が参加した新文化運動を展開した。更に5月、山東問題をめぐる学生の五四運動が勃発しやがて上海の市民の参加した六三運動となり全国に波及した。

「少中」は、1919年春、連続講演会を開催し、中国古典文化の大家章炳麟と新文化運動の指導者陳独秀、胡適を講師に迎えた。章炳麟は、青年の陥りがちな安易な理想追求を戒め、過去の人物・文化へ依存しないよう忠告した。胡適は、「少年中国の精神」と題して、科学的方法を身につけた「批評精神、冒険進取の精神、社会協調の精神」による人生観の形成を唱え、新しい少年中国の精神により、中国を再生しようと激励した。陳独秀は、「我々は如何にすべきか」と題し、時代の転換期にあたり価値観の煩悶に陥っていた当時の青年に同情を表しつつ、楽観主義や悲観主義を排して、「愛世努力の改造主義」の人生観を提唱した。彼ら先達は「少中」を強く応援したのである¹⁷⁴。

新文化運動期の個性解放思想の影響を受けながらも、発起人である曾琦や王は元来、宋明理学を学問的基礎にもち、さらに、梁啓超が紹介した前世紀ヨーロッパの青年イタリア党の民族主義的政治運動にも影響を受けていた¹⁷⁵。また、王が民族主義的意識に基づき社会改革の必要性を自覚し始めるのも、政治活動から社会活動に転換することを表明した梁啓超の影響を受けたためであった。彼は自分が社会改革に目覚めた経過を次のように語っている。

私は、民国3年に四川から北京へ来た時、国家が弱体なのは、すべて外力が圧迫するからであると常に考えていた。それ故、外交の研究を志し「青年イタリア党」のカヴァールを自負し、数年変わらなかった。民国6・7年の境ごろ、外力が圧迫するのは内政の腐敗によるもので、内政の腐敗は社会が麻痺しているためであり、それ故に中国を改造するには、まず社会から取りかからなければだめだと突然気づいた¹⁷⁶。

王が1917・8年を境に「社会」の存在を発見するに至るには、辛亥革命後の政治状況や当時の新語である「社会」という語の流行も影響していた¹⁷⁷。さらに、政治活動の度重なる失敗で打撃を受けた梁啓超は、1915年「政治の基礎は社会にあり」「今後は社会事業に取り組む」と表明した¹⁷⁸。王が、この頃の梁啓超の言動に注目していたことは、1922年に、政治運動に反対し社会運動を主張した折、梁啓超を「社会的政治改革」の例に採り上げていることから知られる¹⁷⁹。

『新潮』社の傅斯年は、中国の現実に関する洞察を深めて、雑誌『新潮』で「中国には社会がない」と主張していた¹⁸⁰が、当時、北京で活動して、傅と深い交流を持った王もその認識を共有していた。傅斯年ら新潮社の伝統社会批判が王に影響を与えていたと考える。王が常に政治勢力の腐敗や社会の現状を批判し、社会改革による中国の創造を目指したこととの思想的関係に注意したい。

発起から正式成立までの「少中」の準備活動を一手に任された王光祈の努力の結果、『新潮』『国民』

の主要な活動家たちが「少中」へ入会した。これは、第1部第2章で触れたように王とともに、彼らに当時影響力のあった李大釗の力が大きかったと考える。

一方、曾琦、張夢九は上海で学生救国会の『救国日報』を発行し、四川の同郷人や曾琦の上海震旦学校時代の友人たちを誘った。李劫人(1891~1962)は成都分会、左舜生(1893~1969)¹⁸¹は南京分会を組織し、海外では、田漢(1898~1968)が東京分会を組織した。後に1920年3月、パリ分会も成立した¹⁸²。

当時、全国各地の有為の青年が、五四運動を通じてネットワークを形成し始めていた。これら各地の青年グループの指導者に対して「少中」への参加を意識的に働きかけたのは王であった¹⁸³。彼らの中から、王のドイツ留学後、「少中」の運動を担った鄧仲澥、蘇仲蘇(演存)、惲代英、陳啓天ら多数の新人が出た¹⁸⁴。「少中」の社会改革を目指す活動は、このような青年たちに担われたのである。

2 少年中国学会発起時の根本理念¹⁸⁵

「少年中国学会」という会の名称は、王が提案した。これに対して曾琦が「復興社」の名称を主張したが、「少年中国学会」の名の方が比較的その意味が明瞭であるということで皆の賛成を得て決定したという。

その発起時に作成した規約原案は、王が提案し、発起人の中での長時間の論争の後、最後に李大釗の参加を要請し、彼と全面的な検討を行って正式な成立をみた。「少中」の根本理念は、規約第2条の「宗旨」に明記された。

この1918年に決定した旧「宗旨」には、活動内容が具体的に表示されていた。「①少年精神を奮い起こす、②真実の学術の研究、③社会事業を發展させる、④末世の風気を変える」であり、次の第3条の「奮闘、実践、堅忍、儉朴」の4項目の信条は、会員の遵守すべき倫理道德であった。会員は、社会の道德的模範となるべきとして、人格の修養を重視し、人格的に優れた会員を勧誘した¹⁸⁶。

準備期の主任である王は「宗旨」の4項目を次のように説明している¹⁸⁷。まず、「少年精神を奮い立たせる」は、中国社会の改革を担当するのが、独立した精神を有する青年で、彼らを啓蒙し励ますことを意味した。

次に「真実の学術を研究する」は、会員は、すべての事柄を学理に基づき考え処理することで、これが会員の行動の基準であるとした。規約には、会員に「文科、理科、工科、農科、医科、商科、政治科、法律科、経済科」のうちいずれかの科目を選んで研究することを義務づけた。この科会の名称から伺えるように、伝統的学問からはすでに脱皮し、西洋近代の科学技術を学ぶことを目的とした。王、李大釗は経済、曾琦は政治学の専科に属していた¹⁸⁸。

第3に「社会事業を發展させる」は、「文化教育事業」をさし、月刊誌の発刊、通信社の組織、少年中国叢書の発行が実行に移された。曾琦の『中国之青年與共和之前途』は、『国体與青年』の書名で少年中国叢書として出版された。学術研究の成果を社会事業に生かすということを柱にした「少中」は、当初から学術研究の性格の強い組織であった。

第4の「末世の風気を変える」は、4項目の信条と第14条の禁止項目を奉じ身体力行、切磋琢磨して、「汚濁」の風俗を変え、社会の善良な風気を養うことであった。

第14条の会員に課した禁止項目では、女郎買い、賭け事などの不道德行為や政党への接近により本会の名誉を妨害した場合、評議会が警告書を提出し会員の反省を求めること、第15条では学会に入会後、その他の政党に加入した場合、評議会が調査し、除名することを定めていた¹⁸⁹。

準備期間中であった1919年1月、上海の会員は、王を北京から招き、「少中」の今後の活動方針を討議した。主要な議題は、発起以来の課題であった「主義の確定」をどうするかであった。会議では、「宗旨」に関する王の上記の説明に対して、会員全員の理解と賛成をかちとった。

その結果、「宗旨」に表現された根本理念の理解において、会員は完全に一致していることが確認された。「根本がすでに完全に同じであるからには、いわゆる主義は末節に過ぎない」と結論した¹⁹⁰。加えて、李璜が¹⁹¹「以前の改革は上からの改革だが、我々の改革は下から大多数の人々の幸福を求めて行う」という平民主義を提案し、採択された。

「少中」の7人の発起人の間でも、「国家主義」「社会主義」「アナーキズム」など「主義」は全く一致できなかった。それゆえ、この時、宗旨と主義の関係が確認された意義は極めて大きい。即ち、会員各自が自由に自分の主義を持つが、「少中」の宗旨は、その上に立つ原理であるとされた。「宗旨」は「少中」の根本理念となった。この結果、多様な思想を持つ構成員を包摂できる組織へと脱皮し、会の発展を保証することになった。

3 1919年の宗旨（新宗旨）の新たな展開¹⁹²

1919年7月の成立大会に先立って、王光祈は、会務報告を3月から毎月定期的に発行しており、5月1日の「会務報告」第3号は、遠方の会員のために成立大会に向けた1年間の準備活動の報告や規約について説明を行っている。

五四運動直後の成立大会で、規約第2条の「宗旨」が改正されたが、すでに、大会へ向けて相当の準備がなされていたことがわかる。これが、「少中」の「宗旨」として、一般に知られているものである。旧宗旨は、具体的な活動内容を明記していたが、新宗旨は簡潔に理念を表現したものである。

王の報告によると、成立大会は、7月1日陳愚生宅で開かれた¹⁹³。当時の会員は42名になっていたが、会員の多くは五四運動に参加し、全国に運動拡大のため出かけていたので、定数に足りず、当日の参加者の氏名も人数も公表されなかった。このとき、改正された「新宗旨」を提案した6人は、王、曾琦、李大釗、陳愚生の発起人4人に加え、新会員の康白情(1896~1959)と雷宝華であった。北京大学学生の康白情は、当時の事情について「慌しい中で、「宗旨」の改正を提案した」と述懐している¹⁹⁴。

このことから推測すると、6人が協議しての改正であったが、成立大会では、改正の内容の説明や討論はなかったと見ることができる。会員へは「旧宗旨と内容は同じで、ただ表現を簡潔にした」と説明している。内容は変わっていないと王はいうが、その間には後に「少中」の進路をめぐる論争を引き起こす重要な変更が行われていた。すなわち、学術団体から社会運動の団体へと大きく変質していたのである。

呉氏は宗旨の変化の過程を、「彼らが、伝統的士大夫から現代知識人への役割転換の過程にあった」と見る¹⁹⁵。五四運動、新文化運動の展開、新メンバーの加入という「少中」をめぐる大きな変化は、新しい時代の反映であり、思想の新しい要素が盛られたと解説している。呉氏の「両者の違いを自覚しないほどの会員自身の精神的高揚があり、彼ら自身の社会転換があった」という指摘は、耿雲志氏のいう文化価値の転換過程が、そこで進行したということである。

しかし、五四運動をめぐる各地の運動の温度差、学生運動に対する見解の違いから、当然ながら、このときの宗旨変更に対する意識は、「少中」成員に同じようにもたらされたわけではないと筆者は考えている¹⁹⁶。根本思想である「宗旨」に対し、新旧会員間で一致した理解が難しくなっていたであろう。

そこで、この点をより深く考えるために、「近代の科学的精神」「社会的活動」「少年中国の創造」という「新宗旨」の新しい内容を、以下に掘り下げたい。

① 近代の科学的精神

新宗旨は、旧宗旨の「学術」という表現から転じて、西洋の「近代科学の精神」を明示している。西洋科学の成果とその新しい科学的方法論を取り入れる活動を提唱し、調査研究を重視した。入会した会員の多くは、新しい学問を求めて続々と欧米諸国に向かった。留学先の各地から、その地で獲得した新知識を通信や原稿にして送ってきた。留学先の国の違いにより、会員の思想的傾向は異なっていた。

② 社会的活動

「社会事業」から「社会的活動」に転じたことは、会員自身の修養や学術・教育活動を主要な会務とした段階から、社会改革の実践的活動が前面に出ることになった。王は、異なる主義を持つ会員の間においてさえ、中国における社会活動の必要性に対しては共同の認識が存在するとして、次のように述べている。

我々会員には共同の傾向がある。それは、もし中国人の思想・行為が現在のままであるなら、いかなる主義の下でも必ず成功しないと皆が承認していることである。現在の中国人が各種の主義[[制度]原文、王の注、以下同じ]を応用する能力を持つためには、必ず、まず中国人の思想習慣をひとしきり徹底的に改革しなければ駄目である。準備段階を経過しなければならない。少年中国学界の目的は、すなわちこの準備段階の仕事に従事し努力することである¹⁹⁷。

王は、一般に中国人の文明水準に対する見方として、二つ挙げる。一つは、賢人政府を唱える当時の有力な見方で、中国国民の進化の水準を非常に軽視して永遠に進歩する望みがない、永遠に官僚・軍閥・政客の支配を受けるべきであると考えた見方である。もう一つは、中国国民の進化の水準を高く評価する見方で、どのような主義(制度)であろうと、中国人は自在に運用できるという見方である。

王はこの2種を共に退ける。王は、中国人が未だ「人」となるべき性格と習慣を全く持っていないが、彼らを「予備功夫〔準備段階での仕事：著者注〕」によって「人」にすることができると考えた。「予備功

夫」とは、梁啓超が提起した考えで、梁の「新民創生」につながるものであり、具体的には、団体生活と労働の訓練によって中国人を一人前の「人」とすることを意味した。

彼は、北京や省都に住んで官吏の職を求めている多数の高等遊民を極めて嫌悪するとともに、多くの失業者、浮浪者の存在に注視した。旧社会を出自とする彼らに、準備段階において、「人とする訓練」を行なうのが「少中」の教育運動や実業分野の社会活動であり、団体生活や労働の訓練をして社会生活に適応させることができるとした。王は、国家の組織を一種の団体生活であると見ており、団体生活、労働は、いかなる主義 [[制度]原文] の下でもみな非常に必要で、中国ではとりわけ必要であると考えた。

王の観念の中での社会的活動は、教育と実業の二つに従事することであり、実業の中では農業を重視した。それは、ある一定の時間を必要とし、ある主義 [制度：原文] に移行するための準備活動(「予備功夫」)であり、政治活動ではなかった。王光祈は、政治を否定するのではないが、当時の中国における政治に対し断固拒否したのである。会員の大部分が当時、教育活動を志望しており、社会的活動の範囲は教育宣伝活動に特定されているとみていた¹⁹⁸。

新文化運動期、傅斯年是宗族社会と軍国社会の半ばの段階にあるという厳復の中国社会に対する極めて厳しい見方から影響を受け、中国社会はいまだ「社会」ではないと主張した。王光祈たちの「少中」会員もこの時点でその主張に共感しながらも、教育と実業によって変えることができると考えたのである。

しかるに「少中」には、政治運動である五四運動に参加し、きわめて政治的関心の強い会員が多数参加してきた。彼らにとっては社会的活動とは、政治的活動を含んでいたのである。彼らにとって会員を縛る「政治活動をしない」という規定は、本来ありうるはずがなかった。

にもかかわらず、「少中」規約では自らを社会活動団体として定義しており、第15条には、「本会入会后、その他の政党に加入して、本学会の名誉を妨害した場合、除名を宣告する」という規定があった。このことは、「社会的実践活動」を目指す政治的意識の強い会員と王との間で、根本理念の対立をひきおこすことになる。一方で「学会」の名称を掲げている結果、会内には、学術の専門家を志向する会員が、多数を占めていった。彼らは、政治活動を否定した。

「学術団体」「社会的活動」を両翼にした「少中」のジレンマが以後、会員を悩ますこととなった。学理にもとづき社会事業をするという発起時に一体としてとらえていた方針が動揺してくる。社会的活動は、政治活動を否定するものか、あるいは、容認するものか、「少中」は、主として学術団体なのか、それとも社会活動を行う事業団体なのか、この2つの疑問が起こってくるのは、背景となる時代の変化によって「宗旨」のもつ矛盾が明らかになってきたからであった。

さらに加えて、成立大会直後、王が「社会的活動を行い、政治活動はしない」という取り決めを「不成文憲法」としたことが問題とされた。成立大会直前の5月、上海会員と北京会員との間で交わされた「会に影響を招来するような尖鋭な個人的な政治的発言は避ける」という、「少中」が組織として生き残るために提出された戦術手段を、王は「少中」の不文律として強調し、これを根本理念に繰り入れ、「少中」の社会活動の範囲を限定する根拠とした。これが、王の専断と指弾されるゆえんである¹⁹⁹。

③ 少年中国の創造

新宗旨は、中国の社会を改革して二十世紀の新時代にふさわしい新国家「少年中国」を建設するという最終目的を掲げた。これは、旧宗旨の学術と社会事業を行うことを目的とする社会改革団体に止まらず、「新国家建設」という壮大な目標を掲げることを意味したといえるが、もちろんこれは最終目的である。新しく創造する「少年中国」は、進歩的で非保守的であり、創造的であって非因習的であり、国際社会では若い国家であって老国家であってはならないと考えた²⁰⁰。

新宗旨によって、王らの観念の中には、「新国家建設」の目標が、活動の前方に位置づけられたということができる。政治活動でなく社会活動によって実現しようと考えた国家とはいかなるものであろうか。

民主主義に対する彼らの認識から当時の彼らの国家意識を探ると、新旧宗旨には、新文化運動がスローガンとした「民主と科学」の「民主」の語句がないことに気づく。『少年中国』誌上でも、民主への言及は極めて少ない。このことは、当時の民主の観念が、青年にどれほど影響を与えていたかを疑わせる事例である。

民主の観念を考える時、政治的原理と会員間の関係を規定する組織原理との二つから考えることができる。成立当時、政治的原理は主義問題とみなされた。会員はそれぞれ奉じる主義が異なり、民主主義だけでなく、国家主義、社会主義、アナーキズムはすべて、王らの観念では、国家制度を意味していた²⁰¹。その意味において、政治的原理としての民主主義は、欧米の民主主義国家の制度であると見なされていた。

さらに、辛亥革命以来の民国の政治混乱は、民主主義を導入したことの結果であると考えていた。王は

「米国式の政治的民本主義は、結局大多数の幸福とは関係がない」と考えており、王たち発起人たちは、政治的民主主義を、欧米の政治原理とみなして否定した。彼らが「主義」を論じていた時、それは採用すべき新たな国家制度を模索していたのである²⁰²。

一方で、王、曾琦の二人は、組織内の会員関係では民主的原理をかなり意識していた²⁰³。曾は、「以前の団体は多く首領を重んじ、団員を軽んじた。我々の団体はみな一律平等でいわゆる首領人物がない²⁰⁴」と言い、王は「少中」の組織が「完全にデモクラシーの精神である」と誇っていた²⁰⁵。さらに曾は、「我々の団体は女子も会員になることができ、男女の区別はつけない」と言い、女子の入会にも積極的だった²⁰⁶。しかし、これは結局実現しなかった。

自分の思想を固く主張する自由な個人が集合した個人主義の組織で、会の内部では会員は意見を自由に論じ合う、その気風が賞賛されていた。しかし、このような個人主義の集団が、一体になって協力しあい、社会事業即ち「少年中国」の創造を担う力量を持つことができるであろうか。

王は、1921年の南京大会への「干渉と放任」論争へ紙上参加して、会員は、「宗旨」で結合しており、「宗旨」即ち根本理念のみが会員を規定すると確認していた。この解釈は、きわめて「民主的で近代的な原理」であるといえなくはない。

しかし、根本理念だけでは、会員個人を結合する原理とはいえない。個人を単位とした民主的關係が制度的に確立され、共同可能な理論に拠る政策が提起されなくてはならない。「少中」会員間の關係の親密さが、後に会員によって熱く回想されているが、それは「師友と学友」の關係を血縁に擬す中国の傳統とも関連していたと考えられるのである。

会員の民主主義的關係が制度的に保証されず曖昧である中では、統一した「主義」の採用は多数の会員が言うように、「他人の思想を自分のそれとすることはできない」のである。組織原理は、「少中」がいかなる主義を採るべきかという主義論争とも重なっていた。

佐藤慎一は、「デモクラシーとサイエンス」を旗印として掲げた新文化運動時の「デモクラシー」の意味内容が辛亥革命以前のそれと大きなずれが生じていたことを指摘して、「民主制」が政治体制に関わる概念であったとすれば、「デモクラシー」は個々人の生き方に関わる概念であった²⁰⁷。」と考えている。

佐藤が指摘するように、「非」政治的な領域における個々人の意識や行動の変革を通して、「民主的社会」の樹立を目指すという立場も、政治闘争の強調と同様に、中国の民主化にとって意味があるものであるならば、「少中」の社会運動の歴史的意義はこれまで以上に高く評価される必要がある、と筆者は考えている。政治革命だけではなく、日常生活の中での民主主義的意識の浸透について、更に着目する必要がある。新文化運動時の「デモクラシー」がこのように理解され、個人と個人、団体の組織運営上の民主的原理が問題にされてくる可能性が存在したことを筆者は強調したい。

「少中」の前半(1921年南京大会時まで)は、民主に対する言及が極めて少なかったが、南京大会時に、康白情が規約改正の提案を行ない、宗旨に「民治」を入れることを提案した。しかし、康白情の提案意図は、参加者の理解が得られず継続審議という結果となった²⁰⁸。「民治」の解釈に対する相異なる立場からの反対議論が起こったからである。この問題を巡って反対の立場を主張し「少中」を退会したのが、当時、共産党の建党に携わっていた張申府²⁰⁹である。彼は「少年中国創造」の理念を共有しならも、自分は「労働者の政治」は理解できるが、「民治」は「資本家の政治」であり、全く理解できないと批判した²¹⁰。この大会以後、「デモクラシー」解釈は、階級的立場による相異なる解釈がなされる政治的内容へ転換していった。

第3節 王光祈の少年中国主義

1 王光祈の少年中国主義の特徴

1921年の南京大会に参加した劉衡如は、会員1人1人が「少年中国」創造に対して描く観念が異なっていることに驚いた²¹¹。「宗旨」制定時の執行部主任であった王は、「宗旨」の根本理念は、会員の「一致した認識」であるとしつつ、「少年中国」実現を掲げる運動の精神と理論を「少年中国主義」と名づけた。

王は、自分の考えを、彼独自のものと限定しているが、それは、「少中」会員に指導的な影響を与え、後の王の理論の基本的枠組みとなった²¹²。その内容は、以下の4点にまとめることができる。

① 国家主義の否定

王は「少年中国」の中国は、地域の名称であり、自分たちが住み、自分たちが責任をもつ地域であると考えた。彼は国家主義に反対し、世界主義を主張した。国家主義が中国の政治の混乱の元凶であり、ヨー

ロッパの世界大戦を引き起こしたと見た。

② 「予備功夫」(準備訓練段階)の提唱²¹³

彼は、北京や省都に住んで官吏の職を求めている多数の高等遊民を極めて嫌悪するとともに、多くの失業者、浮浪者の存在に注視した。旧社会を出自とする彼らに、準備段階において、「人とする訓練」を行なうのが「少中」の教育運動や実業分野の社会活動であり、団体生活や労働の訓練をして社会生活に適応させることができるとした。王は、国家の組織を一種の団体生活であると見ており、団体生活、労働は、いかなる主義(制度)の下でもみな非常に必要で、中国ではとりわけ必要であると考えた。

梁啓超が使ったこの「予備功夫」の言葉について、王以外にも「少中」会員はしばしば言及し、「少中」の活動上重要な意味を持つ概念となった²¹⁴。その意味は一定の準備期間の課程で行う社会的活動を意味していた。

島田度次によると「功夫」の言葉には、独特の思想的意味が付随するといい、王陽明の『伝習録』を解説した中で説明を加えている。島田は「功夫」という言葉を完全に日本語の単語に写すことは、不可能であると考えている²¹⁵。

王は「予備功夫」には破壊と建設の2種があり、将来の新社会が実現する時、「予備功夫」が完成していれば、一般人は新社会の習慣をすでに身に着けているので、新社会の運用はうまくいくとし、平和的漸進改革を提唱した。

③ 「工読社会」

世界には知識階級・労働階級・資産階級の3つの階級があるとし、3階級の中から覚悟のある人を選び、階級間を接近させて、理想社会を実現する。彼が期待したのは、学生・海外出稼ぎ労働者(華工)と華僑であった。「工読社会」の理想は、「働きつつ学ぶ」という生活と工読互助団や新村運動に表現された。王は将来の新村の大連合が、少年中国であると考えた。

④ 農業的社會主義の建設

社会的活動とは、いわゆる社会運動で、社会教育と実業から着手し、持続的な努力によって改革を実現する運動である。王光祈は、実業では、農業を特に重視し、現在の世界では工商国の羽振りがいいが、最後の勝利は、農業国にある。「農村改造」により、「農業に基礎を置く社会主義」を完成しようと考えている²¹⁶。

2 社会改革論の形成に向けた王光祈の試み

1919年の王は、社会改革と徹底的個人主義を主張し、ロシア労農政府の強権政治に反対していた²¹⁷。工読主義を理想とし、工読互助団を提唱した。工読互助団は、北京だけでなく、各地の「少中」会員が取り組んだ²¹⁸。

「社会改革」を主張し、その方法として、工読互助団を提唱し、多くの賛同者を得たが、彼自身はその実践の結果には責任を取らなかった。1920年4月、工読互助団の失敗が伝えられていた時期、彼はヨーロッパ留学に向かう船上にあり、中国社会とはどのようなものかを自問していた。船中から、1920年4月23日付けの会員宛に出した手紙で、彼は次のように書いている。

私は日々社会改造、家庭改造、個人生活の改造を提唱し、社会事業に従事しているが、しかし、各地の社会の組織はどのようなものであるか。家庭の状況はどうか。個人生活はどこから改めるべきか。社会事業は何から取り組むべきか。もし詳しい確実な調査がなければ、軽々しく改造を言っても人を欺くことになるであろう。現在各種の主義、学説はみな我々の改革の参考にはなっても、実際の改革をしようとするれば各地の実際の状況を熟知しなければだめである。もし社会の実際の状況、即ち、何が必要か、何が必要でないか、何が必要であるがまだ猶予できるものであるかを知らずに、その主張を軽率に実行しようとするならば、その成功を望むことはできないであろう²¹⁹。

こうした反省を行うとともに、会員へ国内や世界を調査する旅行団を提案している。1920年1月より発行した「少中」の第2の機関誌である『少年世界』は社会調査の雑誌であった。当時、胡適は「社会問題の研究法」²²⁰を書き、青年に社会問題の研究者や社会改良の実践家となるよう期待していた。

彼は、パリで、旧友の周太玄から「英雄名士思想の害毒にあたっている」という厳しい指摘を受け、自身の思想に対する深い自省を加えた²²¹。惲代英への手紙でも「自分はヨーロッパへ来てから思想が一変した」といっているが、それは、自身の中にある士大夫特有の強烈なエリート意識に気付くとともに、英雄

観念に立った皮相な思想や事業を、観念の誤りとしたのである。

1920年5月、彼がマルセイユに到着し、そこで最初に見たものは、フランス交通労働者の強力なゼネストであり、そこでは「強力な労働者は強力な政府と対峙していた」。西欧諸国に見たものは、強力な労働運動だけではなく、文化的にも豊かな市民が作る堅固な市民社会であった。ヨーロッパの近代社会が第一次世界大戦を経ても、たちまちに復活を遂げる力強さに驚嘆して、次のような通信を『少年中国』に送った。

民国9年、ドイツに留学し彼の国の政治経済を見てみると、一つとして社会の上に建設されていないものはない。欧州各国の政治経済の勃興は、一二百年の間のことにしか過ぎないが、その各種の文化設備や社会組織は、その土台が一つとして三四百年以前より植えつけられていないものはない。故にたびたびの戦争があっても、数年にして立ち上がり元気を回復するのである。彼らの社会組織は、これ程までに堅固であり、人民の能力はやはりこのように豊かである……それゆえに、「中国を改造するには社会から着手する」という私の思想を証明する実例をさらに得たのである²²²。

ヨーロッパの市民社会に中国の将来の社会建設の目標を見、中国の改革における社会活動の果たす重要な意義が彼の確信になった。新聞社の特派員としての仕事をする中で、ヨーロッパ社会に対する理解はさらに深まり、ヨーロッパの社会構造に関しても認識を深めていった。

3 「中国社会」についての王光祈の試論

王の思想の根底には、『大学』の「修身齊家治國平天下」と伝統的な民本主義の思想があった。彼は自分の考え方について「私は元々深くいわゆる「修身齊家治國平天下」の改革順序を信じていて、古今中外ともに、みなかくのごとくならざるものは無いと考えている²²³」と、彼の思考の根底にある儒学の存在に触れている。

伝統儒学では、支配者として人格的修養を完成した士と被治者としての民が存在するだけである。そして、「修身」から「平天下」まで、個人—家—国家—天下という縦の関係が強調され、そこには独立した個人と個人の横の関係という社会はない。「人民が第一」という考えも、民本主義に立つ治者の立場から行う善政であった。

これらの理念を根底に持ちつつも、新文化運動期の新思想の影響を受けて、「社会」(Society)の存在を「発見」した。彼が中国の現実の中で自らの生きる道を求めて奮闘していた時期、新語「社会」という言葉に敏感に反応した。それが、彼の社会改革事業の出発点であった。

王の理解した「社会」は、前代からの「腐敗した社会」であり、近代産業社会を生み出した力のある市民社会のように「国家と対抗」する新勢力ではなかった。むしろ「万惡の原」である現実の腐敗した前近代社会を近代化する必要性が意識化されたのである。王光祈たちは民国の現状をどのように見ていたのか。

王は「ただ消費するだけで、生産しない中国人は、多分中国人口の半ばを越える」、「労働者の生産の一部分を資本家が略奪しているが、それを除くと、その余りの大部分は、非資本家の無業遊民に奪われている」という²²⁴。王と認識を共にしていた張夢九は、中国の弱体の真因について次のように論じている。

現在中国の全国の人口は4億と称する、しかしその実を考えると4億人の中には、数千年囚われて、やっと解放の兆しのある女性が約半分を占め、これを除くと2億人が残り、子供・精神喪失者や廃疾者が約4分の1を占め、これを除くと1億5千万、その中には約十分のいくつかは、なれの果ての政客、困窮した官僚、落ちぶれた文人、浮浪者となった元皇族、失業した労働者、倒産した商人、退役した軍人、こうした人とは異なる無頼漢(ごろつき)もいる、これらを除くと、数千万人が残るだけである。一国の中に職業のないものが多数を占めている。このような国や民族が外国人の領土、外国人の奴隷にならないなどと言うことがあろうか²²⁵。

結局、王は張夢九の言うように中国の弱体の原因を国内の社会経済的崩壊状態から考えたが、そこから脱出可能な理論を本格的に選び出すことができなかった。「互助論」の影響を受けた王は、1920年9月、ヨーロッパ社会と中国を比較し「分業と互助」を書いた²²⁶。

彼は、近代の資本主義経済においては、分業の発展により生産力の拡大が可能になったと見た。この分業は、産業面だけでなく、学術、社会運動などあらゆる面で適応できると考え、ヨーロッパ社会を分業で成立している社会と考えて、分業による中国社会の発展を展望した。さらに、分業と並立し、それとセツ

トとなるのが互助であると言ひ、ヨーロッパと中国での互助の意味の違いを論じる。

互助の二字は元々生物学上の名詞であったけれど、中国では現在すでに、一般人の常用語〔原文：口頭禪〕に普及している。しかし、私の友人傅斯年君の言う「中国は無社会の国家である」という言によるならば、無社会の国家である中国では、当然互助の2字は問題にならないはずである²²⁷。

それでは、ヨーロッパ人の社会、個人、互助とはどのようなものであろうか。西洋社会は個人の間の競争による冷酷無情な社会であり、彼らは、個人の利己主義により関係を結んでおり、利益のあるところ、父母兄弟といえども省みることがない。ヨーロッパ人の互助とは知識から出発しているという。

彼らは、個人が社会から離れて独立した存在ではなく、もし互助がなければより大きな利益を得ることはできないことを知っている。彼らの互助は、利己心の範囲を拡大したもので個人がより大きな幸福を謀るものである。彼らは互助を手段とし、利己目的にしている。故に外国の社会は、表面上は非常に団結し堅固であるが、内部では、個人と個人の間は即ち冷酷無情である。かくのごとく利己的な国民をもってなおよく団体を愛護するゆえんは、それは、互助がなければ自らの最大の欲望を達するのに足りないことを、彼らが知識として知っているからである²²⁸。

それ故、王は、中国人が今後形成すべき社会は、外国人の互助を模範とするべきではない。我々が必要な互助は、その基礎が道徳に立つものでなければならないと言う。彼によると、互助とは本来人類が行うべきことで、我々の「愛の本能」の衝動であり、それによって「本当の情け深い社会」を実現するのだと論じる。

確かに王は、西洋の市民社会が個人の利己主義により関係を結んでいることを見抜いている。彼は、こうした西洋社会のような「個人が利益を介して形成する社会」を中国人は持たないので、中国では逆に、修養による道徳を積んだ「人」が、互いに助け合う社会を造るべきであると考えた。しかし、王らは、かつて、中国においては既に「道徳の廢れた末世の時代」と見たのではなからうか。

王にとってヨーロッパ社会は、すでに模範とならなくなった。「道徳による修養で個人の自立を確立する」ことが、ヨーロッパと異なる中国の社会改革を実現する道であると考え、「終身志業調査表」²²⁹に、帰国後の事業として「新村及び工読互助団の建設」と回答し、1921年3月の惲代英への手紙では、民族主義への関心を吐露している²³⁰。

おわりに——王光祈の中国社会改革論の行方——

王光祈の社会改革理論は、今日から見ると初歩的で空想的に見える。彼は社会から政治を変えようとし、国家主義を否定し、近代国家の政治的課題に言及しようとしなかった。最初から欧米の近代国家のイメージを描くことを否定していた。また、王汎森氏によると、王は、自らは学者でありながら「労働階級の成員になることを望んだ」といい、「働きつつ学ぶ」という彼の工読主義が当時の知識階級の歴史的立場を象徴しているという²³¹。

彼が抱いていた人間観は、中国人が軽視されていた当時、「予備功夫」で「人」に改造できるという可能性を持った見方であった。さらに、中国社会の調査研究を呼びかけ、留学中の会員が新しい社会思想をもたらし、新しい中国改革理論を生み出すことを期待し励ました。自らも、分業と道徳を基礎に充実した力をもつ農業社会を構想した。しかし、それを実現するには「少中」の青年知識人は、あまりにも社会的な勢力が小さかった。

惲代英の提案を受けて1921年7月1日より4日間南京で開かれた第1回の全国大会は、少年中国運動の転換のきっかけとなった²³²。この大会には、国内会員23人が参加した。これは、「少中」という運動団体が、直面した諸問題を全国大会の場で討論する段階までに到達したことを示すが、この大会が、逆に、「少中」の根本理念の動揺を生み、内部分裂へ向かわせたのである。

鄧仲澥(中夏)ら北京總會の一部会員は「宗旨は広範な内容で曖昧であり、統一した「主義」を採用すべきである」という提案を行い、討論は白熱して「少中」はあわや分裂かという対立状況を生んだという²³³。南京大会では、統一した主義は採用されなかったが、「政治活動の自由」の提案が多数で承認された。社会運動団体という「少中」の根本方針は揺らぎ始めた。南京大会は、少年中国主義に代わる新たな活動方針——それは1923年10月の蘇州会議で採用される「民族主義運動」——の出現の始まりであった。

王は、南京大会に出席できなかったが、政治活動反対の急先鋒であり、大会の「政治活動の自由化」の結論は、少数で決定した決議であり承認できないとして、ドイツから社会運動の意義を發議し続けた。しかしながら、王はドイツにあって1921年3月すでに、民族主義に傾斜し始めていた。それゆえ王もまた国内の会員が、1923年の蘇州大会で決定した民族主義運動への転換を支持し、少年中国運動を中華民族復興運動であると再定義することに同意した²³⁴。つまり国内の政治的变化に伴う会員の動向を受け入れることができたのは、彼の民族主義への転換と方向が一致していたからである。

しかし、民族主義実現の方法は違う。新村建設や工読互助団の構想を提示し続ける彼に対して、すでに共産主義を奉じている憚代英は、それはすでに失敗しており、提出すること自体、時勢に合わぬ笑止なことだとした²³⁵。

1925年7月の南京大会では、国家主義者と共産主義者の対立を打開するため、改組委員会が組織された。対応策を一任された同委員会は、会内の統一を主張する王に、帰国して「少中」再建に尽力して欲しいと要請した²³⁶。

これに対し、王は、1925年8月の会員への手紙で、「少中」の運動の目的は「真実の学術と社会事業の両種を用い、中国社会の基礎を造成し、しかる後に社会の実力にもとづき政治問題を解決する」ことにあり、その立場を訴え、自らの「会事の進行に対する意見書」を提出し会員に問うた²³⁷。

10月には「少年中国学会改組委員会調査表²³⁸」に「自分は民族主義²³⁹を採り、国家主義も共産主義も信じないが、最近の中国では、国家主義も共産主義も採るべき点がある。ただ行き過ぎなければ、自分はどちらにも賛成である」と、回答した。

今日の日本ではNationalismの訳語として、民族主義だけでなく、国民主義や国家主義の用語をあてることもあるが、ここで王光祈が論じている国家主義は、具体的には少年中国学会のメンバーの一部が組織した青年党に連なる思想潮流を示しているものと思われる²⁴⁰。

辛亥革命時期、盛行した国家主義は、新文化運動では、否定された。曾琦らが再び、国家主義を掲げたことは、新文化運動期の反国家主義の立場を一貫して貫いてきていた王光祈にとって受け入れがたいことであった。彼のこの思想的立場と共産主義との違いは説明するまでもないが、王光祈が曾琦らの青年党と異なり、国家主義を信じないとする主張は、彼が堅持してきた立脚点から考えるとこれも当然の結論であったとすることができる。中国の改造に社会運動の手段を主張した王は、政治活動の手段を採用することを拒絶したからである。

その一方で、王が民族主義の立場から「少中」内の国家主義者・共産主義者とも共同しようと考えたことは重要な見識である。主義の違いを超えた協力共同は、「少中」の根本理念であり、彼の一貫した立場であった。しかし、彼の提案は国内の会員に受け止められず、結局王は帰国要請を受け入れなかった。母国で「少中」の仲間と、中国の社会改革に参加するという彼の本来の希望を断ち切ったのである。

本稿を終えるにあたり、「少中」と王の歩みを振り返り、筆者は次の諸点をその歴史的な役割として指摘しておきたい。まず、彼らが社会改革運動を進める上で直面したことは、古い政治勢力と決別することであった。古い政治勢力とは、辛亥革命以来の政党²⁴¹であり、また、彼らが無頼漢、ゴロツキと批判する政治家であった。そのために、自らに課したのが、政治活動の禁止であった。彼らが独立した運動を行うには、断固として旧勢力と関わらないことが必要であった。

古い勢力と関係を絶つには、経済的自立により「少中」の独立を確保し、会員が近代的職業人として自らを形成しなければならない。この困難な道を彼らは全力で実践しようとした。ここに、新文化運動期、新勢力「少中」の運動の清新さがあった。

1920年前後の北京政府下では、海外への窓が広く開かれて、「少中」のような自立した知識青年の団体が、海外の会員と連携して存続することが可能となった。前近代的な士大夫意識に導かれながらも、個人主義、自由主義の気風が会員に定着し、独立の精神が芽生えたことは、以後の近代的民族文化の形成や中国社会の分析へ道を開いた。

「少中」の内部論争から窺えるように、新文化運動期の思潮には、共産主義や保守主義に収斂されるだけでなく、個人主義的で改良主義的な改革運動を志向する傾向も存在した。会内の共産主義派、青年党派も、「少中」の個人主義、自由主義の洗礼を受けており、それらは、現代につながる「思想の遺産」でもある²⁴²。新文化運動が、思想と文化の変革を掲げたのに続き、「少中」が「少年中国の創造」を掲げて、社会改革を中国近代の実践的課題として提起し、五四運動後の社会運動の時期を生み出した意義は大きいと考える。

註

- 154 少年中国学会は、これまで1925年末に活動を停止したとされた。張允侯・殷叙彝・洪清祥・王雲開等編『五四時期的社團』(1)、三聯書店、1979年、218頁。改組委員会の黄仲蘇によると、1926年3月開かれた改組委員会の会議で、会員に実施した調査表を回収した結果、その数は全体の三分の一弱しか届かなかったため、慎重な検討の後、やむを得ず会務の一時停止を決定したと記している。黄仲蘇「王光祈與少年中国学会」左舜生等著『王光祈先生紀念冊』、文海出版社、1968年、附5-9頁。
- 155 諸説あるが、「少中」の活動期間中(1918-1925)に途中で死亡又は退会した会員も含めて116名の秦説を採る。秦賢次「少年中国学会」会員名録(1918-1925)『伝記文学』第35巻第2期、1982年。
- 156 王汎森「近代知識份子自我形象的轉變」『台大文史哲學報』、1996年1月。
- 157 「少年中国学会規約」前掲『五四時期的社團』(1)225頁-230頁。1918年制定の旧宗旨は「少年精神を奮い起し、眞実の學術を研究し、社会事業を發展させ、末世の風氣を轉變する。」となっていた。同上、225頁。
- 158 「本会發起之旨趣及其經過情形」(1919年5月)、前掲『五四時期的社團』(1)、219-222頁。
- 159 王光祈「少年中国学会之精神及其進行計画」『少年中国』第6期、『王光祈文集』4巻、80頁。
- 160 張夢九「憶少年中国学会」『伝記文学』第35巻第2期、1982年、144頁。
- 161 陳氏は「少中」を「理想主義的で、情熱で結ばれたロマン主義団体であり、理想と現実の衝突の結果、その運動は雲散霧消してしまった」と評した。陳曉林「五四時代理想与现实的衝突——以少年中国学会為例」汪榮祖主編『五四研究論文集』聯經出版公司、1979年。
- 162 革命史的な研究における少年中国学会評価の基準は、早くも中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編局研究室編著、『五四時期刊介紹』第1集、人民出版社、1958年の「少年中国」で、定義されていた。すなわち知識階層の中で主義の争いが典型的に展開された組織とみなされ、学会の綱領は、極めて曖昧であり、組織の目的が不明確であったと評価されてきた。しかし、この否定的な評価は、実は1921年の南京大会で北京会員の鄧仲渾の発言から招来したものであり、当時の多様な立場を包摂する「少中」会員の实態を反映したものではなかったと筆者は考える。
- 163 吳小龍『少年中国学会研究』上海三聯書店、2006年。なお、同書については筆者の書評がある。〔『広島東洋史學報』第12、2007年〕がある。合わせ参照されたい。
- 164 前掲吳小龍『少年中国学会研究』、107頁。
- 165 序章第3節参照。新文化運動・五四運動を啓蒙運動とみる小野信爾氏は、王光祈をアナーキストと見た。「五四運動前後の王光祈」『花園大学研究紀要』22号、1990年。石川啓二も「少年中国学会の精神は、素朴な大同思想、ユートピア的アナーキスティックな社会主義である」とみている。「中国に於ける教育獨立論の系譜——少年中国学会と国家主義派」『山梨大学教育学部紀要』7、1993年。後藤延子「王光祈」山田辰夫編『近代中国人名辞典』、霞山会、1995年。
- 166 牛嶋憂子『王光祈文獻総目録——付著訳年譜——』アジア文化総合研究所出版会、2007年。同「日中における王光祈研究の現状と課題」『客家与多元文化』第5号、2009年。
- 167 狭間直樹訳・解説「少年中国」的「少年運動」——李大釗『革命論集』(中国文明選第15巻)、朝日新聞社、1972年。齊藤道彦「五四時期の思想状況——李大釗の少年中国主義」、『講座中国近代史』4、東京大学出版会、1978年。
- 168 郭正昭・林瑞明『王光祈的一生與少年中国学会』、百傑出版社、1978年、5頁。
- 169 王光祈は『少年中国運動』を書いた1924年には、すでに世界主義の見方から民族文化復興の主張へと立場を移している。その「序言」の中では、新文化運動時代を危険な時代であったとさえ評していた。『少年中国運動』「序言」1924年3月、『王光祈文集』第4巻164頁。
- 170 新文化運動への批判的見方が、ヨーロッパ留学後、民族主義へ転じる土台をすでに形成していた。彼は、1924年の『少年中国運動』助言において、中華民族復興を唱え、民族文化復興運動と民族生活改造運動を主張した。
- 171 曾琦と王光祈は、1914年春、郷里をともに出立して上海に到着した。フランス留学を希望していた曾琦は上海のフランス系教会学校である震旦学校に入った。大戦の勃発のためフランスに行けず、1916年25歳で日本に留学し、中央大学に入学した。日本で、陳愚生、雷宝箐、張夢九を知り彼らは「少中」の發起人となった。一方、王光祈は、上海から、張爾巽を頼って、北京に行った。張爾巽は、清末民初の官僚・政治家で、民初に「清史館」の館長に就任、『清史稿』の編纂に従事した。張は、著名な詩人であった王光祈の祖父の弟子であった。母一人に育てられた王は祖父の縁で四川総督に赴任した張の経済的支援を受け、成都の高等師範分設中学校に入学することができた。しかし、辛亥革命後、張の支援は途絶えた。王は北京で張の清史館で働き、自活しながら、私立中国大学で学んだ。この事実は王にとり極めて屈辱的であり、彼の経済的な獨立自尊の精神の支柱を形成した。
- 172 李大釗と陳愚生は、日本留学時代からの友人で、北京ではその住居が隣り合わせであった。陳愚生は王光祈がドイツ留学により執行部主任を辞任した後「少中」の運営にあたった。
- 173 周太玄は、1919年2月にフランスへ留学、巴里通信社を組織した。雷宝箐は、東京で病死した。
- 174 章炳麟の講演「今日之青年之弱点」の概要は、胡適が講演「少年中国之精神」冒頭で紹介している。胡適の講演は、「少年中国之精神」胡明主編『胡適精品集』第9巻、光明日報出版社、1998年。陳独秀の講演は、「我們應該怎麼樣」『新青年』第6巻4号「録少年中国学会会務報告」、1918年4月。胡適の紹介で、「少中」の出版物は、上海の亜東図書館[出版社名：筆者注]に委託出版できるようになり、販路が拡大した。

- 175 王が、文中で青年イタリア党に言及しているのは、前掲「本会発起之旨趣及其経過情形」と『少年中国運動』序言』においてである。四川音楽学院・成都温江区人民政府編『王光祈文集』第4巻、巴蜀書社、2009年。「『少年中国運動』序言」の原載は、王『少年中国運動』、中華書局、1924年）。
- 176 掲王『少年中国運動』序言。
- 177 陶履恭「社会」、『新青年』第3巻第2期、1917年4月。
- 178 梁啓超「政治之基礎與言論家之指針」『飲冰室合集』4（飲冰室文集之三十三）中華書局、2008年。
- 179 王光祈「社会的政治改革與社会的社会改革」『少年中国』第3巻第8期、1922年3月。
- 180 傅斯年「社会——群集」『新潮』第1巻第2期、1919年2月。王汎森「傅斯年早期的「造社会」論——從兩份未刊殘稿談起」『中国文化』第14期、1996年12月。なおこの点については、本論文の第一部第2章も参照されたい。
- 181 上海の震旦学校で曾琦と同学であった左舜生は、中華書局の編集者で上海に居住、蘇演存の後任として『少年中国』の発行停止まで『少年中国』編集主任を務め、「少中」の国内活動の要であった。
- 182 前掲『五四時期的社團』（一）231—236頁。
- 183 王は、1919年1月、10月に上海、南京、濟南、天津、武漢を訪ねて有力な青年を会員に入会させている。王光祈「致太玄、幼椿、慕韓、調元」『少年中国』第1巻第6期「会員通訊」、1919年12月。
- 184 蘇演存は北京大学学生、王の後『少年中国』の編集主任となった。仲澥(中夏)と惲代英は、1920年初めより北京総会の活動に積極的に関わった。陳啓天は武昌の中華大学出身、南京分会の中心メンバーである。毛沢東の入会も王光祈の紹介によるものである。毛は、新文化運動時期の北京大学図書館の臨時事務員をしていた時、著名な教授や學生に相手にされなかったと伝えられているが、王光祈は、「少中」の会議に誘い、湖南の毛の新民学会を友会とみなしていた。（「本会発起之旨趣及其経過情景」『少年中国学会会務報告』第3期、1919年5月、前掲『王光祈文集』第4巻173頁）。「少中」での王と毛の関わりは王曉剛「毛沢東、周恩 來為何如牽掛王光祈」四川音楽学院高等教育研究所・成都市温江区文化廣播電視局編『崑崙巨声——「2009 王光祈研究國際學術討論會」論文匯編』四川出版集團・巴蜀書社、2010年に詳しい。
- 185 1918年の規約は、明文としては残っていないが、正式の成立時に改正されたのは第2条の宗旨だけであった。その後、宗旨に「民治」を加えることや推薦者の人数を5人から3人に緩和するなど部分的改定案が出されるが、結局最後まで変えることはなかった。1919年の改正「少年中国学会規約」と「本会通告、關於修改学会宗旨的通告」を参照。前掲『五四時期的社團』（1）、225—230頁。
- 186 「本会征求會員之標準」、前掲『五四時期的社團』（1）237—238頁。
- 187 王「在吳淞同濟学校的講話」（1919年1月23日）、「本会発起之旨趣及其経過情形」（1919年5月1日）。ともに、前掲『五四時期的社團』（1）、前者は、286—288頁、後者は219頁—222頁。
- 188 王は、中国大学では政治学を専攻したが、当時「社会主義思想に興味を抱き、社会主義の研究のためには経済学研究が必要である」として経済学の研究に専攻を移し、ドイツ留学も経済学研究のためであった。音楽史研究に転じるのは1922年である。
- 189 第14条の会員に対し「不道德行為・政党への接近と加入」を禁じたこの項目は、実際に会員の行動とその後の社会的活動を大きく規制した。「不道德行為」とみなした会員の除名問題が発生したし、「政党への接近と加入」は、「主義」問題と関連して、「少中」の組織に思想的対立を生み出した。
- 190 前掲王「在吳淞同濟学校的講話」。
- 191 李璜は、四川省成都出身、震旦学校で曾琦と同学。巴里通信社を組織した。
- 192 「少年中国学会規約」と「科会弁事規則」は、前掲『五四時期的社團』（一）225—231頁参照。
- 193 王光祈「会務紀聞、少年中国学会成立大会」、「本会通告、關於修改学会宗旨的通告」とともに『少年中国』第1巻第1期、1919年7月。
- 194 康白情は、1920年の「少中」成立1周年記念の集会で、新たにまた「少中」規約の改正を提案した。「少年中国学会消息、北京方面的報告」『少年中国』第2巻第2期、1920年8月。康は、四川省出身、北京大学卒業、詩人、『新潮』同人、少年中国学会の編集部副主任。1920年秋、米國留学。
- 195 前掲呉小龍『少年中国学会研究』、31頁。
- 196 王は、社会改革の立場から、「ただ外交を問ひ、内政には関わらない」という五四運動の学生の立場に批判的だった。五四運動で共同しながらも、立場の違いを伺うことができる。王光祈『少年中国運動』序言』前掲『王光祈文集』第4巻、167—168頁。
- 197 王光祈「少年中国学会之精神及其進行計画」『少年中国』第1巻第6期、『王光祈文集』第4巻、74頁。
- 198 前掲『少年中国運動』序言』、『王光祈文集——時政文化論』167頁。又会員の希望職業調査によると、工業技術関係の志望者もいるが、ほとんどの会員が教育、著作活動を志望していた。「終身志業調査票」前掲『五四時期的社團』（一）。
- 199 上海会員と王との書簡は「会員通訊」（『少年中国』第1巻第1期、1919年7月）。康白情が王光祈の会務を批評した書簡は、「会員通訊」（『少年中国』第3巻第2期、1921年9月）。
- 200 前掲王「本会発起之旨趣及其経過情形」。
- 201 王「少年中国学会之精神及其進行計画」『少年中国』第1巻第6期、1919年12月。
- 202 易君左から曾琦・張夢九への手紙と王光祈から易君左への手紙の2つの書簡から、会員のデモクラシーへの関心

- が窺われる。王は、日本にいた易君左を通して当時の新理論を吸収しようとしていた。「易家鉞(易君左)致慕韓、夢九」(1919年3月)「王光祈致君左」(1919年5月)前掲『五四時期的社団』(一)291—294頁。
- 203 王「政治活動与社会活動」(1921年10月)『少年中国』第3巻第8期、1922年3月。
- 204 曾琦「留別少年中国学会同人」『少年中国』第1巻第3期「少年中国学会消息」、1919年9月。
- 205 前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。
- 206 前掲曾琦「留別少年中国学会同人」。
- 207 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会、1996年、282頁。
- 208 南京大会(1921年7月)へ康白情が提案した「規約修正案」は、「宗旨」の項に「民治」を挿入し、第2条の「本学会宗旨」を「科学と「民治」の精神にもとづき、社会活動を行い、もって「少年中国」を創造する」へ修正しようとした。「少年中国学会規約修正案」、『少年中国』第3巻第2期、1921年9月。
- 209 張崧年(1893—1986)は、通常は、字の張申府で知られる。少年中国学会では、崧年と名乗っていた。
- 210 張崧年の退会声明書(1921年9月20日作成)、彼は、『新青年』の記者でもあり、その少年中国学会退会声明を張申府の名で『新青年』第9巻第6号「編集室雜記」、1922年に掲載した。「私が創造する少年中国は、無産階級の少年中国であり、労農を主とする少年中国である」と言い、「工人治」は理解できても「民治」は理解できないと反対した。張の考え方は民主主義を階級的立場から考える視点であった。
- 211 劉衡如は、金陵大学卒で南京分会に所属していた。「少年中国学会問題」『少年中国』第3巻第2期、1921年9月。
- 212 王「「少年中国」之創造」、『少年中国』第1巻第1期、1919年7月。前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。
- 213 「予備功夫」の日本語訳として、小野信爾氏は「準備の仕事」と訳している。前掲小野論文「五四運動前後の王光祈」。
- 214 李璜「破壊与建設及予備功夫」、「再譚對於少年中国的予備功夫」など、『少年中国』第3巻第8期、1922年3月。
- 215 島田虔次、中国文明選『王陽明集』朝日新聞社、1975年。
- 216 前掲『『少年中国運動』序言』、『王光祈文集——時政文化論』167頁。
- 217 王「致易君左」(1919年5月20日)前掲『五四時期的社団』(1)293—294頁。
- 218 吳氏によると「工讀互助主義は、互助論を核心にしたアナーキズムを理論的基礎にし、工讀主義、新村主義を総合した一種の中国式の空想社会主義の思潮」であるとする。(前掲吳小龍『少年中国学会研究』72頁)。
- 219 王「致「少年中国学会」諸同志」、1920年4月23日、『少年中国』第2巻第1期、1920年8月。
- 220 胡適「研究社会問題的方法」、前掲『胡適精品集』第9巻、42—55頁。
- 221 王「旅欧雜感」『少年中国』第2巻5号、1920年11月
- 222 前掲王『『少年中国運動』序言』、『王光祈文集——時政文化論』168頁。
- 223 同上167頁。
- 224 前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。
- 225 張夢九「主義問題與活動問題」『少年中国』第3巻第8期、1923年3月。
- 226 王「旅欧通信、分工與互助」(1920年9月19日)『少年中国』第2巻第7期1921年1月。
- 227 前掲王「旅欧通信 分工與互助」。
- 228 同上。
- 229 「終身志業調査表」は、1920年10月から1921年11月にかけて実施され、62名が回答した。「生涯の専門研究分野または事業、開始する予定時、生活維持方法」の調査項目があった。『五四時期的社団』(1)420—435頁。「致惲代英書」(1921年3月12日)『少年中国』第2巻第11期「会員 通訊」、1921年5月。このような調査を実施したことから少年中国学会を見ると、社会的自立の前段階にある知識青年層の組織であり、さらに、海外留学も可能な上層社会出身者からなる青年組織であったことは明らかである。
- 230 「致惲代英書」(1921年3月12日)『少年中国』第2巻11期「会員通訊」、1921年5月。
- 231 前掲王汎森「近代知識份子自我形象的轉變」17頁。
- 232 南京大会の報告は「少年中国学会問題」『少年中国』第3巻第2期。
- 233 前掲「少年中国学会問題」参照。この時は、惲代英が、両派の間の調停役であった。
- 234 前掲王『『少年中国運動』序言』、『王光祈文集——時政文化論』162頁。
- 235 惲代英「書評『少年中国運動』」(1924年11月15日)、前掲『五四時期的社団』(一)、473—478頁。
- 236 「致少年中国学会同志書」(1925年8月31日)、前掲『王光祈文集——時政文化論』、502—503頁。
- 237 「王光祈對於会事進行意見書」(1925年8月31日)。前掲『王光祈文集——時政文化論』、503頁。
- 238 王の調査表回答は前掲『五四時期的社団』(一)、514—515頁。
- 239 王の民族主義は、中華民族の独立と自由を闘いとる事である。漢、滿、蒙、回、藏を統一して中華民族と称した。前掲『五四時期的社団』(一)、514頁。
- 240 国家主義の政治的思想的潮流の形成については、小野寺史朗「1920年代の世界と中国の国家主義」村田雄二郎編『リベラリズムの中国』有志舎、2011年参照。
- 241 前掲王「社会的政治改革與社会的社会改革」。王は、国民党や進歩党には少数の優れた人物がいるにはいるが、他の大部分は「無頼漢や悪徳紳士」からなるといっている。
- 242 黄興濤(川尻文彦訳)「國際交流 清末民初、新名詞・新概念の「現代性」問題——「思想現代性と現代性を帯びた

「社会」概念の中国での受容『現代中国研究』第17号、2005年9月。

第2章 惲代英と少年中国学会——1920年前後の惲代英の軌跡——

はじめに

1920年から1921年の「少中」の活動を見ると、執行部主任であった王光祈（1892—1936）がドイツ留学で中国を去ったのに入れ代わり、湖北省武昌の会員惲代英（1895—1931）²⁴³が「少中」のオピニオン＝リーダーとして『少年中国』誌上に登場してきたことが注目される。惲は、「少年中国の創造」の討論を会員に呼びかけ、会務の改革を積極的に提案して、「少中」の運動の前進に尽力した。「少中」の活動方針を討議する場となる年次総会の開催も、彼の提案によるものである。

会員としての惲代英は、1920年以後、少年中国学会の評議員に毎年選ばれ（1922年には候補評議員）、運動の発展に責任を負い、1923年の蘇州大会で決定された「民族主義運動」への方針転換を積極的に支持した。1924年以後「少中」内に発生した共産主義派と国家主義派との対立において、共産党員としてその対立の中心にありながらも、知識人の中で果たすべき「少中」の存在とその意義を重視し、その存続と会員の協力関係の構築に努力してきた。

惲は、地域に根ざした活動にこだわり、武昌に工読互助団に似た利群書社を創始して新文化運動に取り組んだ。この時期、「少中」の運動理念である「科学的精神にもとづき、社会運動を行い、少年中国を創造する」を文字どおり献身的に実践した一人である。

惲が武昌から、1919年9月9日、王光祈宛てに入会を申し込む手紙を書き²⁴⁴、正式に入会したのは、10月1日である²⁴⁵。彼の入会時期は、1918年6月末の発起²⁴⁶から1919年7月の成立までに関わった王光祈、曾琦、李大釗、左舜生らの人たちとは異なり、五四運動の全国的な展開を経て、「少中」の運動が各地に組織を拡大して知識青年への影響を広げていった成長期にあたる。宗旨に見られる会の理念が青年たちに浸透していった時期である。

彼は、中華大学在学中の1917年10月、「自助助人」「身体力行」を唱えて倫理主義的な青年組織「互助社」を創始した。彼の思想的な原点は、倫理的自己を確立した個人が互いに連携して社会改革に従事するというものであった。卒業後は、母校の附属中学校の教員になり、武漢地域の五四運動を指導した²⁴⁷。

「善勢力の養成」²⁴⁸による救国運動を目指していた彼は、少年中国学会の存在を知り、その運動に彼の理想を託した。彼の妻沈葆英によると、「善勢力の養成」という考えは、惲の一生を貫く考えであったという。後藤延子は「善勢力の養成」の考え方がキリスト教青年会(YMCA)の余日章の主張と共通する点があり、余の影響を無視できないと指摘している²⁴⁹。

「善」は、新文化運動の中でキーワードの一つであり、新潮社の傅斯年是、「万惡之原(一)」で、「善」を「個性」から生まれると書き²⁵⁰、王光祈も、1919年3月4日、北京の蟠桃宮での北京大学平民教育講演団の講演活動に参加し、「善とは何か」の題目で、聴衆に講演していた²⁵¹。新文化運動時期の青年として、傅斯年も王光祈も惲代英も個性こそ第一の価値のあるものであるとみなしていたことがわかる。「善勢力の養成」を目指していた惲代英は、五四運動後、新たな道を求めて「少年中国の創造」を掲げた青年知識人の組織に自分の理想実現を託そうとしたのである。

彼は、「少中」入会後に続く1920年前後の一年間あまり、少年中国運動の組織的前進に努力するとともに、武漢地域において新文化運動を展開した。さらに、郷村運動の実践に進んだ。工読互助団が失敗した後の会内において、「少中」の主唱した社会運動を受け継ぎ実践したのは、ほとんど唯一、惲代英を中心とした武昌のグループであったと筆者は考えている。

惲と1917年以来通信関係にあった友人で1923年の蘇州会議の後に入会した舒新城は、その回想記の中で、当時の惲の印象を「少年中国創造の苦行僧」のようであったと表現している²⁵²。湖南の毛沢東も惲の影響を受けている²⁵³。

しかし、その実践は、現実の社会経済的困難と地域の保守勢力の攻撃にあい、困難を極めていた。惲が安徽省立宣城第四師範学校に赴任していた1921年の冬休み前（1月末）に、彼の元に王光祈から手紙が届いた²⁵⁴。これに対して、当時の彼の心情を伝える手紙を書きおくれた²⁵⁵。

王へのその手紙は、一年あまりの実践を踏まえて、新たな道を模索していた惲の心情を伝えており、王と少年中国運動をめぐる主要な問題について意見を交換している²⁵⁶。惲は、工読互助団失敗の原因を深く分析追究して、提唱者であった王光祈の責任にも触れ²⁵⁷、この時期の青年運動、新文化運動のもっていた弱点を抉り出している。即ち、現実の中国社会で、少年中国運動を実行するには、知識青年たちの社会的基盤が当然に極めて弱体であることである。その弱さを、自らの実践によって明確に認識した惲たちは、やがて群衆の力量に注目するに到る²⁵⁸。

半年後の7月に、南京で開催された全国大会は、暉が会員と「少中」の運動方針を討論しあう機会として大きな期待を抱き、自ら開催を提案した会議であったが、そこで、会員の「少年中国創造」に対する見解の相違が明白になり、運動の転換点となった。

本論では、主要には暉が少年中国運動へどのような意図と関心を持って参加したか、彼の本来の意図は「少中」の中で実現されたのか、「少中」内の分岐の本質を暉と王光祈の分岐から探っていくことを目的とする。時期は1919年10月の最初の手紙から1921年初め、暉が王光祈の手紙に当てて書いた長文の手紙の間の時期である。

著名な中国共産党員であった暉代英の初期の研究史料は、今日比較的多数残されており、原文を直接見ることができる。復刻された『東方雑誌』『新青年』や『少年中国』第1巻～第4巻等の当時の雑誌にしばしば彼の文章を見つけることができる。

又、主要な彼の論文や手紙は『暉代英文集』上下、人民出版社、1984年(以下『文集』と表記する)にまとめられ、日記類は、中央档案馆・中国革命博物館・中共中央党校出版社編の『暉代英日記』中共中央党校出版社、1981年(以下、『日記』と略称する)がある。書簡類は、張羽・姚維闢・雍桂良編注の『来鴻去燕録』北京出版社、1981年に編集されている。さらに、李良明・鐘德濤主編『暉代英年譜』華中師範大学出版社、2005年がある。

暉代英が武漢で組織した互助社・利群書社、少年中国学会等については、張允侯等編『五四時期的社団』(一)(三聯書店、1979年)がある。また、暉の簡潔な紹介は、山田辰雄編『近代中国人名辞典』(霞山会、1995年)の「暉代英」(砂山幸雄)にある。回想記には、『回憶暉代英』人民出版社、1982年がある。

第1節 暉代英研究の課題

日本における暉代英研究²⁵⁹は主要には、1980年代から90年代に集中している。研究テーマは、暉の五四運動時期までの「前期の思想」の研究と、暉代英が五四時期に当時「信奉した」とされるアナーキズムからマルクス主義への思想転換過程の研究の二つに分かれる。

1979年に発表された小野信爾「五四時期の理想主義——暉代英の場合——」は、暉代英研究の嚆矢である。小野氏は、新文化運動の倫理革命に焦点を当て、当時「クロポトキン相互扶助論とトルストイの汎労働主義が青年たちの魂を捉えた」(37～38頁)と指摘し、アナーキズムの影響を受けながら、マルクス主義に転じていく暉の実践を跡付けた。

同氏の暉代英への関心は、「中国共産党結成にあたって参加を勧誘されてもよい立場にあったにもかかわらず、彼は中国共産党の結成には加わらなかった。……入党の時期は一九二二年春以降だったと推定される。……一年に近いそのずれ—共産主義小組の成立からすれば二年—の意味は決して小さくはない。それは「階級革命」(マルクス主義)による社会主義を「生存」(生存競争)の域を脱せぬものとし、「共存互助」の社会主義を求めて苦闘していた暉が、実践の教訓を通じて自己の認識を空想から科学へ発展させる上で、尚必要だった時間なのである²⁶⁰」と、述べている。

小野論文では、暉の実践と思想発展を見るにあたり、「空想から科学への認識の発展」があったという視点から論じている。即ち、思想発展において、空想的社会主義から科学的社會主義としてのマルクス主義を受容したということを前提にして彼の歩みを理解しようとしている。

小野は「少中」と暉の関係に注目しており、「暉代英と少年中国学会とのかかわりは、いずれ稿を改めて論じることとしたい」と述べていた。小野のこの発言は、当時存在していた「少中」に対する否定的評価²⁶¹に対して暉代英研究の側面から見なおし、評価する可能性を示していたが、残念ながら以後論稿は書かれていない²⁶²。

後藤氏の五四運動期までの一連の思想史研究は、暉代英の思想発展を三つの時期に区分している。①一般的な道徳的修養と社会服務を説く五四運動前夜の時期、②彼の理想社会像が明瞭な姿を現し、その実現に向けて利群書社、及び郷村実業、郷村教育の実践が行われた1919年から22年夏ごろ、そして③中国共産党入党以後の時期である²⁶³。『日記』を使い、暉へのスマイルズ「自助論」やキリスト教青年会の暉代英への影響を立証した。さらに、近年の「暉代英と武漢五四運動」では、五四運動期における暉のアナーキズムの影響を強調している。

一方、砂山論文は、小野の使えなかった『日記』を使い、小野論文とほぼ同じ時期を扱うが、その問題意識は「暉のアナーキズム」に対し砂山の独自の理解から生まれている。すなわち「暉は、アナーキズムの主張する、権力に対する個体の反抗の側面より、むしろ、社会は政治的手段によることなくそれ自身の中に秩序形成力をもつ、というアナーキズムが本来有している今一つの主張からインスピレーションを得

て、中国を「強固な社会」とするための道を模索した²⁶⁴」と考えたと指摘しており、惲の中国社会に対する独自の見方に注目していることがわかる。

アナーキズムという視点から考えた後藤も砂山も、惲代英の思想の底にある中国社会に対する見方に注目し、彼の理想社会像や「強固な社会」の建設への志向を取り上げている。筆者は、これら先行研究から学んで、惲の思想が、新文化運動期の中国社会論の影響を受けたものであることを指摘したい。

砂山は、惲が王光祈への手紙(1919年9月9日)の中でアナーキズムを信じていることを告白し、「あなた方の信条—奮闘、実践、堅忍、儉朴—はすでに私の二三年來の信条でもありました」と書いたのは、彼が新しい道を模索していた頃に当たり、入会と彼の新しい活動への転機が同時期であると指摘している。砂山は、惲が行った「少中」の組織改革の試みを評価して、「惲が多様な主義の並存を認めたくえて、これらの主義を結合する「計画」を上位に配置することにより強固で持続的な発展が可能とされる組織にすることを提言した」と指摘し、惲の組織論・運動論を評価している。惲は、「少中」の組織の中で自らの組織論の有効性を確認しようとしたのである。

惲は「少年中国創造は容易なことではない。それぞれの同志が、学問があつて、品格があるだけではなく、自覚的に共同の目的のもとで連合し、分業と互助の計画をもつこと。中国は一人であまくできるのではない。連合こそ権力である。これが、我々が少年中国創造のため学会に結合する必要があるゆえんである」と考えたからである²⁶⁵。

砂山が、惲の組織活動へ行った議論に注目したことは、敬重に値する。しかし、砂山は、青年知識人からなる「少中」を組織的勢力に形成するために努力した惲に言及しながらも、「少中」に対して否定的な中国の評価を受け継ぎ、「少中」が本当に惲の期待した組織であったのか、そこで、本当に新しい同盟者を発見できたのであろうかと疑問を投げかける²⁶⁶。砂山も「少中」に対する否定的な従来の評価から抜け切れていない。

中国では、惲代英生誕を記念し、90周年・100周年・110周年と、論文集が出版され、専著も出版されている。近年の傾向は、惲代英が民主主義からマルクス主義へ転化したという主張より、惲代英の愛国思想の方がむしろ強調されている。

「少中」との関係扱ったものが少ない中で、徐則浩の論文「惲代英在安徽」(1985年)は、これまで軽視されていた1921年1月の惲の「王光祈への手紙」をとりあげて、この往復書簡が惲の思想転化の研究に於いて重要な歴史文献であると指摘した²⁶⁷。徐則浩は、「惲が一貫して抱いてきた教育救国の考えを捨て、教育問題と全社会問題の根本改造を結合させた転換時期が、宣城第四師範の教学体験であった」と述べている。

徐則浩は当時惲が陥っていた困難について、「手紙に表現された惲の煩悶や茫然自失の感情は、まだ彼が空想的社会主義や無政府主義思潮からの影響を脱していないからでも、また、その矛盾状態から脱しようとして努力しているからでもない。安徽での教学体験が惲を教育救国論から脱却させ、教育問題と社会の根本改造とを結びつけた」がゆえの苦悶であったと解説した²⁶⁸。

しかし、徐論文は、惲が王光祈に対して書いたこの手紙のもつ重要性を指摘しながらも、この手紙が持つ今一つの重要な内容である惲と王が論争した問題自体には関心を示していない。その要因は、中国では、長く「少中」に対する否定的評価が定着していたため、「少中」と中国共産党の「烈士」である惲代英との関係を正面から論じる研究が見られないことにあるように思われる。この点は先に紹介したように、日本でも同様である。それ故、両者の関係を史実から検証することによって、新文化運動期の「少中」とその運動に対する新たな評価を生むことになるのではないかと筆者は考えている。

第2節 惲代英と少年中国学会

1 惲代英の少年中国学会入会の経緯

惲代英の「少中」入会は、劉仁静(1902—1987)を介したものである。劉は、湖北省出身で、惲より7歳年少である。武昌の中華大学附属中学第2班に在学中の1917年11月に、惲が組織した互助社に参加した。1918年秋、北京大学予科に入学し、翌年五四運動に参加した。7月28・29日の北大学生事件で逮捕された11人の一人である²⁶⁹。8月26日釈放された後、この事件で有名になった劉を、王光祈は『少中』に誘った。劉の入会は8月末であろう。

惲の『日記』によると、獄中の劉仁静へあてて手紙を8月21日、釈放後の9月1日にはがきを書いている。入会を誘う劉からの手紙が届くのはこの頃である。執行部主任の王光祈から惲への手紙が9月9日

に届いた。惲は直ちに、王にあてた手紙を書き²⁷⁰、『少中』へ10月1日に正式に入会した。

この王光祈への手紙には、劉仁静が、第1号から第4号までの『少年中国学会会務報告』と、「少中」の規約を送ってきて、自分がすでに『少中』に入会しており、惲に入会を勧めた」と、書いている。また、惲が特に共感したのは、劉から届けられた『会務報告』に記載された会員同士の通信であった。『新青年』や『新潮』を見るのも大変好きだが、「少中」の会務報告を読むほうがずっと好きだと書いている。「会員通信」に充満した誠実に奮闘する「新中国の新精神」に対し尊敬し共感したからである。

各地で奮闘、実践している会員と通信により交流を持ちたいという願いは、当時の知識青年に共通しており、特に惲は通信上の友人のネットワークを広範に形成していた²⁷¹。当時の知識青年の広く交際を求めるとの傾向をうかがい知ることができるが、惲にとっての通信による交際は、「善勢力」養成のための一手段に位置づけられていた。

「少中」の信条である「奮闘、実践、堅忍、儉朴」はまさに彼の信条であった。これに加えて彼の場合「互助、労働」が加わる。また、「力行救国論」²⁷²を書いており、会員の自ら奮闘・実践し、救国のために何ものをも畏れることのない不屈の態度に共鳴した。また「科学的精神にもとづき、社会的活動を行い、少年中国を創造する」を掲げた宗旨に共鳴し、彼がすでに、1917年より武昌の地において、互助社を組織して以来、実践してきたものと完全に一致していると述べ、少年中国の理念に極めて共感を寄せている。

惲はこの手紙の中で、「自由、平等、博愛、互助、労働」の理想を抱き、アナーキズムを信奉してきたと伝えている。しかし、彼のアナーキズムは、当時は彼個人の内面的な信条であり、組織運動としてのアナキスト＝グループに所属していたのではなかったし、彼のモットーは、「委曲合宜」（婉曲にそして適切）な方法を採用し内面の理想を現実化することであり、「過激派」のレッテルは彼の本意ではなかった。

惲は、中華大学を卒業して母校の付属中学に教務主任として就職し、一年間の教育活動に専心した経験を王に伝えている。この職業は、「善勢力」の養成に最適であるとし、「善勢力」の養成を目指して、学生を組織してきたと、手紙に書いている。その教育活動において、彼は、学生の浮ついた性格を知り抜いていたと思われる。

惲が武昌の五四運動を指導し、そこで知ったのは、学生たちの実態であった。それゆえ、自ら関わった学生連合会に対する批判は厳しく、王への手紙の中では、敢えて学生連合会を悪勢力の一つとしてあげているほどである。彼は、学生の急進的な行動に対し、批判的であり、むしろ行動は極めて慎重であった。既成勢力に頼らないという「少中」の活動の基本方針は、彼が平常感じてきたことと同じであった。手紙の中で惲は言う。

我々中国の既成勢力には、頼るべきものは一つもない。なぜなら彼らの思想や行動は数千年の誤った教育学説と風俗習慣によって伝授されてきたものであり、あなたが彼を頼ると、彼もあなたを利用するからだ。南北の軍閥、新旧の議員、役人になることを職業にしている官僚と留学生、騒動を起こすことを唯一の目的としている政客と学生連合会代表、目立ちたがりやをただ一つの主義とする国粋学者と新思想家、我々は彼らと同じ穴のムジナと見るだけである。……たとえば学生連合会は、新しく興った勢力というべきであろう、しかしこの勢力は、良い学生は度胸が据わっていないから使えないし、志が無い者も使えない。通常修養が欠けている者も使えない。……学生連合会は、結局、善勢力とはいえないし、一つの勢力とみなすこともできない。私がこういう話をするのは何も、学生連合会に対し何か悪意があるとかいうのではない²⁷³

彼にとって唯一の頼ることのできる希望が、ただ真っ白の純潔な心を持ち、労働と互助を理解できる青年であった。学生連合会に代わる新しい「善勢力」として惲が期待したのが、「奮闘、実践、堅忍、儉朴」の信条を掲げる「少中」であったと考える。彼は、自分の職業を通じて、さらに大きな「善勢力を養成する」ことができるであろうと考え、「自分たちこそが、中国の唯一の頼りになる救いの星」とであると覚悟していたのである²⁷⁴。

2 惲代英と少年中国学会運動

7月25日の『日記』によると、中華大学の啓智図書室附属の購買部の取り扱い新刊雑誌の中に、当月15日に創刊されたばかりの「少中」の機関誌『少年中国』が入っている。『日記』では、9月13日に『少年中国』が彼のもとに届き、18日には、『新青年』と『少年中国』を読んだと記している。

惲は、9月9日の最初の手紙以降、13日に王に手紙を書き、10月以降は19日と25日に王光祈へ、さ

らに、南京の左舜生とも11月17日と12月16日に会務上の手紙の交換をした。『日記』から見えるこのような頻繁な「少中」指導部との通信連絡は、当時執行部主任であった王光祈の意欲的な組織活動の反映であるとともに、暉が新しい活動に向けて準備を開始していることを示している。

当時の王光祈の活動をみると、暉の入会后まもなく武昌を訪問した。王の南下は、新たに1920年1月から発行する「少中」の第2機関誌『少年世界』の出版と販売の事業を引き受けてくれることになった上海の亜東書店との交渉のためであった。王は、10月25日に北京を出発して、上海へ行き11月9日に帰京しているが、その途上各地で入会者を組織した²⁷⁵。

王は10月27日に武昌に来て、中華大学で暉と会務について懇談した。余家菊に武漢の名勝を案内してもらうなど交流を深めている。さらに、暉代英らが教鞭をとる武昌中華大学附属中学校で「動的訓練」と題する講演を2時間行っている²⁷⁶。この講演で王光祈は、五四運動が最小の結果しか挙げられなかった原因として、学生の訓練が不足していたからであるといい、万悪の社会に向かっていくには団体を組織し団体生活を経験しなければならないと学生に訴えた。

暉は、王の27日の講演に対して、『日記』に次のように感想を書いている。

デューイは現在中国の偶像になった。そのため、わが国の人には彼の話に対してほとんど批判を持たず、ただ受け入れるだけだ。〔王の講演での〕この話は実際に大変もつともである。また、団体活動は小団体から始めるべきだ。この小団体は、どんな精密な完全な規則もいらない。規則を作っても、いつでも斟酌して改善できる。この話も、まるで互助社のやり方と同じである²⁷⁷。

当時中国の各地を講演していたデューイや新文化運動の著名人に対する批判的な視点が暉にあり、王光祈の話に同感したのである。この時に、武昌で「少中」に入会したのは、余家菊、梁紹文である。彼らは、暉代英の中華大学での同級生で、互助社、仁社の会員であり、卒業後は附属中学校の教員として働く暉の同僚でもあった。入会したのが、当時暉が組織していた「互助社」の学生ではなく、いずれも中華大学附属中学校の教員であり、同僚の陳啓天は、その後遅れて翌年5月に入会している²⁷⁸。

南京の会員が、王光祈の働きかけを受けて、その旅行の期間中、南京分会を組織したのに対して、武昌の彼らは、分会を組織しなかったし、学生を「少中」に紹介することはなかった²⁷⁹。

暉が、武昌に「少中」の分会を組織することは、その影響力からいって可能であったが、慎重な彼はそれをしなかった。彼は、「少中」へ会員を紹介することに対して極めて慎重な態度をとり、同僚の教員の一部を紹介しただけであった。

武漢の暉代英、余家菊、陳啓天の3人はいずれも、評議員にえらばれ、「少中」の重要な会員となった。その後、1924年に、漢口の民新小学・中学の創設者である任啓珊が入会している。紹介者は、暉代英、陳啓天、劉仁静、梁紹文、余家菊という武漢出身会員であった²⁸⁰。暉と余家菊、陳啓天とは後に共産主義派と国家主義派に袂を分かたが当時は極めて近い友人であった。

彼の周囲の中学生は、まだ暉の指導下にある未成年の少年であった。「少中」規約では、文章を書き、翻訳能力をもつことが会員の条件でもあった。すでに成人である南京高等師範学校と金城大学の学生らからなる南京分会とのちがいがあった。

武昌における彼らの入会が伝わると、南京の左舜生たちから新勢力の加入として歓迎された。左舜生は、フランスの曾琦にあてた手紙において、自分がすでに何度も暉代英と手紙を交換していること、そこでみる彼らは「みな人格は開けっぴろげで、少しのよそよそしさもない。以前蔓延していた積年の悪習は一掃され、広い心で接している。これは覚悟した後の青年の価値のある成果である。たとえ一人でも真実の結合でないと、どんな結合も価値はない²⁸¹」。

武昌の暉に対しては、曾琦も注目していた。曾琦は王光祈への手紙²⁸²において「武昌の新会員暉代英君は、確かに鄂中の青年の精華である。私は、彼のことを当地(フランス)にいる湖北の同級生から聞いており、さらに彼が編集した『新声』(半月刊)を読んだ」と書き、彼を高く評価していた。

『新声』半月刊は、林育南らの新声社の機関誌で、胡適が『新青年』誌上で紹介していたので曾琦も読んでいたのであろう²⁸³。『新声』は12月末、互助社の機関誌になっている。

さらに、前掲の『暉代英年譜』では、上の曾琦の手紙を挙げて、曾琦が王光祈に暉を「少中」の会務に抜擢するように推薦したと記している²⁸⁴。

3 惲代英の新文化運動の取り組み

惲代英が「自助助人」を掲げて 1917 年 10 月、互助社を結成して以来、その影響下に多数の小さな修養団体が周囲に組織されていた。武漢の五四運動²⁸⁵後、「少中」入会を経て、惲代英は、武昌の地で新しい試みを開始しようとしていた。それは、新文化運動の実践である。その実践に向けて、彼の構想は「少中」の掲げる少年中国運動の影響を受け、この時点で全く一致するものであった。

1919 年 12 月 3 日の『日記』に附属中学を「辞職して文化運動の事業に専念したい」と書いた彼は、17 日に辞任を決意してその意を中華大学校長の陳時に伝えていた²⁸⁶。そして翌年 1920 年 1 月、余家菊、陳啓天とともに附属中学を辞任した²⁸⁷。

当時、彼の教務主任としての地位は、五四運動以後極めて困難な状況にあった。学校運営では、給料の不払いにより辞任する教員が続出し、代わりの良い教員が集まらないため教員不足に悩んだ。事務の量も多すぎる。都督王占元の学校への圧力も強化された。さらに、彼を評価して附属中学の教務主任に抜擢した中華大学校長陳時との間で、中学校のコネ入学を断固拒否したことや学校運営における経理公開を要求したことによる軋轢も起こっていた。

一方、家庭においては、前年の妻の死後、再婚を求める周囲からの圧力があつた²⁸⁸。又、精神病により廃人となっていた兄、そして癲癩でねたきりの次弟という 2 人の病人をかかえて、家計への経済的負担も負っていた。

9 月 28 日に弟の子癸が死亡したが、弟の看護を十分してやれなかったことに悩み彼自身も病気になってしまい、弟の野辺の見送りもできなかつたと悲しみに沈んでいた²⁸⁹。弟の死、このような事情も彼に家を出る覚悟を実行させたと考える。

さらに、結婚問題は当時の青年たちに重くのしかかった最大の課題であった。惲の場合は、妻沈葆秀が死去して早速彼にかかってくるのが再婚の圧力であった。孟子の「不孝に三あり。子孫なきを大となす」という「不孝有三無后為大」の八字は、全く荒唐無稽な天経地義で、立ち去らせるしかないと憤激している²⁹⁰。

さらに、少年中国学会と王光祈らの新しい運動を知る中で、家庭を出て新生活を始める期待が急速に現実のものとして形を結んでいったのである。そして、先述したように、「中国の唯一の希望が我々にあること—我々とは即ち惲子毅(子毅は惲の字)と惲子毅の友人である」という自負²⁹¹が、しだいに芽生えてきた。

『日記』にはじめて、「新生活」の語が出てくるのは 11 月である。「新村の企望」や「新生活に対する提案」に始まり、以後は新生活の構想を友人たちと話し合っている。12 月 22 日に「我們的新生活」を書き²⁹²、独立事業を起こすこと、その事業は、初歩的な一歩として共同生活と書店経営を結合するものとしていた。そして、翌年 2 月 1 日に利群書社が正式に営業を開始した。

このように、利群書社の構想は、「少中」との関わりからしだいに実現していったものであり、それは、工読互助団の構想に似ており、彼の試みは、王光祈の構想からヒントを得、武漢地区で文化運動、さらに社会運動として展開する展望を持ったものであった。この時期王光祈が提唱し、全国の青年の間に反響を与えた工読互助団を惲は当初、「子どもだましの試み」だと烈しく批判していた²⁹³。

梁紹文と工読互助団のことを話して、「はじめ、子供だましだと、ついで、むかむかした。無意味な考えをひけらかしているに過ぎない。何の道理があつてこんな無意味なことをしようとするのか」と一蹴していた。しかし、激しく嫌悪感すら見せていた惲であるが、翌年 2 月「武昌工学互助団」の発起人に中華大学校長の陳時、梁紹文とともに名を連ねている²⁹⁴。彼の態度に一貫性が見られないが、武漢の工読運動が実際に取り組まれたかは不明である。

武昌の彼らはすでに備読主義²⁹⁵と称して、学生時代から雑誌への投稿や学校の講師をして学費を稼いでいたので、単に学生の生活費を稼ぐための共同生活は、少年中国建設という目標を持つ社会運動としては意義を持たないと考えたのであろう。工学互助団に対する惲の批判は後の王光祈との論争につながる視点である。

書店経営という構想は、元来中華大学の啓智図書室に由来している。1919 年 7 月 25 日の『日記』に、中華大学の啓智図書室附属の購買部のために起草した新刊雑誌購読の取り扱い規則を記している。そこには、取り扱い新刊雑誌として『新青年』、『新潮』、『新教育』、『新中国』、『少年中国』、『教育潮』、『学生』、『毎週評論』、『救国日報』が挙げられており、7 月 15 日に創刊された『少年中国』もその中にすでに含まれていた。

彼はこの購買部の事務を担当しており、『少年中国』の取り扱いを北京の王光祈からすでに依頼されて

いたらしいことがわかる。さらに『少年中国』第1巻第4期（10月15日発行）には、「本月刊代派処」（取り扱い処）として、「武昌中華大学惲代英君」が明記されていた。

12月16日の『日記』には『少年中国』の販売を取り次いでいることを記録している。第1巻第4期は50部、第5期は100部が送られて、30部、50部を売っていることが記録されている。胡適の短編小説も50冊送られ25冊売っている²⁹⁶。

惲は、このような中華大学の啓知図書室附属の購買部を継承して、新文化運動の新思潮を伝播する書店を経営しようと考えたのである。『新青年』、『新潮』、『少年中国』などの雑誌や書籍の販売を行うにあたり、王光祈の尽力で出版社との書籍の購入に便宜を図ってもらえるようになったことは、この構想実現を後押しした。そして、翌年1920年2月1日に利群書社が開店した²⁹⁷。

当時『時事新報』副刊「学灯」を編集していたのは、「少中」の会員宗白華であった。宗に送った手紙は、1920年2月23日「学灯」に発表された。その中で「利群書社は、書籍と新聞雑誌の販売を行う。これは完全に新文化との関係を持つもので、武漢の他の書店では売らないし、かつて売ったこともない。どれだけの客が来るかは、これからやってみてからのことだ」といい、さらに、「ここは、自分たちの新生活の起点であり、平和的改造運動の始まりである」と彼らの抱負を述べている²⁹⁸。

第3節 少年中国の創造にむけて

1 北京での惲代英と少年中国学会

惲代英が武昌から北京に来た1920年3月、「少中」の北京総部では、執行部主任に陳愚生が就任し、機関誌『少年中国』の編集委員会が再組織され、李大釗、黃日葵が正副の主任に就任した。

1920年1月より『少年世界』の発行も加わっており、2種類の機関誌の定期的発行は、北京の会員にとってかなり困難であった。基本的に原稿を会員からの出稿で構成する原則であったが、原稿が集まらず、発行が遅れ勝ちになった。定時発行を求める王光祈などヨーロッパの会員からの容赦ない非難に対し、北京会員の間に不満が生じた。惲の活動はこのような中で一石を投じる積極的影響を与えた。

彼が北京に来た日時は『惲代英年譜』によると3月（張羽・鉄鳳著『惲代英伝』では4月）である。惲が北京工読互助団第一組へ見学に来たという同組の傅彬然の証言があり²⁹⁹、同組は3月23日に解散しているため解散以前に来ていたとして、惲は3月半ば頃には北京に来ていたと考えられる。傅彬然によると、見学には来たが、すぐに帰り、再び来なかったという。惲は、北京に3ヶ月滞在し6月初めに武昌に帰った。

彼が北京に来たのは、中華大学附属中学校を卒業した互助社の3人の会員、林育南、沈光耀、鄭興煥の北京の上級学校受験に付き添い彼らの合格を見届けるとともに、北京の新思潮を学ぶためであった。滞在中、北京総部の常会に出席して会員と交友関係を結び、講演会にも参加し、当時の新しい思想や新知識を吸収している。

その間、「少中」の北京総部の活動に参加した。4月10日の北京の常会で、惲が少年中国学会叢書編訳部の専任担当者に推薦されると、執行部主任の陳愚生は早速、惲に『少年中国叢書』の発行計画の作成を依頼した³⁰⁰。惲はその依頼に応じて「致少年中国学会同人」と「致少年中国学会全体同志」の二編を発表した³⁰¹。

前者は、当時、会の重要な活動として位置づけられた『少年中国叢書』の素案と会員が内部で討論し研究するための研究題目を提案した。後者は、会の支柱であった王光祈が留学で指導部から抜け、国外に出かける会員が多く北京の会員の人数も少数となった中で、「少中」の会員に活動の目標と方法について意見を交換するために書かれた。

「少中」が、健全で互助的な社会活動団体となるために、自分たちは遅かれ早かれ仕事をする人となり、永遠に読書人のままではないので、社会の実際生活や社会の実際の改造運動を忘れてはならないと忠告している。彼自身は、読書人として終わるつもりはなかった。『少年世界』の停刊や会員の紹介など、「少中」の会務に具体的解決方法を提案した。

惲の北京訪問を待っていたかのように、北京の会員は「少中」の仕事に迎え入れたが、彼は「楊效春君の「非児童公育」に反論する」文章を書き、本格的な理論研究にも着手し始めていた。「致少年中国学会同人」で提示した広範な研究テーマを見ると、北京でマルクス主義の研究を開始していることが伺われる。多分この北京滞在中に商務印書館から尚志会叢書としてカウツキーの『エルフルト綱領解説』の翻訳を依頼されたのであろう³⁰²。北京の滞在中に、すでに「マルクス主義」の影響を受け始めていた劉仁静と革命

について論争し「流血による革命」を深く信奉する劉とこれを回避したい惲とは激しく対立した³⁰³。

北京滞在中に書き終えたと思われるのが、『少年中国』の第2巻第1期(1920年7月)と第3期(同9月)に連載された惲代英の長編論文「怎樣創造少年中国」である。これは、「致少年中国学会全体同志」に続いて会員の間少年中国の建設に向けての討論を巻き起こそうという意図のもとで書かれた。惲は、工読互助団の失敗問題を大胆に提起して、この運動を提唱した王光祈やこれに賛同した「新文化的人」の責任を突いた。さらに、旧社会の腐敗を批判し、それとの断絶を説く王光祈ら「少中」の主要会員の主張に対して、個人の生活問題を提起した。

要するに、青年が一人前になり、ある事業をしようと思えば、必ず、彼個人の生活問題を円満に解決しなければならない。ゆえに学力は十分に準備しなければならないし、準備がまだまだ十分になされていない前には、小さな不満は我慢し、よい方法を以て、この家庭社会の中を「委曲求全」即ち不満足だが我慢して丸く収めなければならない³⁰⁴。

惲は、更に、我々は生活のためにお金を稼ぐことと事をなすことを、二つにはっきり分けるべきであると断定した。生活は努力して求めなければならないので、旧職業界はどんな理想的な事業も行うことはできないけれども、その中に入らざるを得ないと主張した³⁰⁵。彼が提起した工読互助団問題と「生活問題」は、王光祈との間で論争問題となった。

2 少年中国の創造——実践と苦悩——

惲は6月19日の北京総部の常会に参加後、北京を立ち上海を回って武昌に帰郷した。利群書社の構想は、明らかに「少中」の新生活、小組織、工読互助団の構想から影響を受けたものである。北京や上海の工読互助団運動が失敗したことは、彼らの文化運動と新生活の試みには重大なマイナスの影響を与えなかった。むしろ、工読互助団の失敗を学んで自分たちの力に即した運動を造っていかうと考え、当初の共同生活の構想が退き、書社で働くメンバーを除き生活費は各自が負担した。

しかし、主に新思想の書籍を学生相手に販売する利群書社の運営は当然に極めて不振であった。その困難を打開するため惲らが再び構想したのは、郷村運動である。農村に小学校、小工場を建設し、それを自分たちの根拠地とし、新文化運動を展開するというビジョンである。10月「未来の夢」にその構想を発表した³⁰⁶。

惲の「未来の夢」は、意外にも陳独秀と張東蓀の社会主義論争の渦中に引き入れられた。陳独秀からは、その構想がユートピアの所産であり、フーリエのファランジュであるとの批判を受けた³⁰⁷。

さらに、惲は同志である北京の劉仁静から「農村での共同生活運動は賛成できない」と、痛烈な批判を受けた³⁰⁸。劉からの批判に対し、惲は「私の話は張東蓀君の意見に似ている。しかし、私はいささか違ったことを信じているのだ。私はもとより中国式的社会革命は信じないし、なおさら、中国式的温情資本主義も信じていない」と反論した³⁰⁹。さらに、当時北京にいた林育南や沈光耀からも「直覚に頼って不用意な議論をしている」と批判された³¹⁰。

この批判にもめげず、彼はこの頃、郷村運動に邁進していった。郷村運動を提起したその最中である11月に、安徽省立宣城第四師範学校へ赴任したが、これは、活動資金を捻出するためで、やむを得ぬ行動であった。

1921年1月末の冬休みの前に、ドイツの王光祈から手紙を受け取った³¹¹。12月10日付けのフランクフルトからの王の手紙は、先に発表した惲の論文「怎樣創造少年中国」に対し王が質した手紙である。王は、その中で、「旧職業界に入り、生活のためにお金を稼ぐことは手段で、自己の理想事業を行うことは目的である。二つは別物だ」という惲の主張、惲の「委曲求全(全体の利益のため一時譲歩する)」の処し方、工読互助団の失敗や家庭から脱離した青年に対する見方について惲に異論を提示し、自らの考えを述べている。

直ちに王に宛てて書いた返事には、孤立を深めていた惲の苦悩が表現されていた³¹²。彼が当時極度に苦しんでいた煩悶とは、「漂零の生活(流浪生活)をおくり、茫然自失」³¹³という苦痛を味わっている毎日から来るものであった。郷村事業の先頭に立ちたいと思いつつも、自分はそのから離れて運動資金捻出のため既存の職業世界に入らなければならないという葛藤である。

当時、彼は教育を自らの天職と考えながら、すでに教育実践自体に、失望と落胆を味わっていた。長く

はこういうことはやりたくないと言っていた³¹⁴。惲にとって、旧職業界(個々では師範学校の教員や学生をさす)が全くだめだということではない。旧職業界にはそれぞれ歴史があり、存在する意義があるが、自分が感じている苦悩は、自分の理想とする事業ができないことである。彼にとって、それができないなら自分の生存の意味がほとんどないに等しいことであった³¹⁵。又、批判を受けて郷村運動の未来に対し、焦燥感にとらわれていたのであろう。

惲は、郷村運動によって社会変革の力量を養成しようと考えていたが、一方で、「我々は生活のためにお金を稼ぎ、それによって理想の社会事業を行う」といい「委曲求全」の方法を主張していた。しかし、宣城第四師範での教育に失望し、他方では、郷村運動の失敗も見えてきていた。王光祈が、惲に「旧職業界へ入るといって、あなたは自分に対して無理をしているのではないか」と書いたのは、正確な指摘であった³¹⁶。惲にとって、それができないなら自分の生存の意味がほとんどないに等しいことであった³¹⁷。

王光祈は、惲と二人の見解の違う点として「委曲求全」を批判する。これは我々が最も反対することであるとと言い、過去の自らの苦痛に満ちた体験から、「他人に依存する生活は二度としたくない、旧職業界に入るくらいなら、靴修理工やパン職人になったほうがよい³¹⁸」と言う。

この王の手工業者的な労働観、個人主義的な生き方を惲は採らない。惲は、「手工業は機械工業により圧迫を受けており、靴修理工やパン職人になって、社会的な満足を得られないことをするほうが、自分には苦痛である³¹⁹」と答えている。

王の「自分がしたいことをし、自分が学びたいことを学び、自分がやりたいことをするべきである」という個人主義的な生き方に惲は反発する。それは「自分が清く正しければよい」と言う考え方であり、「私はただ、少年中国を創造すること、正当な生活世界を創造すべきことだけを知っている」と主張する³²⁰。

惲はさらに青年が直面している「職業」の問題についてとり上げ、在欧の会員等が将来の生活をどのように計画しているのかと、彼らの将来の「生活問題」を王に質した。惲のこの疑問を受けて、王光祈が在欧会員が提案し「少年中国学会会員終身志業調査」が実施された³²¹。

また、惲は、工読互助団の失敗に対して、王が終始「人の問題」であるといつて済ますその対応を批判している。王は自身の苦学の経験にこだわり、丈夫な手足があれば世界中どこでも生きていける、準備してくれる他人に頼ったから工読互助団は失敗したのでであると青年を批判した³²²。

惲も、当初王のように工読互助団の失敗が多少「人の問題」にあると思っていた。自分たちの利群書社も工読互助団に近い組織であるが、工読互助団の失敗に鑑み構成員は十分注意して選んだ。それは未熟な青年には指導と援助という精神的指導が欠かせないからである。だが、このような配慮をしても現実には団体生活を維持し続けるのは困難を極めた³²³。

惲はその経験から、青年の状況に対して、王とは異なる新たな見方を抱くにいたった。この問題の本質は、青年が経済的困難と圧迫を受けたということにあり、工読互助団が経営する都市型の手工業や商店経営は維持できないと、王に反論した³²⁴。青年たちが「能力不足」であり、失敗したのは彼らの「人の問題」ではなく、実は問題の本質は、都市での中小商業が経済圧迫を受けている点であったと主張した。

惲は王には経済的圧迫の視点が全くないと指摘した。自分たちは、いやというほど経済圧迫の苦しみを味わったと強調している³²⁵。彼らは後に、郷村運動に入っていくが、そこで体験したのは更なる経済的困難であった。後に林育南³²⁶は、郷村運動で黄岡県の農村に入り濬新小学を運営した唐際盛の奮闘を、その死を悼む文章の中で次のように回顧している。

彼は惨憺たる経営でもって、旧社会の悪勢力と闘い、奮闘し、一切の艱難辛苦を味わった。教学と訓育のほかに、学生と共同の仕事——耕作、種まき、道路を開き、水汲み、飯炊きなどをして働いた。ある年、凶作で米がなくなり、毎日2回の粥を食べた、毎回それも2碗だけ、ある日、米がなくなり、とうとう全校の学生が2つのテーブルに小豆1碗ときゅうり1本しかなかった³²⁷。

惲代英が王光祈に対し批判した点は、王が現実の中国社会に対して経済的視点を持たないことであり、王光祈の持つこの弱点は看過するわけにはいかないと指摘した³²⁸。王光祈の抱く手工業者的イメージや人間像に既に違和感を持ち始めていたことがわかる³²⁹。

惲のこの批判は、直接には、王光祈に対し向けられたが、自分は「局外の人」として青年に対応する新文化運動の知識人のあり方を批判しているのである。工読互助団の失敗をめぐる議論の中で、青年を救国運動の担い手として「善勢力に養成していく」という責任を自らに課して理想を実践してきた惲ならでは問題提起であったといえる。しかし、「自分たちが中国の救星となる勢力」とみなしてきた彼は、自らの力量の弱体さを痛感して、行くべき道を探求し焦慮していたのである。

おわりに

新文化運動期の少年中国学会の歴史的な位置付けを探る一つとして、この時期の惲代英と少年中国学会の関係を取りあげた。入会を期に、自らの描く理想社会建設へ向けて前進を遂げることでできた惲にとって、この時期の「少中」における組織活動は、彼に大きな飛躍をもたらしたと著者は考える。砂山は惲の「少中」における組織活動の努力を肯定していない。しかし、惲がこの時期自分たちの道を「少中」の仲間とともに切り開こうとしたその意義は大きい。彼らの活動の舞台となった「少中」の積極的評価を行う所以である。

しかし、他の会員は、惲が「少年中国創造」の実践に熱心に取り組んだほどには社会運動の実践には取り組まなかった。社会運動に取り組む惲は「少中」の青年知識人の中では異色であった。

当時、多くの会員は、本国の中国よりむしろ新知識を求めて外国留学に急ぎ、海外留学会員の総数は半数を占めた³³⁰。王光祈がこのことを誇ったのに対し、惲は批判的であった。彼によると、郷村運動を提起した目的の一つに、青年たちがやたらと上級学校や海外留学に走ろうとする虚栄心から彼らを守りたいという意図があったという³³¹。

彼の実践を、空想的社会主義又はアナーキズムの実践であるという結論だけで終わりにすることはできない。彼の社会改革を目指す実践運動は、中国の現実に正面から関わったものである。「自助助人」による修養で人格を完成した個人からなる「善勢力」が社会形成の担い手であるという主張は、言い換えれば社会の各層から中国近代の担い手をつくる事業であった。

社会の各層から社会改革の担い手を生み出すということは、そこから、個人を主権者として育てていこうとすることである。そのために彼は当時手に入れることのできる新理論を取り入れて行ったのである。そこにおいて、アナーキズムがあり、また空想的社会主義などもあったが、なによりも彼は「自由・平等・博愛・互助」を奉じる強烈な民主主義者であった。そうした思想的雰囲気の中で、武昌時代の惲の仲間からは、多彩な人材が輩出されていることに注目したい³³²。

五四運動後、後期新文化運動時期の多様な可能性を包摂していたのが少年中国運動であり、惲代英はその一つを代表していた。その史実を掘り起こしてこそ歴史の真実が表れてくると考える。

同時期の青年運動の中でも惲代英の実践は、新思想を貪欲に取り入れながら中国の現実の中で自らの頭と足で進路を切り開こうとした。それは結果的に常に失敗を重ねたが、時代の変化に敏感に呼応して、自己変革を続けている点が極めて特徴的である。

王光祈との論争から導くことのできるのは、知識青年の分化である。知識階層出身の個人主義・自由主義的な会員の間において社会運動・革命運動に参加していく会員と学術研究に進路を求める会員との思想的対立が、現れていることを窺うことができる。

註

²⁴³ 惲代英の生涯については、山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、1995年の「惲代英」（砂山幸雄）を参照。惲は、1895年、辛亥革命の発祥の地である湖北省武昌の読書人家庭に生まれた。辛亥革命時期の混乱を体験するのは、16歳ごろである。母校の中華大学付属中学校教員の出身で、少年中国学会の有力会員となり、やがて、中国共産党に入党。『中国青年』の編集や国民党の宣伝部で活躍した中国共産党初期の著名な指導者である。第1次国共内戦期、の1931年に国民政府に殺害された。

²⁴⁴ 「致若愚（王光祈君）信」、前掲『日記』（1919年9月9日、621—625頁）。『惲代英文集』上巻（106—110頁）にも掲載されている。

²⁴⁵ 前掲『惲代英年譜』（149頁）。

²⁴⁶ 発起者7人（雷宝菁は1918年東京で死亡）から1920年当時は、会員7、80数名までに達していた。

²⁴⁷ 武漢の五四運動については、田子渝『武漢五四運動史』と後藤延子「惲代英と武漢五四運動」『近きに在りて』第43号、2003年を参照。

²⁴⁸ 惲は、論文「一国善勢力の養成」を書いている。『青年進歩』第16冊、1918年10月（未見）。後藤延子「惲代英の五四時期の思想—日記を中心に—（二）」『信州大学人文科学論集』第29号、1995年、19—21頁。

²⁴⁹ 後藤延子、同上「惲代英の五四時期の思想—日記を中心に—（二）」19—21頁。

²⁵⁰ 「万惡之原（一）」雑誌『新潮』第1巻第1号、1919年1月1日、124—125頁。傅斯年は「善」とは何からくるのか」と問い、「善」は「個性」から生まれるものである」と言う。傅斯年はこの文章では、万惡のもとが「個性」

- を破壊するもの即ち中国の家庭であると告発している。
- 251 「什麼是善」初出は、1919年4月26・27日『晨报』、『王光祈文集』第4巻、『五四時期的社团』(二)、143頁。
- 252 『回憶惲代英』人民出版社、1982年、244頁。
- 253 毛沢東は1919年12月から20年1月の間に入会した。『少年中国』第1巻第8期。彼が湖南省長沙で1920年9月に成立させた書店の文化書社や自修大学の試みも同様の新文化運動の一環であり、「少中」の社会運動に連なるとみるべきである。湖南・湖北の両湖地方の密接な関係に注意したい。
- 254 王光祈「致代英兄」(1920年12月10日記)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11号、1921年5月。
- 255 惲代英「致王光祈」(1921年1月)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、1921年6月、『惲代英文集』上巻、305—315頁。
- 256 「会員通訊」(1921年6月15日)『少年中国』第2巻第12期。舒新城はその回想記の中で、当時の惲に対する印象を「少年中国創造の苦行僧のようであった」と表現していた。前掲『回憶惲代英』244頁。
- 257 王は、執行部主任を任期半ばで辞任し海外留学に出た。これと同じ行動の例はすでにあり、発起者の曾琦も「少中」正式発足直後に、評議部主任を辞任しフランスへ行った。
- 258 「為少年中国学会同人進一解」(1922年6月)『少年中国』第3巻第11期。『惲代英文集』上巻、326頁。
- 259 李良明・鐘德濤主編『惲代英年譜』華中師範大学出版社、2005年。後藤延子「惲代英の出発——五四前夜の思想——」『信州大学人文科学論集』第16号(1982年)、「惲代英の五四時期の思想一日記を中心に——(一)」同上第28号(1994年)、「惲代英の五四時期の思想一日記を中心に——(二)」同上、第29号(1995年)、「惲代英と武漢五四運動」『近きに在りて』第43号(2003年)、砂山幸雄『『五四』の青年像——惲代英とアナキズム——』『アジア研究』第35巻第2号(1989年)、狭間直樹「五四運動の精神的な前提——惲代英のアナキズムの時代性——」『東方学報』第61冊、1989年。
- 260 前掲小野論文4頁。
- 261 少年中国学会については、共産党員と青年党員との間で、イデオロギー対立が終始したという過少の「評価」がされてきた。しかし、実は、国家主義の会内における台頭は、1923年の冬、南京分会が新国家主義を教育上の努力目標として用いることを決議して以後であると、舒新城は指摘している。舒新城「回憶惲代英同志」前掲『回憶惲代英』247頁。
- 262 「五四運動前後の王光祈」、『花園大学研究紀要』22号(1990年)等があり、『青春群像——辛亥革命から五四運動へ——』汲古書院、2012年に所収。
- 263 前掲後藤論文「惲代英の出発」3頁。
- 264 前掲砂山論文37—38頁。
- 265 「少年中国学会的問題」『少年中国』第2巻第7期、1921年1月。
- 266 砂山は、「学会は、王光祈の「兼容併包」の方針により、英米式民主主義、ロシア式社会主義、アナキストなどの多様な思想傾向を持つ若い知識人を「科学的精神に基づき、社会活動を行い、『少年中国』を創造する」という極めて空漠たるスローガンの下に結合しようとしたものであったが、なんら実際の活動を行うことなく、1921年の南京大会における国家主義派と共産主義派の対立以降、専らイデオロギー闘争の場と化しただけであった」という李義彬の「少中」評価を引用している。李義彬「少年中国学会内部的闘争」(『近代史研究』1980年第2期)。この点に砂山の議論に不十分さがあると考えられる。
- 267 徐則浩「惲代英在安徽」。前掲『惲代英學術討論會論文集1985』(289—303頁)。
- 268 同上。
- 269 劉仁静については、前掲山田辰雄編『近代中国人名辞典』の「劉仁静」の項(砂山幸雄)参照。惲は、『日記』(1917年11月1日、174頁)で、劉が将来有望な人材であると期待している。北大学生事件については、小野信爾「劳工神聖の麵麩——民国八年秋・北京の思想状況——」『東方学報』第61冊(1989年)。
- 270 前掲「致若愚(王光祈君)信」。
- 271 当時の惲の通信のネットワークには、キリスト教青年会、雑誌投稿関係、少年中国学会などを通じた、李飛生(清華学校学生)、楊賢江、沈沢民、舒新城、蔣錫昌らの友人が含まれている。
- 272 前掲『惲代英文集』上、69—75頁。
- 273 前掲「致若愚(王光祈君)信」(1919年年9月9日)。
- 274 王光祈へ手紙を書いてまもなく、『日記』(1919年9月26日)に「覚悟」という文章を書いている。「自分たちこそ、唯一頼れる中国の救星である」ことを自覚したといい、その自覚の深刻さを、「ただ知識として知っているだけではなく、感覚で実感し、まるで実際にそれが見えるようにわかるからだ。それ故に覚悟したというのだ」という表現で強調している。
- 275 王のこの会務のための旅行については、王光祈「会務紀聞」『少年中国』第1巻第6期(1919年12月)。
- 276 前掲『王光祈文集』第4巻「動的訓練」(505—509頁)。
- 277 講演の日時は、10月27日であるが、『日記』は1919年10月26日付に書いている。たぶん余白の部分に、後日、記入したのであろう。
- 278 「会務報告」欄『少年中国』第1巻第12期、1920年6月。
- 279 実は劉仁静は、惲代英を王光祈に紹介した時、魏希葛(中華大学附属中学第3班の学生で互助社の会員であった)

- も王に紹介していたが、魏はまだ中学生で入会していない。
- 280 「少年中国学会消息」『少年中国』第4巻第11期、1924年3月。
- 281 「会員通訊」(左舜生から曾琦らへの手紙)(1919年11月22日)『少年中国』第1巻第7期、1920年1月。
- 282 「会員通訊」(1920年2月5日)「少年中国」第1巻第11期。『新声』半月刊は、林育南らの新声社の機関誌で、胡適が『新青年』6巻3号(1919年5月)で紹介していたので曾琦も読んでいたであろう。12月21日の『日記』では、互助社の会議で『新声』を社刊にすることを決定している。さらに、前掲の『憚代英年譜』では、上の曾琦の手紙を挙げて、曾琦が王光祈に憚を「少中」の会務に抜擢するように推薦したと記している(1920年2月5日項、166頁)。憚が翌年3月、上京し、直ちに会務に就いたこと背景としてこのような曾琦の配慮があったことが推察される。
- 283 『新青年』第6巻第3号(1919年5月)。
- 284 前掲『憚代英年譜』1920年2月5日の項目、166頁)
- 285 憚は、「五四運動が中国革命の好機会であったが、残念なことに民衆のために働く人が少なく、無連絡だったうえ、勇敢でなかったため、みすみす機会を失った」と常に言っていた。「致胡業裕」前掲『憚代英文集』上、246頁。
- 286 『日記』「1919年12月17日」(676頁)。
- 287 前掲『憚代英年譜』1920年1月(165頁)。
- 288 前掲『憚代英文集』上、(111頁—116頁)。
- 289 『憚代英日記』「1919年9月28日」(634頁)。寝たきりの障害者であった弟の子癆の容態が悪化していたが、この日、死去した。享年22歳。
- 290 憚代英「駁不孝有三無后為大」、前掲『文集』上、111—116頁。
- 291 「我們与中国的前途『日記』「1919年9月27日」(632—634頁)。『亡国奴之日記』や『亡国稗史』を買い読んだことも救国の任を痛感させたと思われる。『日記』「1919年8月14日」(604頁)。
- 292 「我們的新生活」は、「共同生活的社会義務」と改題されて、翌年1920年1月22日『時事新報』副刊『学灯』に紹介された。前掲『憚代英文集』上(117—122頁)。「共同生活的社会義務」は、利群書社の成立宣言であった。
- 293 『日記』「1919年12月18日」(676—677頁)。
- 294 武昌工学互助団(または、武昌工読互助団)は、1920年3月20日に武昌文華公書林で成立大会を開いた。前掲『五四時期的社団』(二)473—474頁。前掲『武漢五四運動史』「大事記」、(292頁)。
- 295 「備読生活の順次普及」『日記』(1917年3月21日)、53頁。備読主義とは、雑誌投稿や学校で教えて、その収入で書籍を購入し、家庭の負担を減らす「苦学」のことである。将来の経済的自立のための準備でもと考えて、友人たちにも勧め、広がっていた。前掲後藤論文「憚代英と武漢五四運動」、82頁。
- 296 『日記』「1919年12月16日」、676頁。
- 297 長沙の文化書社は、憚代英らの信用紹介で書店の保証金が免除された。文化書社の経理担当の易礼容は、利群書社の社員でもあった。前掲『五四時期的社団』(一)、53頁
- 298 憚代英「致宗白華」(1920年2月23日)『憚代英文集』上巻、124頁。
- 299 傅彬然「憶北京工読互助団」前掲『五四時期的社団』(二)、493頁。
- 300 叢書編訳部は規約上の組織で、1920年3月の北京常会で、「少年中国学会叢書編訳部簡章」が作成された。前掲『少年中国』第1期第10期、1920年4月。4月10日の常会で憚代英が執行部より叢書編訳部の専任担当に推薦され就任した。『少年中国』「会員通訊」、第1巻第11期、1920年5月。
- 301 憚代英「致少年中国学会同人」(1920年4月22日)『少年中国』「会員通訊」、第1巻第11期、1920年5月『憚代英文集』上、138—141頁。「致少年中国学会全体同志」(1920年4月22日)『少年中国』「会員通訊」第1巻第11期、1920年5月。『憚代英文集』上、141—149頁。
- 302 カウツキー『エルフルト綱領解説』は当初、商務印書館の企画であったが中止となり、『階級争闘』の題名で『新青年叢書』第8冊として新青年社から1921年1月に出版された。
- 303 「致胡業裕」(1920年10月)で、劉仁静との間にあった思想上の対立について触れている。前掲『憚代英文集』上、246頁。
- 304 憚「怎樣創造少年中国」『少年中国』第2巻第3期、1920年9月。前掲『憚代英文集』上、213頁。
- 305 同上219頁。
- 306 憚「未来之夢」(1922年10月)、前掲『憚代英文集』上巻(228—245頁)。
- 307 「社会主義に関する討論(九) 東蓀先生再び頌華兄へ答える」と「社会主義に関する討論(十三) 陳独秀先生の東蓀先生への返信」新青年社編集部『社会主義討論集』(1922年)。この中で、憚の「未来之夢」がとり上げられた。
- 308 劉仁静「致代英」(1920年12月2日)『少年中国』「会員通訊」第2巻第9期、1921年3月。
- 309 憚代英「致劉仁静」(1920年12月21日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第9期。または、前掲『憚代英文集』上巻、257—263頁。
- 310 同上。
- 311 王光祈「致代英」(1920年12月10日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11期、1921年5月。
- 312 憚代英「致王光祈」『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、前掲『文集』上、305—315頁。この手紙には日付が書いていないが、1921年1月、冬休み前の憚が宣城師範学校で書いたとおもわれる。というのは、彼は冬休みに

-
- 入ると武昌に帰り、林育南や唐際盛らと黄冈の濬新小学校の再建を行った。農村の教育と実業を振興し、彼らの生活の基地を建設しようとしていた。
- 313 自分自身が「茫然自失」の状態に陥っているという表現は、王光祈への手紙のなかの「一刹那的感想(一瞬の思い)」という詩の中の表現である。
- 314 惲代英「致王光祈」(1920年12月10日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期。惲のこのような表現を読んで、徐論文が、惲の安徽省宣城滞在時期を、教育救国論から教育問題と全社会問題の根本改造とを結合する考えへの転換期と論じる所以であろう。しかし、惲は1921年6月8日に起こった王占元乱兵の反乱により焼失した利群書社の借財を負って、10月には再び四川省瀘県の四川省立川南師範学校へ赴任した。惲の安徽省宣城滞在時期はなお郷村運動に活路を見出そうとしていた時期であり、徐の解釈には無理がある筆者は考える。
- 315 惲代英「致王光祈」『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期。
- 316 王光祈「致代英兄」(1920年12月10日)「会員通訊」、『少年中国』第2巻第11期、61頁。
- 317 惲代英「致王光祈」『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、1921年6月。
- 318 王光祈「致代英兄」(1920年12月10日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11期、1921年5月。
- 319 惲代英「致王光祈」(1921年1月)。『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、1921年6月。
- 320 王光祈「致代英兄」(1920年12月10日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11期、1921年5月。
- 321 この調査表の質問項目は、「一生の研究学術のテーマ、従事する事業、その地点、各人の生活維持方法」であった。「終身志業調査表」前掲『五四時期的社団』(一)420—435頁。
- 322 王光祈「致代英兄」(1920年12月10日)、『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11期、1921年5月。
- 323 惲代英「致王光祈」『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、1921年6月。
- 324 同上。
- 325 同上。
- 326 林育南(1898—1931) 傅斯年とともに武漢の新文化運動、社会運動を創始した。中国共産党初期の指導者で、労働運動に従事した。山田辰雄編『近代中国人名辞典』「林育南」(中村楼蘭)の項参照『少年中国』第2巻第12期。
- 327 林育南「悼唐際盛同志」『中国青年』第6巻第1号(126期)、1926年。
- 328 惲代英「致王光祈」『少年中国』「会員通訊」、第2巻第12期、1921年6月。
- 329 王光祈は先の「終身志業調査票」の「将来終身維持生活之方法」の項目に対して、手工芸及び教育と回答していた。
- 330 王光祈「致代英兄」(1921年3月12日)、『少年中国』「会員通訊」、第2巻第11期、1921年5月。
- 331 惲代英「致劉仁静」(1920年12月21日)『少年中国』「会員通訊」、第2巻第9期、1921年3月。
- 332 たとえば、陳啓天、余家菊が挙げられる。彼らは、武昌の私立中華大学で惲代英とともに学び、卒業後は、同じく中華大学附属中学校の教員になり、ともに辞職した。少年中国学会会員で、少年中国学会の指導者であった。二人は、新国家主義教育を主張、後に青年党の領袖となった。惲代英の「少中」入会のきっかけを作った劉仁静は、共産党員で後にトロツキー派となって離脱した。惲代英の強い影響のもとにあった林育南・李求实は、共産党に入党し、初期労働運動に従事した。

終章

第1節 新文化運動の再考のために

本稿の主題は、中華民国初期、新文化運動の影響を受けて近代的個人主義を自覚し、思想的な革新をおこなった青年知識人の社会思想とその社会改革運動を探究することであった。青年知識人が中国社会の批判勢力として登場したのは新文化運動においてであった。そこで、序章において彼らを歴史的存在として位置づけるため彼らが活動を開始した新文化運動に触れ、最近の新文化運動研究の成果について論じた。

新文化運動と1919年5月4日に始まる反日愛国運動について、今日まで諸分野から行われた研究には、膨大な実績が蓄積されているが、そこには長期にわたり政治性の強い研究があったうえ、吉澤誠一郎の指摘するように「今なお非常に現実的意味合いを持った論争³³³」が止まない。しかも、新文化運動・五四運動は、その時期設定や基本概念などが、いまだ不明確なのである。先行研究の蓄積の量の多い割に、その概要をまとめることは困難であった。

近年の研究では、「社会」をキーワードにした新たな新文化運動研究が蓄積されてきた。しかし、中国における社会思想と社会改革運動の発展という本稿の主題には、これまで十分な関心が払われてこなかった。著者はこの主題に則して新文化運動期の文化と社会の変化を探ろうと試みた。

本論文の各論を総括する前に、著者が本論文の全体を通じて強調したいことを確認しておきたい。筆者はまず、新文化運動の基底には、現実の政治・社会・思想に対する鋭い批判と文化・思想の革新という二つの要素があるということを指摘した。従来の研究ではともすれば、いずれか一方に関心が傾きがちであったが、筆者は新文化運動研究においては、この二つの要素の一つがもし欠けるならば、全体を見落とすことになるであろうと考え、分析を進めた。

新文化運動をアヘン戦争以後から中国に起こった諸変化が生んだ文化転換期であると位置づけた耿雲志、新文化運動と戊戌変法時期に始まる啓蒙思想との関係を指摘していた日本の中国思想史研究、五四運動に政治的自覚の存在を見て国民としての主権者意識に注目した坂野良吉などの研究が、政治・社会的要素と文化・思想革新の二つの要素が関連しながら存在することを教えている。

この問題に関して先行研究から学んだことは、民国初期より開始された社会意識の形成、社会認識から社会批判、社会運動の展開までを見通そうとすると、新文化運動期の社会的責任心の帰趨が問題となる。そこで、本論文に於いては、この新文化運動期の社会的責任心から主権者意識の覚醒へ進む時期の探究の重要性を強調した。それは、坂野が指摘した五四運動から国民革命へ至る「過渡期」の重要性であり、この時期は、社会的覚醒から政治的覚醒への転換期として位置づけることができる、というのが筆者の見方である。

この時期の青年知識人の歴史的役割の問題と関わって、傅斯年が、第2次世界大戦中の1943年に、新文化運動を中国の近代の変革の中に位置づけている文章がある。新文化運動から国民革命への「過渡期」の時期のとらえ方において、坂野と傅斯年の見解には、アプローチにおいて共通点があるとみることができる。傅斯年は五四運動以後の時期を知識青年層が「軍閥政権を転覆させる」政治的役割を果たした時期としてとらえているからである。

新文化運動・五四運動で主導的役割を果たした傅斯年は、自らの「五四」観をほとんど語っていないが、1932年の「陳独秀案」と1943年及び1944年に書いた二つの「五四」に関する文章の中で、彼の新文化運動と五四運動に対する見方を示している³³⁴。彼の五四運動における学生評価は、「すでに役割を終えた運動である」と手厳しい。しかし、新文化運動については、次のように論じている³³⁵。

① 政治的覚醒について

新文化運動により自覚した青年学生が、それぞれ異なる政治的党派に属しながら全体として、五四運動後、民衆を啓蒙し、国民革命を遂行し、軍閥勢力である北京政府を倒して中華民国国民政府を成立させた。青年に現れた新しい傾向は、さまざまな思想動向として出現したが、ひとまず国民革命に結集した。青年の次の役割は政治変革だけではなく、社会改革、文化運動などの変革を担うことである。

② 社会変革について

新文化運動時期、陳独秀らが倫理革命を提唱した背景には、中国の旧社会勢力（官僚、学究、方士）との厳しい対決があった。陳らの文化運動には、強烈な危機意識があり、急進的思想であった³³⁶。新文化運動の基底には、社会改革の意思が当初より存在し、それが五四運動を期に、社会改造運動として出現した。

③ 思想革新について

1919年後半から1920年の時期における思想革命は、中国の社会問題の重視に向かい、社会運動への転換を推進し、下からの変革が唱えられるに至った。新文化運動は、1920年代中期の革命運動に、思想と人材を準備した³³⁷。文学革命、倫理改革、社会主義というこの三つの運動は1916年から1922、23年までの時期の最大の思想的原動力である。この思想的な原動力がなかったら、青年の傾向は変えられなかった。青年の傾向が変えられなかったら、国民党の改組と国民革命軍運動の成就もみなその前提を失っていた³³⁸。

④ 文化建設について

新文化運動において提唱され、現在も残されている課題は「民主と科学」である。

傅斯年是、この時(1943年5月)意識的に「民主」の成就には触れていないが、傅の考えの背景には、彼のもつ革命観があった。彼は、本来の革命は単なる政治改変ではなくて一切の政治的・思想的・社会的・文芸的な総合的な改革であると考えていたことがわかる³³⁹。

彼は、1916年から1922・23年までを一連の時期と捉え、新文化運動を含めて五四運動の該当期と考えていた。この時期の基本的な流れは、軍閥政治を終わらせて中央政府による中国統一の強化に向かう過程であったと見たのである。そこで果たした知識青年層の歴史的役割を評価しながらも、その役割を歴史的条件下での限定的な役割としてとらえているのが傅の主張の特徴である。

傅斯年のこうした観点は1910～20年代を民衆史・社会運動史の立場から捉えなおそうとする坂野良吉、並木頼寿の研究とも接点を持っているが、新文化運動研究では十分に検討されては来なかった。しかし、新文化運動を研究する場合にも見落としてはならない視点である。そこで、筆者は、青年知識人が主権者としての意識を確立する上で、必須の条件となった社会的責任心の問題に着目したのである。

第2節 青年知識人の社会観

1 傅斯年の社会論

第一部、第二部で具体的な分析対象としたのは傅斯年、王光祈、恽代英であった。これまで述べてきたことを踏まえて、彼らの思想と彼らが取り組んだ運動のもつ意義を概括すると、彼らの思想は、清末から辛亥革命時期の啓蒙思想を継承しつつ、中国国内の自生的な社会力の養成を目指したものであった。その全体的特徴は、個人主義であるとともに、中国社会への関心を背景に個人と社会の関係に焦点がおかれていた。

新文化運動時期に形成された傅の思想には、社会の自生的発展に注目した社会進化論・社会有機体論的特徴のあることが指摘される。社会進化論・社会有機体論の中国に与えた影響は、今日においても、強力に存在しているように筆者には感じられる。

さて、第1部でとりあげたように、新文化運動は、清末から辛亥革命の時期と異なり現実の政治過程とのかかわりを拒否し、個人と社会の関係の中に問題を発見しようとした。この点において前代との違いが明白であるが、それは近代的な自我に目覚めた青年知識人を生みだした結果、実現したのである。その一人である傅斯年は、彼の仲間とともに新文化運動を中国の伝統学術批判と中国社会批判へ進展させた³⁴⁰。

傅の言う「社会的責任心」は、第1次世界大戦終結後、中国に入った社会思想に影響されて「現代」の時代精神を自由であると理解した。その自由の精神を「社会を以て家と為す」という内容で理解したことである。彼はこの「社会を以て家と為す」を西洋古代のギリシャ、ローマ人の精神が今日まで受け継がれてきた結果であるとみたが、彼が理解した自由の「神髄」とは、個人が家に帰属し、家に対して責任を負うように、社会に帰属意識をもって、接すべきであるというものであった。すなわち、傅の「社会的責任心」が、このように中国の「家」を比喻にして理解されたように、社会と自由の内容も、個人と家族・宗族の関係から理解する段階であったことが推察される。

傅は五四運動で民衆の中に「社会的責任心」を発見したが、やがて民衆に対する評価が早計であるとみなすようになり、早くも五四運動の中で出現した学生の群衆性へ厳しい批判を行った。当時の青年たちは、個人主義に目覚めたばかりであり、個性の主張は極めて激しい形となって表現されていた。五四運動後の学生の間に見られ「放恣」と評された「自由」を、傅斯年は、民衆の「群衆」性として捉えて、それを中国の伝統社会に残る専制政治の負の遺産からくるものであると解釈した³⁴¹。

傅斯年は彼の故郷山東省西北部の農村の実態を観察し、『新青年』にそのレポートを発表した。すでに山東省西北部の辺鄙な農村にも日本をはじめとする外国商品が入り込み、農村は経済的影響を受けて変化

していることを知った。さらに、軍閥政治がもたらした兵禍により農村が崩壊の危機にあると実感した。これに対して、山東省東部の沿岸地域では、その地理的位置からくる優位性により資本主義的発展の可能性も見届けている。

五四運動の体験を踏まえて、傅が自ら農村に出かけて行った農村観察は、彼の中国社会に対する見方を大きく変え、社会改革論を生み出した。中国の知識人が農村の実情について社会的関心を抱き、自ら観察し、農民の生活の改善に心を配ることは、歴史的に見ても画期的なことであった。

彼の主張は、中国の村落、小都市、大都市の間の互いの流通を促進し、それぞれの内部の集団も結合させることで有機的統一を持った中国を作り上げるという見通しを持った。このような「有機的統一を持った中国の建設」という考えは、当時広く共有されていた「社会有機体」論の発想から生み出したといえることができる。

そして、人びとを結合させる要素とみなしたのが、都市に形成される新しい市民道徳であり、科学的な文化であった。こうして、中国の将来に「曙光」を見出し、彼自身もヨーロッパ留学の道を進み、真理とみなした科学特に自然科学を学ぶ道を選択した。物理学や数学の研究に進んだのは、生物学の理論に依拠する進化論や社会有機体を奉じていた彼自身が自らに自然科学の知識とその論理法の欠けていることを痛感したからである³⁴²。

彼はあくまで、真理であると信奉する科学を学んだ個人にのみ信頼を寄せ、その個人の力による改革を優先した。「群衆運動」に対しては、その持つ勢力を一部では評価しながらも、「群衆運動」には危険性があり、社会改革には有効ではないと考えたのである。

傅斯年の中国社会に対する最後の提言は「無中生有的造社会(無から社会を作る)」という造社会論であった。彼が描いた中国の社会像は、現在の社会の無い状態から細かな新しい団結をつくり、この新しい団結の中で形成した社会的倫理を以て散漫な中華民国を粘着させることであった。

枠組みだけあって、中は空っぽな現在の中国社会を強固で充実したものに造り上げ国民の大組織にすること、国際社会において諸国と対等・友好的な関係をつくる事業の責任と任務を受け持つのは青年であると、中国国内の青年たちに呼びかけた。この「無から有を生む」という「造社会」論は、理念を明示したもので、政治理論ではなかった。青年はそれに導かれて進むが、実際は自らの進路を自ら発見し、つかみ取らなければならなかった。

傅斯年自らは学術・教育・文化活動の進路に進み「教書匠(教師)」となることを自らの職業選択としていた。彼は、ロシアのナロードニキの道を探らず、中国の変革の場を農村ではなく、都市に求め、Society「社会」の建設を願ったのである³⁴³。このように傅斯年の主張をたどると、中華民国の社会の変容に敏感に反応しながら、自らの理論を樹立しようとしたことがわかる³⁴⁴。

主唱者の傅斯年がいかなる進路を選択したかにかかわらず、「造社会」論は、当時の青年層に大きな影響を与えた。以後、青年の社会改革運動の方向を指示し、彼らは、多様な道を創造していったのである。

2 王光祈の社会論

一方、同時期に王光祈は、傅斯年と同じく社会改革の必要性を自覚し、五四運動直後、知識青年の社団「少年中国学会」を組織し、少年中国の創造と運動に情熱を注いだ。彼は新文化運動の影響を受け、辛亥革命時期の国家主義を否定し、政治活動によらず教育と実業による社会の改革を目指した。

王光祈の社会運動論の特徴には、「予備功夫」論がある。中国人ははまだ「人」となるべき性格と習慣を全く持っていないが、彼らを「人とする訓練」の過程を経て社会生活に適応させて将来「人」にすることができると考えた。彼ら少年中国学会の任務は、将来の理想の「少年中国」建設のための準備段階においてこの「予備功夫」に従事することであると考えたのである。

このように王光祈は、傅斯年の「群衆」論と同じく、中国の民衆をいまだ近代社会の構成員と見てはいない。「予備功夫」の段階にある現在は、実業面では農業と手工業を重視し、将来の国家像としては、農業に基礎を置く社会主義社会を展望した。世界には、知識階級・労働階級・資産階級の3つの階級があり、階級間を接近させて理想社会を実現することを考えた。

こうした、社会に対する空想的イメージや彼の中国で抱いていたという「観念」が壊されるのが、1920年のヨーロッパ留学である。強力な政府とこれと対抗する労働者の姿に西洋社会の激しい階級間の闘争を見、続いて社会の基礎が堅固な西欧社会の実像に触れる中で王光祈は次第に自らの社会認識を深めていった。

彼は「互助論」の影響を受けて、1920年に「分業」が社会を成立させていると考え、「互助」と「分業」

をセットし、この二つによって社会を構成できると考えた³⁴⁵。王光祈は、傅斯年の「中国は無社会の国である」という主張を意識して、「無社会の国であるなら、中国では互助は問題にならないではないか」と反論している³⁴⁶。「ヨーロッパ人の社会は表面上では非常に団結し強固に見えるが、内部では個人と個人の間は冷酷無常で、個人の利己主義により関係を結んでいる」という。中国人が必要とする互助とは、その基礎が道徳に立つものでなければならぬと論じている。彼が言う「利己主義」とは、西洋市民社会の基礎にある資本主義的経済関係を指していることが理解される。

そこで、中国は、資本主義経済から成る西洋社会とは相違し、「個人が利益を介して形成する社会」ではないので、逆に修養によって道徳を積んだ「人」が互いに助け合う社会をつくることができると考えた。王光祈の社会論は、社会は道徳と文化でもって結合していると考えていることがわかる。

造社会論を唱え、社会主義を未来に見据え、社会道徳と科学的知識を以て市民社会を建設することを展望した傅斯年と王光祈は、当時においては、同じような社会像を共有していたということが出来る。彼らはともに、社会有機体的存在である社会を考え、その社会の基礎は道徳と文化であると考えた。それ故、彼ら二人は、学術研究の道を選択したのである。

3 青年知識人の社会思想の特徴

傅斯年の「造国論」、王光祈の「少年中国の建設」の事業は、ともに「青年以外の中国人には頼れない」と主張した。しかし、傅斯年は、青年の現状に危機意識を持っていた³⁴⁷。そこで、「社会は個人が創るものである。個人の内心こそ一つの社会である。故に、社会を改造する方法は、第一歩は自己を改造することである」と、「個人主義」を強調した³⁴⁸。

傅斯年は、儒学が中国に長く続いた専制の思想的支柱であるとして批判した。中国古代政治思想の根本思想である「修身齐家治国平天下」や孟子の民本主義を批判した³⁴⁹。家族制度を「万惡之原」と激しく批判したが、それは彼自身の痛切な体験からくるものであった³⁵⁰。

これに対し王光祈は、「修身齐家治国平天下」の改革順序は、「古今東西みなかくのごとくならざるものはない真理である」と考えていた³⁵¹。王光祈の思想の根底には明清の理学があった。彼が社会改革の理論に援用したいいわゆる「功夫」は、本来士大夫の聖人に至る長期間の精進を意味していた。少年中国学会の会員の中に共通する個人の「奮闘、実践、堅忍、儉朴」の精神は、本来中国士大夫の間に伝わる個人主義的要素の流れを汲むものである。

傅斯年は、留学中の王光祈に対する印象を語っているが、王光祈が他者の資金に頼らず自らの労働で困難な留學生活を耐え抜いてきたことに敬意を表している。王の苦闘が、あらゆる困難があるにもかかわらず、西洋科学を学んで中国を近代国家として新しく建設するためにヨーロッパへ出かけていった当時の中国の青年たちの志の表れとみなした。王の異国での死は、中世の修道士のもっとも光榮ある死であると讃えている³⁵²。ヨーロッパで苦しい留學生活を送った体験を共有する傅斯年は、王光祈の死に同時代の青年の共通の心性と理想像を見たのである。

伝統社会から飛び出してきたばかりの青年である傅と王の「個人主義」には、旧社会の士大夫の間に引き継がれてきた人格の特徴が極めて強く刻印されていた。しかし、新文化運動期に新思想を受容した彼らの個人主義は、伝統社会の家族制度・宗族との対決から生まれたものであり、その誕生当初から、社会的性格を強く有していた。彼らが個人主義を主張すれば、必然的に社会批判へ導くことになった。

青年知識人の個人主義のもった意味を考えるにあたって、当時の中国における思想状況を考えるべきである。傅斯年の次のような指摘も参考になると考える。

近代の思想には、個性的思想と社会的思想の2種類がある。数世紀前は個性の発展で、この数十年は社会性の発展である。中国人は今この時期において当然、最近の傾向に入らざるを得ない。しかし、前の時代の個性の発展も我々は求めなければならない。個性が十分発達する段階を経なければ、文化上必ず無味乾燥なものとなる。しかも突然、社会性に転じると、文化上基礎が脆弱である。故に、中国の今後の思想運動は両方から同時に進めていかなければならない。文化の発展は、全面的に、大胆に考え、よく考え、自由に考えることである³⁵³。

傅斯年は、今は、社会についてだけでなく、個性を重視するべき時であると述べている。民国初期の新文化運動期は、傅斯年も言うように、個人主義に目覚めたばかりの段階であった。その芽生えたばかりの幼い個人主義の段階へ社会思想が流入して来たのである。

新文化運動期の個の覚醒を通じて成長した青年知識人は、個性的な存在であった。この時代は、個の自覚を基に青年や勤労者をはじめとした都市社会層が結集を開始した時期である。彼らは、社会運動から政治運動に展開する大状況の中で、個人主義を指針にして教育・文化・科学の諸運動に従事し、中国社会の近代化を推進していった。王光祈らの少年中国学会会員の個人主義は、当時の典型的表現であった。

恽代英も、既成の政治勢力に対して強い不満を持っていた。既成勢力は、数千年の誤った教育学説と風俗習慣によって伝授されてきた存在であるとみていた。恽代英が既成勢力として挙げたのが、南北の軍閥、新旧の議員、官僚と留学生、政客と学生連合会代表、国粹学者と新思想家である。彼は、政客と学生連合会代表に対して、彼らは騒動を起こすことを唯一の目的としていると批判し、又、国粹学者と新思想家は、目立ちたがりを信条としていると批判した。これらの勢力は、民国成立後台頭してきた勢力でもあり、政治的混乱の中にあって同じ穴のムジナであると見た。このような現実の勢力に対するトータルな批判は、当時の傅、王、恽の三人に共通する認識である。

第3節 社会運動の展開と分岐

傅斯年は、五四運動の中の学生に彼の言う「群衆」を見た。王光祈も「五四運動は失敗であった」と言い、恽代英も学生運動に不満であった。彼らはともに、五四運動に対する批判から、中国の社会改革を結合させて自らの進路を模索したのである。この時点において、三人は思想と現実批判で共通の立場に立っていた。

彼らの中国社会に対する批判的考察は、社会運動の興隆を導いていった。傅斯年は五四運動後、社会改革運動の時代に入ったと述べたが、この動きを中国近代思想史の角度からどのように考えればよいのか、本論文では少年中国学会とその指導者に着目しながら社会運動形成過程とその社会運動論を考察した。

1 少年中国学会の社会運動論

第2部で、少年中国学会の発起から成立までの経緯を論じているが、少年中国学会は法律によって承認された公認団体ではないが、その名のように青年知識人の結集する社団で、機関誌『少年中国』は、政府より発行許可を得ていた。それは、伝統的な「学会」から出発し、学術運動をめざすと同時に倫理主義的色彩のつよい組織であったが、五四運動を経てその宗旨を一変させ、「科学的精神に基づき、社会的活動を行い、少年中国をつくる」という極めて実践的課題を持つ社会運動団体に変身した。

少年中国学会の組織活動の中心を担ったのが王光祈であった。北京の私立中国大学出身であるが、北京大学の新文化運動に参加し有力なメンバーとなった。彼は平民教育講演団に、成立当初から参加した³⁵⁴。当時の北京大学の学生の様子を伝えている文章として、傅斯年の王光祈回想文がある³⁵⁵。それは、彼らの自由な雰囲気を生き生きと描き出している。

はじめて会ったのは、1918年で、北京大学図書館主任の李守常先生の部屋であった。李守常先生の部屋は、当時我々友人のクラブのようで、そこでは何でも話せた。ある日、王光祈先生と会い、彼はめったに笑わない厳粛な人だと思った。守常の部屋はいつも気楽な空気が漂っていたが、〔彼が入ると〕すぐに厳粛な空気になった。後に守常は私に言った：「光祈は思慮があり実行力もある青年で、志を持ち、国家主義にかたよらないし、梁任公をまねた文章をつくらない、君たちはいい友達になるよ」。以後、我々はしばしば往来し、互いに深く知り合い、王光祈が独立した性格を持ち仕事もしっかりできる人物であることを知った³⁵⁶。

当時の北京大学では、学生たちが大学を拠点に様々なサークル、ボランティア・グループを組織し大学内外に向けて活動を始めていた。傅斯年と王光祈はその活発な環境の中で「互いに深く知り合い」、文化と社会に対する認識を共有していたことが知られる。

王光祈は、五四運動では、出身地である成都の新聞の特派員の身分で北京の運動を刻々と成都に伝えた³⁵⁷。彼は、五四運動の激動のまだ続く1919年7月1日、少年中国学会を正式に成立させ、同月15日、『少年中国』創刊号を発行した。王光祈の勧誘の結果、北京大学の有力な学生生活活動家や地方の青年知識人が参加し、1919年後半には、全国に知られた青年団体となったのである。

五四運動後、少年中国学会に参加した新入の会員たちはそれぞれ「少年中国創造」の観念を異にしていた。そこで、王光祈は自らが考えた少年中国運動の理念を、「少年中国の精神」または「少年中国主義」

と表現し会の内外に提示し、組織活動を進めた。

王光祈は、当初、自分たちが創造する「少年中国」を「進歩的で非保守的、創造的で非因習的、国際社会では若い国家であり老国家ではない」と定義しているが、これは陳独秀が「警告青年」で青年に訴えた内容のヴァリエーションとしての「少年中国」の構想にほかならない。

士大夫層の結集の場として、中国の歴史では長い伝統を持つ「学会」は、新文化運動の思想的洗礼を受けて、王光祈たちによって自由主義を原則にし、既成勢力に頼らない、自主的で自由な関係を持つ組織へと再生されていた。少年中国学会は、会の運営においても、民主的な組織たろうとし、会員に支えられた財政上の独立を固く維持した。

しかし、自由主義的であることと、組織の民主的運営の可能性ということとは同じではない。少年中国学会では、組織運営上の民主的な制度化はなかなか進まなかった。組織活動や『少年中国』の編集と発行を王光祈一人に頼っていたことからくる王の専断的運営に対する不満が生まれた。その批判から規約改正が提案され、1921年の南京大会で康白情が規約に「民治」を挿入し、宗旨を「科学と民治の精神に基づき、社会活動を行い、少年中国を建設する」という修正案を提案した。しかし、結局、会員の同意を得るに至らなかった。このような会の運営上の混迷は、どこに原因があるのであろうか。

王光祈が創設時から苦心して提唱し続けた「各人の主義に関わらず、会の宗旨を団結の基礎とする」という方針は、内部の会員の思想と政治的立場の変化から崩れて行った。組織をどのように運営するかということは、民主主義の身近な実践である。利禄に群がる旧態依然とした政治活動を拒否した少年中国学会が、新文化運動期の個人主義を自分たちの組織の中に実行しようとした意図を筆者は評価するが、未熟な青年が個人主義を盲信した結果失敗したのである。それは、当時の青年知識人の社会的未熟さを示していた。

少年中国学会では、当初より「主義」の確立を目指しながら、結局、会員全体の総意に依拠した主義は最後まで決定できなかった。彼らが目指した「少年中国」の現実の像を明確にできなかったからである。王光祈がこの「主義」の語を使うとき、必ず「主義(或制度)」と付記していた。「主義」の選択は、彼らにとっては国家像の選択を意味していた。そして遂に、統一的な国家像の確立ができなかったのである。

当初、少年中国学会は、学術と人格形成を目指した伝統的色彩の濃い青年社団から出発して、社会改革を目指す団体となった。新文化運動の掲げる精神に忠実に、政治活動をしない、官吏にならない、政党関係者とは交わらないという規制を持ったその組織が、再び国家を論じる政治的団体に変化することは、創始者である王光祈にとって受け入れがたいことであった。

初期の少年中国学会が、組織を挙げて取り組んだ運動とし工読互助団の運動がある。これには、おもに会員外の青年男女が参加しており短期間で失敗した。この運動に対する組織的な反省がなされなかったことも、少年中国学会の発展にとって致命的であった。

当時、少年中国学会は、中国の社会改革の第一の担い手として期待されていた。社会運動が後に急進的な革命運動へ転換していく流れが生み出されたが、このことには、少年中国学会の社会活動の失敗が影響していると推測する。

2 惲代英の社会運動論

個人の奮闘と力量に頼るという王光祈の個人主義的態度を批判したのが、同じ少年中国学会の会員である惲代英であった。惲代英は、「善勢力の養成」という考えを抱いており、少年中国学会の掲げた宗旨に共鳴し、入会を契機に、武昌の青年たちと利群書社を結成し、青年たちと進歩的な書籍を販売する書店を共同経営して文化運動を開始した。

工読互助団をめぐる王光祈との論争を行い、自らの進路を模索した。学生を相手にした書店や小さな織物工場の創設に関わった惲代英は、その結果生じた赤字解消のため、自らは学生を連れて安徽省宣城の師範学校教員に赴任せざるを得なかった。彼は当時郷村運動の実践という目的を抱いていた。そのためには、「委曲求全(大局の利益のために譲歩するの意味)」をしないといけないと惲代英は自分に納得させていた。

これに対し王光祈は惲の言う委曲求全のやり方は、自らを押し殺した生き方であり、委曲求全こそ少年精神を磨滅してしまう鋭利な武器であると批判した。独立自主、自分の命を賭すように生きるという王光祈に対して、惲は、それは無責任なやり方であると批判した。惲は彼の同志である武漢の仲間と常に行動を共にしていたからである。

惲は、工読互助団を例に挙げて、王光祈が工読互助団を提唱しながら、自分は参加せず、しかも失敗したのは、団員の個人的責任であると言い放つことに抗議した。彼は、何より工読互助団の生活維持のやり

方がすでに経済的に成り立たないと論じ、現実の社会経済的変化を顧慮しない王光祈を批判した。王は、工読互助団の発想をその後 1926 年頃まで堅持していた³⁵⁸。

ところで、王汎森、王奇生は、新文化運動を推進した知識人の中に、個人主義思想と集団意識の二つの傾向が存在していたと指摘しているが、筆者は、新文化運動の基調はきわめて強い個人主義の主張であり、集団意識の形成は、1920 年代以降であると考えている。すなわち王光祈と恽代英の 1920 年から 21 年初頭の論争は、少年中国学会内部に個人主義思想を批判する集団意識の傾向が形成されてきている事実を示している。この集団意識とは、伝統社会からの遺物である「群衆」意識ではなく、個人主義を批判する社会思想であった。

又、恽代英たちの武昌グループは、元来が非常に個人主義的色彩を持ったグループであった。彼らの間で、思想的分離が進んで、恽代英を中心とするグループが形成された。彼らが次第に個人主義的発想から離脱し、集団意識を強めていく背景には、地域の保守勢力との間で生じた深刻な対立があった。さらに恽代英は、1920 年 10 月、自分たちの運動の根拠地を郷村に移す構想を「未来之夢」という文章で論じ、『互助』第 1 期に発表した時、陳独秀から厳しい批判を受け、北京に遊学していた年下の友人たちからも批判され、極めて厳しい状況に直面したのである。

しかし、傅斯年が選択した西洋学術研究の道ではなく、また、王光祈の徹底した個人主義の生き方でもなく、青年が社会の中で生きて行くための方策を求め、あえて「委曲求全」によっても運動の活路を見出そうと努力していたのが恽代英であった。その道が社会運動か、政治運動かはいまだ恽においては決定されていなかった。

王奇生は、新文化運動において、社会に対する観念、即ち社会的責任心をもっとも重要な観念となって以後、「社会改造」を目指す社会運動への転化が、速やかに進んで、やがて各種の社会主義思想が主流になったと、社会主義思想の影響が極めて速やかに浸透したかのごとく、時代の思想と運動の関連を指摘している³⁵⁹。しかし、如何に時代の「過渡期」であったとはいえ、青年知識人自身の歩んだその過程は、決して王奇生の言うように「速やかに」展開されたのではない。傅斯年の思想的遍歴、王光祈の留学にかける自立のための努力、恽代英の郷村運動での苦闘はともにその表れであり、三人の進路もそれぞれ異なっていたのである。

第 4 節 新文化運動の文化論と社会像

これまでの叙述で筆者は、新文化運動の基礎には、既成勢力への批判や中国社会の探求など社会の基本構造への関心が常に存在していたことを指摘した。本節では、彼らの文化論と社会像について述べ、まとめとしたい。

傅斯年は、新文化運動の文化上の意義について、蔡元培の「洪水与猛兽」論を引きつつ、旧文化への激しい批判活動を「洪水猛兽」に例えた。猛兽とは、軍閥を指し、洪水の後に残ったのは、肥沃な土で、猛兽はいなくなると、その果たした役割の本質を論じている³⁶⁰。傅は新文化運動が、「自由・平等・博愛」を掲げたフランス革命の急進的な要素と知識を求め、真理を求める啓蒙主義的な要素を持った運動であると見ていた。

しかし、彼の文化上の立場は、「文化積累」説である³⁶¹。そして当時盛んに唱えられていた国粹主義の反科学性を批判し、それが文化上の「中世期主義」として否定した³⁶²。文化史上からみた新文化運動期の中国について、ラナ・ミッターは、中央権力が弱体で、分裂状態にあったため、今日の段階からみると、自由な言論が存在可能であった時期と見ている。短い時期であったが新文化運動が可能となった事情について、ミッターが当時の政治的環境を指摘しているのは興味深い。

傅斯年が、新文化運動時期に中国社会の最後の成就として描いたイメージは、「国民の大組織³⁶³」の完成された姿であった。傅は、1935 年 12 月の『独立評論』に「中華民族是整個的」を書き³⁶⁴、「満州国」成立後の華北情勢、特に「華北自治運動」に警鐘をならした。その時、彼は強力に中華民族の団結を呼びかけた。すなわち、紀元前 221 年に政治的統一を完成して以後、異民族が侵入しても、南北が分裂しても、国内がいかに四分五裂しても中華民族の政治的統一は常に復活したといい、日本の侵略の危機に対する民族的団結を提唱した³⁶⁵。

さらに、1944 年には、戦後の国家建設へ提案を行っている。日中戦争の最後の段階に於いて、傅斯年のこのような論調を見ると、国際社会の中で中国の存立を守ることが、彼の当時の第一の課題であり、中国の一体化を如何に強固なものにするかが焦眉であったことがわかる。これらからみると、今日の中華人民共和国が到達した経済的軍事的大国家の出現は、傅斯年の社会進化論と社会有機体論の描いた国家像に近

いものであるかもしれない。

しかし、その一方で彼が新文化運動で強力に主張したのは市民の「社会的責任心」であった。王光祈が主張した民衆を教育と実業を通じて「人」に鍛えて国民に育てるという少年中国運動論、恽代英の善勢力の養成論は、ともに中国社会の中から生まれる民衆が社会的責任を自覚し、国民として中国を作り上げることを期待したものであった。それは、「啓蒙」の課題からさらに進んで、「社会的責任心」を共有する主権者としての国民の創出を課題としていたものであった。

註

- 333 吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに——」『思想』第1061号、2012年、147頁。
- 334 傅斯年が五四運動に関して書き残している文章は、「五四偶談」（1943年5月4日『中央日報』、『伝記文学』第14巻第5期、1969年）と「“五四”二十五年」（1944年5月4日重慶『大公報』星期版、『傅斯年全集』第4巻）の2編の文章だけである。そのほかに、1932年の陳独秀逮捕事件に際して書いた「陳独秀案」では、陳独秀と中国革命運動を論じ、特に陳と新文化運動・五四事件の関係を論じている。「陳独秀案」（『独立評論』第24号、1932年、『傅斯年全集』第4巻）。
- 335 傅斯年が「五四」という場合は、通常には五四学生運動を単独にさすが、思想文化の革新運動面に触れる場合は、新文化運動と表記している。
- 336 傅斯年は、陳独秀の文章「袁世凱復活」（『独秀文存』安徽人民出版社、1987年）から「袁氏の罪悪は、個人の罪悪であるばかりではない。彼はわが国の三種の旧社会を代表していた。それらは、官僚、学究、方士である」という箇所を引き、陳独秀が最も「反袁世凱」の立場にあったと指摘している。傅は、「袁世凱」という存在を特定の個人としてとらえず、その存在のもつ社会的意味を考察しようとした。前掲「陳独秀案」45頁。
- 337 前掲「五四偶談」90頁。
- 338 前掲傅斯年「陳独秀案」49頁。傅斯年は、陳が現実に生み出したこの事業を高く評価している。又、傅斯年が新文化運動の指導者陳独秀の思想の真骨頂と見たのは、陳の猛烈に透徹した自由主義であった。又、傅によると、陳自身の思想的源泉は、その精神は徹底してフランス革命の精神であり、決して軍国主義のプロシアではなかった。その自由主義ゆえに、陳は、コミンテルンの統率を受けいれなかった結果、コミンテルンによって異端とされたのであると言っている。前掲「陳独秀案」46頁。
- 339 この傅斯年の革命観には経済的視点が欠けていることを指摘せざるを得ない。彼がヨーロッパで学んだとされる学科は自然科学の諸学科と人文系学問で、経済学は入っていなかった。
- 340 彼らの運動の綱領的文章は、傅斯年が『新潮』創刊号に書いた『新潮発刊旨趣書』である。『新潮』第1巻第1号、1919年、『傅斯年全集』第1巻。
- 341 傅斯年「時代与曙光与危機」『傅斯年全集』第1巻、348頁。
- 342 傅斯年は自分が物理学や数学を学ぶことを宣言するとともに、留学した仲間へ自然科学をすすめた。王光祈は、これに対し、自分には自然科学は不向きだからと経済学を学ぶと言ったが、結局彼は、中国伝統音楽の研究という当時青年たちにとって予想外の専門分野に進んだ。近代音楽の発祥の地ドイツにおいて音楽学を学ぶことを選択したのである。
- 343 「造社会」論を書いたのちは、傅斯年は研究に専念して、時論を書く興味を全く失った。6年間の留学生活を終え、1926年冬に帰国し中山大学に赴任した。翌年春、中央研究院歴史語言研究所の創設に従事し、以後科学運動に邁進した。科学知識を備えた青年科学者を組織し、科学運動を発展させるとの事業は、彼が新文化運動時代に唱えた「造社会」論の実現に他ならない。
- 344 しかし彼自身は、中国の社会の改革に対して対案を提出することができなかつたため、学術研究に逃げ込んだと回想している。彼のこの言葉をどう理解するかは、今後の課題である。傅斯年「致胡適」（1942年2月6日付）『傅斯年全集』第7巻、235頁。
- 345 王光祈同上「旅欧通信、分業与互助」。
- 346 王光祈同上。
- 347 傅斯年は、「青年以外の中国人は頼むに足らない、現在の青年ばかりでなく、将来は又どうなるのか。天地間のことは、本来、突然に変質することはないし、我々は一方で、遺伝の支配を受け、一方で、環境に包囲されている。しかし科学の法則は、偽りではない。当然非常に危険が前面にある。」と述べていた（「青年的兩件事業」、1920年7月3-5日『晨报』、前掲『傅斯年全集』第1巻、384頁）。
- 348 同上。
- 349 傅斯年は、のちに移った台湾大学において、台湾大学の学生が中国古典の知識をほとんど持たないのを知り、古典教育の必要性を痛感し、再び「読経」の重要性を提唱、孟子の思想の意義を強調した。だが、これを以て、直ち

に彼の伝統文化への回帰と見ることはできないであろう。彼は、国粹主義を常に批判していたからである。彼にとっての儒学の意味、ひいては伝統文化総体に対する位置づけとその変遷については今後検討が必要である。王汎森『王汎森（王曉氷訳）『傅斯年——中国近代歴史与政治中的个体生命』生活・読書・新知三連書店、2012年、235頁。

350 傅斯年はこの「万惡之原」で、『実社自由録』が結婚制度の廃止を主張しているのに対し、自分は結婚を否定するのではないが、独身主義を堅持すると述べている。彼は天津府立中学堂で学んでいた16歳の時に、郷里で母の裁量によって、聊城の紳士の娘丁馥萃と結婚していた。しかし、既婚の傅は、この時点で独身を宣言している。後に、傅は1934年39歳の時、丁馥萃と離婚し、友人の妹俞大綵と再婚している。俞大綵は、上海滬江大学を卒業し現代的教育を受け、英語が得意であった。一方、王光祈は、やはり故郷に妻を残していた。呉虞の娘との恋愛事件で傷つき、それがきっかけで、当初の経済学研究の目的を音楽学の研究に転向したと言われる。惲代英は妻を遺産で失った。再婚を拒絶し、以後10年独身を宣言、10年の誓約を守った後に亡妻の妹と結婚している。この世代の青年知識人には結婚問題は極めて苦痛を伴うもので、彼らは自らの意思を貫くために相当の抵抗を行った。

351 本論第2部第2章参照。王光祈『少年中国運動』序言『少年中国運動』中華書局、1924年。『王光祈文集』第4巻、巴蜀書社、2009年。

352 前掲傅斯年「悼王光祈先生」。多くの留学生の実態は、このように真面目に学業にはげむ留学生生活を送っていたわけでは無かった。

353 傅斯年「時代与曙光与危機」欧陽哲生『傅斯年全集』第1巻、湖南教育出版社、356頁。

354 王光祈が平民教育講演団で行った演説には、3月4日の蟠桃宮のお祭りの縁日の「甚嗎是善」の題目と5月11日の「青島交渉失敗の原因」の題目の2つの演説が知られる。「北京大學平民教育講演団」講演報告『五四時期的社団』(二)143頁、147頁。「甚嗎是善」は、1919年4月26、27日『晨報』に連載された。『王光祈文集』第4巻に所収。なお、1919年5月11日『每週評論』に「為青島問題敬告協約国」が掲載されており、翌日の講演の内容が推測される。『王光祈文集』第4巻41—43頁。

355 傅斯年「追憶王光祈先生」は、左舜生等撰『王光祈先生紀念冊』王光祈先生紀念委員会編(『近代中国史料叢刊第19輯』)として文海出版社により再刊)の中の1篇である。『王光祈先生紀念冊』は、王光祈が、1936年ドイツのボンで客死した知らせを受け、彼を愛惜する友人たちが彼の追悼会を上海、南京、成都で開催し、彼を追憶する文章を寄せた。この回想録は、北京大学での傅斯年と王光祈の二人の交友関係を伝える文章である。それによると、傅斯年と王光祈が初めて会ったのは1918年である。たぶん1918年の秋であろう。丁度、傅斯年が、新潮社を組織し、翌年1月1日雑誌『新潮』を発行、学術、文学、社会の多方面で評論活動を開始していた時である。一方、王光祈は、北京にある私立中国大学を1918年夏に卒業し、卒業後は、北京大学の聴講生で、同郷の四川出身の北京大学学生と共同生活をしていた。李大釗とは、1918年7月、ともに少年中国学会を發起した関係にあり、一年後の正式成立を目指して準備中であつた。1918年から北京大学図書館長の職にあつた李大釗の北京大学図書館の部屋は、当時、新潮社社員や少年中国学会会員のたまり場でもあつた。李大釗は、新潮社のために北京大学図書館の一室を提供し活動の拠点としていたのである。傅斯年と王光祈は李大釗を通じて知りあい、互いに深く理解しあつた友人であつた。二人とも当時は、李大釗の影響を受けており、第一次世界大戦後の世界の動きとその思想に強い関心を持って、互いの認識とテーマを分ち合っていたようである。傅斯年は「社会革命——俄国式的革命」(『新潮』第1巻第1号、1919年、『傅斯年全集』第1巻)で、フランス革命を政治革命とし、それは大半が過去のものとなつたとみなし、ロシア式の社会革命がいたるところに、広まっていると述べている。一方、王光祈も当時、陳独秀や李大釗、張申府の発行した『每週評論』に撰稿者として参加し、若愚のペンネームで「国際社会之改造」(1918年12月22日『每週評論』、『王光祈文集』第4巻)『「国際的」革命」(1919年2月23日『每週評論』、『王光祈文集』第4巻)や「無政府主義者与国家社会主義」(1919年3月6日『每週評論』、『王光祈文集』第4巻)の記事を書き、ロシア革命を論じていた。王の文章の中には、傅斯年が「中国は無社会の国である」という言説を引用するなど、傅斯年から受けた影響のあとを見ることができる(「旅欧通信、分工与互助」(『少年中国』第2巻第7期、1921年、『王光祈文集』第4巻、478頁)。彼ら二人は、北京を舞台にした五四運動前後の時期において、新潮社、少年中国学会を組織して、当時の青年の間でいわゆる「スター」と賞賛されたほどの青年リーダーであつた。互いに影響を与え、互いを意識するライバル関係にあつたのではないかと推察される。

356 前掲傅斯年「追憶王光祈先生」、55頁。

357 成都の新聞社『群報』には、の高等師範付属中学堂の同級生であつた李劫人がいて『群報』の編集をしていた。李劫人は少年中国学会成都分会を組織した。フランスに留学し、帰国後は著名な作家となつた。

358 王光祈は、工読互助団の失敗を団員の「人」の問題であると考えたが、その考え方は、一生を通じて一貫していた彼の独立自主の生き方から導かれた。傅斯年は、1923年秋、ロンドンを去りベルリンに留学先を転じた時、一度王に会つたことがあつた。その時、王から極めて寡黙な印象を受けたという。傅は王が学問の修養が進歩したためであろうと考えたらしいが、実は、学会の中で、彼の少年中国学会に対する運動論が会員の多数に受け入れられなくなっていたのであり、その「孤立」した状況を写していたのが王の姿であつた。

359 王奇生、丸田孝志訳「個人・社会・党——五四運動前後の連関と発展——」村田雄二郎ほか編『リベラリズムの中国』有志舎、2011年。

360 前掲「五四偶談」90頁。

-
- ³⁶¹ 同上。文化は積み上げて山になる。後の者が先の者を追い越して、いよいよ文化は、高度なレベルに達することができる」と傅は述べていた。
- ³⁶² 前掲「“五四”二十五年」261—263頁。傅は国粹主義が国を誤った道に導くとして、文化保守主義者を批判した。
- ³⁶³ 傅斯年「青年的兩件事業」前掲『傅斯年全集』第1巻、387頁。
- ³⁶⁴ 傅斯年「中華民族是整個的」原載は、1935年12月15日『独立評論』第181号、『傅斯年全集』第4巻125—127頁。
- ³⁶⁵ 西村茂雄は、傅斯年の「中華民族是整個的」という議論にある意識と言説が、日本の侵略の激化という当時の政治情勢に於いて現実的な力を獲得しはじめていたことを指摘している。西村茂雄『20世紀中国の政治空間 「中華民國的国民国家」の凝集力』青木書店、2004年、57頁。

参考文献一覽

一 史料〔中国語〕 発表年順

- カウツキー(惲代英訳)『階級争闘』(『新青年叢書』第8冊)新青年社 1921年。
王光祈『少年中国運動』中華書局、1924年。
『每週評論』影印本、1号(1918年)—37号(1919年)、人民出版社、1954年。
中共中央編訳局編『五四時期期刊介紹』全6冊、人民出版社、1959年。
『中国青年』全4卷複製版、史泉書房、1970年。
王雲五主持『東方雜誌』複製版、台湾商務印書館、1976年。
張允侯・殷叙彝・洪清祥・王雲開編『五四時期的社団』全4卷、生活・讀書・新知三聯書店、1979年。
少年中国学会『少年中国』影印本全4卷(1919年—1924年)人民出版社、1980年。
甄克思著(嚴復訳)『社会通詮』(嚴復名著叢刊)商務印書館、1981年。
張羽・姚維闢・雍桂良編集『来鴻去燕録』北京出版社、1981年。
中央档案館・中国革命博物館・中共中央党校出版社編『惲代英日記』中共中央党校出版社、1981年。
張影輝・孔祥征編『五四運動在武漢史料選輯』1981年。
張重華他編『陳独秀被捕資料彙編』河南人民出版社、1982年。
毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集』全6卷(1917年—1939年)第2版、蒼蒼社(日本)1983年。
蔡元培『蔡元培全集』全3卷、中華書局、1984年。
李大釗『李大釗文集』上下、人民出版社、1984年。
惲代英『惲代英文集』上下、人民出版社、1984年。
陳独秀『陳独秀文章選編集』全3卷、三聯書店、1984年。
陳独秀『独秀文存』(1922年)、安徽人民出版社、1986年。
『新潮』影印本全2冊、上海書店、1986年。
『新青年』影印本全12冊、上海書店、1988年。
梁啓超『飲冰室合集』中華書局、1989年。
陳正茂・黃欣周・梅漸濃編『曾琦先生文集』上中下(中央研究院近代史研究所史料叢刊16)国史館、1993年。
王汎森・杜正勝編『傅斯年文物資料選輯』中央研究院歷史語言研究所、1995年。
王光祈『王光祈先生旅德存稿』(民国叢書第5編、75. 歴史地理類)上海書店、1996年。
胡明主編『胡適精品集』全15卷、光明日報出版社、1998年。
陳独秀等、王中江・苑淑姪選編『新青年——民主与科学的呼喚——』(醒獅叢書叢刊)中州古籍出版社、1999年。
羅炳良主編『天演論』華夏出版社、2002年。
歐陽哲生編『傅斯年全集』全7卷、湖南教育出版社、2003年。
杜亜泉著、許紀霖・田建業編『杜亜泉文存』上海教育出版社、2003年。
許祖華選編『嚴復作品精選』(現代文学名家作品精選)長江文芸出版社、2005年。
季羨林主編『胡適全集』全44卷、安徽教育出版社、2007年。
四川音楽学院・成都温江区人民政府編『王光祈文集』全4卷、四川出版集团・巴蜀書社、2009年。
丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、2009年。

二 年譜・回想録 発表年順

- 傅楽成『傅孟真先生年譜』文星出版社、1964年。
左舜生(沈雲龍主編)『近三十年見聞雜記』(近代中国史料叢刊第5輯)文海出版社、1967年。
左舜生等『王光祈先生紀念冊』影印版(近代中国史料叢刊第19輯)文海出版社、1968年。
李璜『学鈍室回憶録』(伝記文学叢刊27)伝記文学出版社、1978年。
李劫人『李劫人選集』第一卷「自伝」、四川人民出版社、1980年。

唐宝林·林茂生『陳独秀年譜』上海人民出版社、1988年。
王為松編『傅斯年印象』学林出版社、1997年。

三 研究書

1 《中国語》 發表年順

- 伍啓元『中国新文化運動概観』現代書局、1934年。
郭正昭·林瑞明合著『王光祈的一生與少年中国学会』百傑出版社、1978年。
汪榮祖主編『五四研究論文集』聯經出版事業公司、1979年。
張玉法主編『中国現代史論集第6輯五四運動』聯經出版事業公司、1981年。
『回憶惲代英』人民出版社、1982年。
田子渝·任武雄·李良明『惲代英伝記』湖北人民出版社、1984年。
李良明·哈経雄·黄傑編『惲代英學術討論會論文集(1985)』華中師範大学出版社、1985年。
王光遠編『陳独秀年譜：1879—1942』重慶出版社、1987年。
林毓生等『五四：多元的反思』三聯書店、1989年。
微拉·施瓦支、李国英等訳『中国的啓蒙運動——知識分子与五四遺産』山西人民出版社、1989年。
陳萬雄『五四新文化的源流』（三聯精選·10）三聯書店、1992年。
桑兵『清末新知識界的社團与活動』生活·讀書·新知三聯書店、1995年。
張羽·鉄鳳『惲代英伝』中国青年出版社、1995年。
『惲代英誕辰一百周年紀念會暨學術討論會論文集』華中師範大学、1996年。
馬寶珠『中国新文化運動史』文津出版社、1996年。
馬亮寬『傅斯年教育思想研究』遼寧教育出版社、1997年。
田子渝『武漢五四運動史』長江出版社、1999年。
周策縱(陳永明等訳)『五四運動史』岳麓書社、1999年。
郝斌·欧陽哲生主編『五四運動与二十世紀的中国』（北京大学紀年五四運動80周年國際學術研討會論文集）社会科学出版社、2001年。
王汎森『中国近代思想與學術的系譜』河北教育出版社、2001年。
李世濤主編『激進与保守之間的動蕩』時代文芸出版社、2002年。
張灝『時代的探索』中央研究院·聯經出版事業公司、2004年。
欧陽哲生『新文化的傳統——五四人物与思想研究』廣東人民出版社、2004年。
王憲明『語言、翻譯与政治 嚴復訳『社会通詮』研究』北京大学出版社、2005年。
李良明·鐘德濤主編『惲代英年譜』華中師範大学出版社、2005年。
石興沢『学林風景—傅斯年与他同時代的人』河南人民出版社、2005年。
李永春『『少年中国』与五四時期社会思潮』湖南人民出版社、2005年。
吳小龍『少年中国学会研究』上海三聯出版社、2006年。
何祥林·李良明『惲代英誕辰110周年紀年學術討論會論文集』華中師範大学、2006年。
布占祥·馬亮寬主編『傅斯年与中国文化(國際學術討論會論文集)』天津古籍出版社、2006年。
王汎森編『中国近代思想史的典型時代——張灝院士七秩祝寿論文集』聯經出版事業公司、2007年。
舒衡哲·劉京建訳『中国的啓蒙運動——知識分子与五四遺産』新星出版社、2007年。
王汎森『近代中国的史家與史学』香港三聯書店、2008年。
耿雲志主編『近代中国文化轉型研究導論』（近代中国文化轉型研究①）四川人民出版社2008年。
金觀濤·劉青峰『觀念史研究——中国現代重要政治術語形成』法律出版社、2009年。
楊念群『“五四”九十周年祭——一個“問題史”的回溯与反思』世界圖書出版社、2009年。
馬亮寬『傅斯年 社会政治活動与思想研究』中国社会科学出版社、2009年。
程方·馬亮寬共著『傅斯年伝』湖北人民出版社、2009年。
李泉·馬亮寬共著『傅斯年伝』紅旗出版社、2009年。
王奇生『革命與反革命 社会文化視野下的民国政治』社会科学文献出版社、2010年。
四川音樂学院高等教育研究所·成都市温江区文化廣播電視局編『崑崙巨声——「2009 王光祈研究 國際學術討論會」論文匯編』、巴蜀書社、2010年。

- 李良明『渾代英思想研究』人民出版社、2011年。
- 王志剛・馬亮寬主編『傅斯年學術思想的傳統與現代研討會論文集』天津人民出版社、2011年。
- 中国社会科学院近代史研究所編『記念五四運動九十周年國際學術論文集』上下、社会科学文献出版社、2012年。
- 王汎森（王曉冰訳）『傅斯年——中国近代歴史と政治中の個体生命』生活・読書・新知三連書店、2012年。
- 2 <英語> 発表年順
- Chou Tse-tung, *The May Fourth Movement: intellectual revolution in Modern China*[Harvard East Asian Studies 6,Harvard University Press,1960]。
- Vera Schwarcz,*The Chinese Enlightenment Intellectuals and the Legacy of the May Fourth Movement*[Berkeley,1986]。
- Wang fan-sen, *Fu Ssu-nien, A life in Chinese history and politics*[Cambridge University Press 2000]。
- Rana Mitter,*A Bitter Revolution:China's Struggle with the Modern World*[Oxford: oxford University Press,2004]。
- 3 <日本語>発表年順
- カウツキー（三輪寿壯訳）『エルフルト綱領解説』改造社、1930年。
- 橋樸『支那思想研究』日本評論社、1936年。
- 橋樸『支那社会研究』日本評論社、1936年。
- 内藤湖南『支那論』創元社、1938年。
- 実藤恵秀編『近代支那思想』光風館、1942年。
- カント（篠田英雄訳）『啓蒙とは何か』岩波書店、1950年。
- 橋樸『支那革命史論』日本評論社、1950年。
- ハッスリー（矢川徳光訳）『科学と教養』創元社、1952年。
- 毛沢東選集刊行会編訳『毛沢東選集』全7巻、三一書房、1955年。
- 橋樸『橋樸著作集』全4巻、勁草書房、1961年。
- ピョートル・クロポトキン（幸徳秋水訳）『麵麩の略取』岩波書店、1967年。
- 桑原隲蔵『桑原隲蔵全集』第4巻、岩波書店、1968年。
- 小野川秀美『清末政治思想史研究』みすず書房、1969年。
- 西順蔵・島田虔次編『清末民国初政治評論集』（中国古典文学大系 58）平凡社、1971年。
- 小野信爾・吉田富夫・狭間直樹『革命論集』（中国文明選 15）朝日新聞社、1972年。
- 島田虔次『王陽明集』（中国文明選 6）朝日新聞社、1975年。
- 齊藤毅『明治のことば 文明開化と日本語』講談社、1977年(2005年再版)。
- 横山英『辛亥革命研究序説』新歴史研究会、1977年。
- シュウォルツ（平野健一郎訳）『中国の近代化と知識人 嚴復と西洋』東京大学出版会、1978年。
- 小林文男『中国現代史の課題』勁草書房、1979年。
- 山田辰雄『中国国民党左派の研究』慶応通信、1980年。
- 野村浩一『近代日本の中国認識 アジアへの航跡』研文出版、1981年。
- 鈴木修治『日本漢語と中国 漢語文化圏の近代化』中公新書、1981年。
- 伊地智善継・山口一郎監修訳『孫文選集』全3巻、社会思想社、1985年。
- 横山英編『中国近代化と地方政治』勁草書房、1985年。
- 島田虔次『中国における近代思惟の挫折』筑摩書房、1986年。
- 中央大学科学研究所『五四運動史像の再検討』中央大学出版部、1986年。
- 荘司格一『中国の公案小説』研文出版、1988年。
- ポール・A・コーエン（佐藤慎一訳）『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』平凡社、1988年。
- 林毓生(丸山松幸・陳正醒訳)『中国の思想的危機』研文出版、1989年。
- 野村浩一『近代中国の思想世界——『新青年』の群像——』岩波書店、1990年。

西順蔵・近藤邦康訳『章炳麟集』岩波書店、1990年。
横山英・曾田三郎編『中国の近代化と政治的統合』溪水社、1992年。
斎藤道彦『五・四運動の虚像と実像——一九一九年五月四日 北京——』中央大学出版部、1992年。
内田義彦『日本資本主義の思想像』、岩波書店、1992年。
ギュスターヴ・ルボン(桜井成夫訳)『群集心理』講談社、1993年。
嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』研文出版、1994年。
新田義弘『『脱西欧の思想』(岩波講座現代思想 15)岩波書店、1994年。
高田淳『中国の近代と儒教』紀伊国屋書店、1994年。
今村仁司『近代性の構造——「企て」から「試み」へ』講談社、1994年。
富永健一『近代化の理論：近代化における西洋と東洋』講談社、1996年。
山田辰雄編『歴史のなかの現代中国』勁草書房、1996年。
今村仁司『群衆—モンスターの誕生』筑摩書房、1996年。
佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会、1996年。
坂野良吉・栃木利夫共著『中国国民革命 戦間期東アジアの地殻変動』法政大学出版局、1997年。
佐藤慎一編『近代中国の思索者たち』大修館書店、1998年。
土屋英雄編著『中国の人権と法 歴史、現在、そして展望』明石書店、1998年。
木村直恵『＜青年＞の誕生』新曜社、1998年。
狭間直樹編『共同研究梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、1999年。
竹内実編訳『毛沢東初期詞文集 中国はどこへ行くのか』岩波書店、2000年。
愛知大学現代中国学会編『特集五四運動と現代中国』『中国 21』第9号、2000年。
西村成雄編『現代中国の造変動 3 ナショナリズム—歴史からの接近』東京大学出版会、2000年。
馬場毅『近代華北民衆と紅槍会』汲古書院、2001年。
生松敬三『社会思想の歴史——ヘーゲル・マルクス・ウェーバー——』岩波書店、2002年。
島田虔次——『中国思想史の研究』京都大学学術研究会、2002年。
東アジア地域研究会・片山裕・西村茂雄『東アジア史像の新構築』(講座東アジア近現代史 4)青木書店、2002年。
小野信爾『五四運動在日本』汲古書院、2003年。
内藤湖南『東洋文化史』中央公論新社、2004年。
坂野良吉『中国国民革命政治過程の研究』校倉書房、2004年。
山田辰雄・家近亮子・浜口裕子編『橘樸 翻刻と研究』慶応義塾大学出版会、2005年。
小林武『章炳麟と明治思想：もう一つの近代』研文出版、2006年。
牛嶋憂子編『王光祈文献総目録——付著訳年譜——』アジア文化総合研究所出版会、2007年。
高柳信夫編著『中国における「近代知」の生成』(学習院大学東洋文化研究叢書)東方書店、2007年。
野村浩一『近代中国の政治文化 民権・立憲・皇権』岩波書店、2007年。
水羽信男『中国近代のリベラリズム』東方書店、2007年。
田原史起『二十世紀中国の革命と農村』(世界史リブレット 124)、山川出版社、2008年。
並木頼寿・井上裕正共著『中華帝国の危機』(世界の歴史 19)中央公論社、2008年。
區建英『自由と国民——嚴復の模索』東京大学出版会、2009年。
ピョートル・クロポトキン、大杉栄訳『相互扶助論』同時代社、2009年。
横山宏章『陳独秀の時代——「個性の解放」をめざして』慶応義塾大学出版会、2009年。
周程『福沢諭吉と陳独秀——東アジア近代科学啓蒙思想の黎明』東京学出版会、2010年。
並木頼寿『東アジアに「近代」を問う』(研文選書 106)研文出版、2010年。
深町英夫編訳『孫文革命文集』岩波書店、2011年。
村田雄二郎等編『リベラリズムの中国』有志舎、2011年。
水羽信男『中国の愛国と民主—章乃器とその時代』汲古書院、2012年。

- 小野信爾『青春群像——辛亥革命から五四運動へ——』汲古書院、2012年。
- 岸本美緒『民清史論集1 風俗と時代観』研文出版、2012年。
- ラナ・ミッター(吉澤誠一郎訳)『五四運動の残響 20世紀中国と近代世界』岩波書店、2012年。
- 村田雄二郎・趙景達・原田敬一・安田常雄編『講座東アジアの知識人3「社会」の発見と変容』有志舎、2013年。
- 横山宏章『中国の愚民主義「賢人支配」の100年』平凡社、2014年。
- 梁啓超(高嶋航訳)『新民説』平凡社、2014年。

四 研究論文

1 《中国語》発表年順

- 徐則浩「惲代英在安徽」李良明・哈経雄・黄傑編『惲代英學術討論会論文集(1985)』華中師範大学出版社、1985年。
- 欧陽哲生「胡適在不同時期对「五四」的評價」『二十一世紀双月刊』34期、1996年。
- 王汎森「清末民初的社会觀與傅斯年」『清華學報』第25卷第4号、1995年。
- 王汎森「傅斯年早期的“造社会”論——從两份未刊殘稿談起」『中国文化』第14期、1996年。
- 王汎森「明末清初思想中之「宗旨」」『大陸雜誌』第94卷第4期、1997年。
- 王汎森「近代中国私人領域的政治化」『当代』125、1998年。
- 王汎森「思潮與社会条件」余英時等著『五四新論：既非文芸復興・亦非啓蒙運動』聯經出版事業公司、1999年。
- 王汎森「中国近代思想中的傳統因素——兼論思想的本質與思想的效能」王汎森『中国近代思想与學術的系譜』、河北教育出版社、2001年。
- 王汎森「近代知識份子自我形象的轉變」国立台湾大学文学院『台大文史哲學報』第56期、2002年。
- 王汎森「從「新民」到「新人」——近代思想中關「自我」的幾個問題」王汎森編『中国近代思想史的典型時代——張灝院士七秩祝壽論文集』聯經出版事業公司、2007年。
- 王汎森「近代中国的線性歷史觀——以社会進化論中心的討論」『新史學』第19卷第2期、2008年。
- 王汎森「後五四的思想變化——以人生觀問題為例」『五四運動論著目錄初稿』(国家図書館叢刊・專題選目類)第14種)台北国家図書館、2009年。
- 王汎森「“主義”与“學問”——1920年代中国思想界的分裂」許紀霖編『啓蒙的遺產与反思』江蘇人民出版社、2010年。
- 許紀霖「重建社会重心；現代中国知識分子与公共空間」『公共空間中的知識分子』江蘇人民出版社、2007年。
- 許紀霖「作為社会運動的“五四”」『學術月刊』第41卷5月号、2009年。
- 許紀霖「五四；一場世界主義情懷的公民運動」許紀霖主編『啓蒙的遺產与反思』江蘇人民出版社、2010年。
- 許紀霖「啓蒙如何雖死猶生」許紀霖主編『啓蒙的遺產与反思』江蘇人民出版社、2010年。
- 耿雲志「傅斯年对五四運動的反思——從傅斯年致袁同礼的信談起」『歷史研究』2004年。
- 耿雲志「關於五四新文化運動的幾個問題」中国社会科学院近代史研究所編『紀念五四運動九十周年國際學術論文集』上冊、社会科学文献出版社、2012年。
- 余英時「中国近代思想史上的激進与保守」(1988年香港中文大學紀念講演)李世濤主編『激進与保守之間的動蕩』時代文芸出版社、2002年。
- 袁偉時「回答对新文化運動的三大責難——“五四”85周年にささげる」『人民大學復印報刊資料中国現代史』2004年。
- 劉媛媛「「兼收併蓄」下的「新旧之爭」——1917—1919年北大内部国故派与新文化派的對峙」布占祥・馬亮寬編『傅斯年与中国文化』天津古籍出版社、2006年。
- 楊念群「“社会”是一個關鍵詞：“五四解釋學”反思」『中国人民大学復印報刊(中国現代史)』2009年。
- 王奇生「新文化運動如何「運動」起来的——以『新青年』為視點」中国社会科学院近代史研究所民

国史研究室・四川師範大学歴史文化学院編『一九一〇年代的中国』社会科学出版社、2007年。

王奇生「個人・社会・群衆・党：五四前後の関連与演進」『革命與反命 社会文化視野下の民国政治』社会科学文献出版社、2010年。

2 《日本語》発表年順

熊野正平「厳復の中国社会論」一橋大学研究年報『社会学研究』第2号、1960年。

横山英「五四文化運動前夜の復古的イデオロギー」『広島大学文学部紀要（日本・東洋）』第28巻1号、1968年。

狭間直樹訳・解説「李大釗「少年中国」的「少年運動」——一九一九年」『革命論集』朝日新聞社、1972年。

楠瀬正明「梁啓超の国家論の本質——群概念の分析を通して」『史学研究』第121・122合併号、1974年。

佐藤慎一「二つの『革命史』をめぐって——辛亥革命の歴史意識（1）（2）」『法学』42巻2号、43巻1号、1978年・79年。

小野信爾「五四時期の理想主義——惲代英のばあい——」『東洋史研究』第38巻第2号、1979年。

後藤延子「蔡元培の哲学：民国的人間像の行動原理」『信州大学人文科学論集』第13号、1979年。

陳萬雄「辛亥革命時期の反伝統思想—併せて五四新文化運動の源流について」『史学研究』146号、1979年。

佐藤慎一「『清末啓蒙思想』の成立—世界像の変容を中心として」『国家学会雑誌』第92巻5・6号、1979年、93巻1・2号、1980年。

後藤延子「惲代英の出発——五四前夜の思想——」『信州大学人文科学論集』第16号、1982年。

楠瀬正明「民国初期における知識人の苦悩——黄遠庸を中心として——」広島大学総合科学部アジア研究講座『アジア研究』第3号、1983年。

坂野良吉、研究ノート「中国における一九二〇年代変革と新民主主義史観」『名古屋大学研究室報告』第9号、1984年。

横山英「清末ナショナリズムと国家有機体説」『広島大学文学部紀要（日本・東洋）』45、1986年。

尾崎文昭「周作人の新村提唱とその波紋——五四退潮期の文学状況（一）」上下、『明治大学教養論集』207・208号、1988・1991年。

佐藤慎一「模倣と反発」『法学』1988年。

佐藤慎一「儒教とナショナリズム」『中国——社会と文化』第4号、1989年。

砂山幸雄「『五四』の青年像——惲代英とアナキズム——」『アジア研究』第35巻第2号、1989年。

狭間直樹「五四運動の精神的前提——惲代英のアナキズムの時代性——」『東方学報』第61冊、1989年。

小野信爾「勞工神聖の麵麩——民国八年秋・北京の思想状況——」『東方学報』第61冊、1989年。

小野信爾「五四運動前後の王光祈」『花園大学研究紀要』22号、1990年。

三谷孝「紅槍会と郷村結合」『シリーズ 世界史への問い 社会的結合』岩波書店、1990年。

佐藤慎一「『天演論』以前の進化論——清末知識人の歴史意識をめぐって」『思想』792号、1990年。

岸本美緒「モラル・エコノミー論と中国社会研究」『思想』792号、1990年。

佐藤慎一「康有為と平和思想」『日本政治学会年報』1992年。

蛭名良亮「新文化運動期における陳独秀の「群衆心理」論」『中国研究月報』546号、1993年8月。

蛭名良亮「中華民国初期における大衆論の意味」『中国哲学研究』第7号、1993年12月。

石川啓二「中国に於ける教育独立論の系譜——少年中国学会と国家主義派」『山梨大学教育学部紀要』7、1993年。

後藤延子「惲代英の五四時期の思想—日記を中心に—（一）」『信州大学人文科学論集』第28号、

- 1994年。
- 後藤延子「惲代英の五四時期の思想—日記を中心に—(二)」同上第29号、1995年。
- 村田雄二郎「「文白」の彼方に—近代中国における国語問題(中国への視点)」『思想』853号、1995年。
- 佐藤慎一「梁啓超と社会進化論」『法学』59巻6号、1996年。
- 梁耆模「二つの中国訳『自由論』—『自由原理』と『群己權界論』—」『中国哲學研究』12号、1998年。
- 村田雄二郎「中華ナショナリズムの表象」『江戸の思想』8月号、1998年。
- 村田雄二郎「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」西村成雄編『現代中国の構造変動 3 ナショナリズム—歴史からの接近』東京大学出版会、2000年。
- 岸本美緒「時代区分論の現在」歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題 歴史学における方法的転回』青木書店、2002年。
- 後藤延子「惲代英と武漢五四運動」『近きに在りて』第43号、2003年。
- 竹元規人「歴史はいかに作られるか—初期顧頡剛における古史と民俗」『中国哲学研究』第19号、2003年。
- 藤井隆「梁啓超の合群論とナショナリズム」『広島修大論集』第44巻第1号、2003年。
- 吉澤誠一郎「中華民国に於ける「社会」と文化」の探求」『歴史学研究』779号、2003年。
- 坂野良吉「毛沢東の『五四』二〇周年記念論説を読む」上智大学文学部史学科編『歴史家の工房』上智大学、2003年。
- 坂野良吉「五四観の諸相と五四の文化論的テーマについて—一九二〇、三〇年代の五四観を中心に—」『名古屋大学東洋史研究報告』第28号、2004年。
- 緒形康「中国現代思想 1991—2003」『現代中国』78号、2004年。
- 川尻文彦「国際交流「日本漢語(新名詞)・中国の「現代性」・「一般思想史—黄興濤氏の議論に触発されて」『現代中国研究』第17号、2005年。
- 黄興濤(川尻文彦訳)「国際交流 清末民初、新名詞・新概念の「現代性」問題—「思想現代性と現代性を帯びた「社会」概念の中国での受容」『現代中国研究』第17号、2005年。
- 張小苑「五四新文化運動」と中国知識人—「伝統」と「近代」との「交錯」神戸市立外国語大学博士論文、2005年。
- 鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳—桑原隲蔵著述「東洋史」漢訳教材の考察—」『史学研究』第250号、2005年。
- 岸本美緒「中国史における「近世」の概念」『歴史学研究』821号、2006年。
- 石川禎浩「思い出せない日付—中国共産党の記念日」小関隆編『記念日の創造』人文書院、2007年。
- 竹元規人「近現代中国における考古学の命運」高柳信夫編『中国における「近代知」の生成』、東方書店、2007年。
- 藤井隆「「一盤散沙」の由来—広学会と戊戌変法運動」『現代中国』82号、2008年。
- 木村直恵「「society」と出会う—明治期における「社会」概念編成をめぐる歴史研究序説」『学習院女子大学紀要』第9号、2007年。
- 木村直恵「society」を想像する—幕末維新时期学者たちと「社会」概念」同上第11号、2009年。
- 佐藤慎一「歴史の変革と歴史学の変革—中国史解釈をめぐる民国期の論争について—」『中国哲学研究』第24号、2009年。
- 鈴木正弘「五四運動にともなう歴史教育の革新—社会認識と世界認識に基づく歴史教育構想」全国社会科教育学会編『社会科教育』2009年。
- 竹元規人「顧頡剛、傅斯年の中国上古史研究と民族論・疆域論」『中国哲学研究』第24号、2009年。
- 高柳信夫「清末啓蒙思想」の“その後”—嚴復・梁啓超を中心として—」『中国哲学研究』第24号、2009年。
- 後藤延子「李大釗学術討論会参加記(一)—(九)」『河上肇記念会会報』96号—104号、2010年—2013年。

- 吉澤誠一郎「中国における近代史学の形成——梁啓超「新史学」再読——」『歴史学研究』863号、2010年。
- 水羽信男「近代中国「民間社会」史再考——日本との比較から——」『アジア社会文化研究』第12号、アジア社会文化研究会、2011年。
- 吉澤誠一郎「近代中国における進化論受容の多様性」『メトロポリタン史学』7号、2011年。
- 王奇生（丸田孝志訳）「個人・社会・大衆・党——五四運動前後の連関と発展——」村田雄二郎ほか編『リベラリズムの中国』有志舎、2011年。
- 吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国——ラナ・ミッター『五四運動の残照』を手がかりに——」『思想』2012年。

五 辞典関係

- 諸橋轍次『中国古典名言事典』講談社、1979年。
- 山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、1995年。
- 溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化事典』東京大学出版会、2001年。
- 陳玉堂編著『中国近代人物名号大辞典』浙江古籍出版社、2005年。
- 廣松渉他編集『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年。